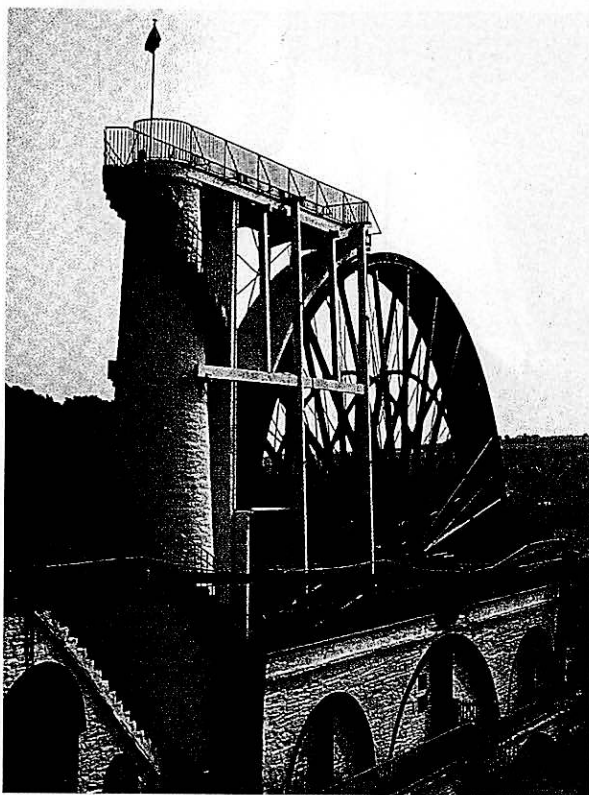


絵で考える科学・技術史(29)

レディ・イザベラ水車



マン島、グレート・ラキシ―鉱山会社の鉄製水車。高さ72.5フィートで出力は230HP（1馬力）程度であったという。水車のすぐ後の塔において、逆サイフォンの原理で水をくみあげ、水車を駆動した。この水車は鉱山用ポンプの動力として、1854年から1929年まで運転された。



今月のことば

よみがえれ！ いぐさ 藺草

大阪府箕面市立第一中学校
長谷川圭子

今年の本全国大会で、特別講座「藺草とその製品」を聴講した。作物学の世界的権威である小合龍夫先生は「いい畳が日本人の感性を豊かにする」と述べられた。この講演に触発された私は娘を誘って、藺草の地に出かけることにした。8月17日、倉敷市に実家のある赤木俊雄先生が案内役を引き受けて下さり、お父さまからも、次のようにはじまる手紙をいただいた。「今から30年前頃までは、岡山県では気候条件がよくて藺草の作付5,000町歩、畳表も全国一の生産をしておりました。当時の村の人たちは超一級の技術をもって生産しており、今はその子や孫がわずかに継続して、その仕事をしている人はこの村では十数軒しかありません。歴史は古く明治以前は座って手を以て織ったと思われます……」畳表業の小村夫妻、花菴業の小郷氏を訪ね、御座八幡宮（両児神社）の宮司、井上氏からも藺草の由来などもきくことができました。かつては家々で競争して、朝から晩まで織られていた。現在は、藺草も中国産のものを用い、織機の多くは稼働されていない現状が見えてきた。

午後は早島民俗資料館の見学、岡山産と広島産の藺草のちがいを、磯崎眠亀の偉大な業績、知らないことばかりであった。公民館では花ござ手織技術の伝承を絶やすまいと活躍されている講師の信木氏と3名のボランティア女性が、私たちのために休日を返上して織りを見せて下さった。

早島の町で畳表問屋奉納石燈籠を探し、更に車を走らせて水島コンビナートを山上から眺め、そして瀬戸大橋の眺望が美しい鷺羽山公園に着いた。

「水島にコンビナートができれば、人々は幸せになれると誰もが信じていた。しかし、水島が隆盛をきわめていくにつれ、藺草は次第に採れなくなってきた。そしてそのことについて教師は何もいわなかった。そのことが問題なのだ」と赤木先生がポツリと言った。私はこの言葉に固唾のみ、足元がすくむ思いがした。夕暮れの中に立つ赤木先生の大きな身体がまるで仁王像のように見え、人間の所業の怖さに震えた。昔、藺草、畳表の特産地として栄えた早島は、近代交通の要衝として生まれ変わり、その活動を取り戻そうとしている。早島の町へと明日も旅をつづけることになる。

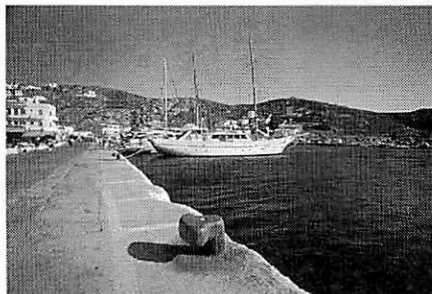
▼ [特集]

家族・家庭と「家庭生活」

- 「家族」内容をアメリカの教科書から学ぶ 田中弘子……………4
- 国際家族年と「保育領域」の課題 諏訪きぬ……………10
- 図書館と連携した保育学習 貴村宣子……………16
課題別学習とブックトーク
- 家族と保育の接点を求めて 首藤真弓……………22
保育を「家庭生活」に融合させた指導計画
- 母親の自立と保育 熊山孝子……………26
おかあさん！ とともにがんばりましょう
- 家庭経済を消費生活センターで学ぶ 細川律子……………31
- りんごの皮むきから愛情弁当作りへ 玄馬佐知子……………36
「家庭生活」における「食生活」の実践
- 家族の役割と人間関係 大沼洋子……………42
高校「生活一般」に交流分析を導入する
- おもちゃと保育 荒井智子……………48
保育園訪問の体験から

▼記念講演

- 自然と食と教育を結ぶもの(2) 坂本 尚……………52
江戸時代と現代を重ねて見えてくるもの



▼連載

- 「新塾」ノススメ……「新学力観」批判……③ゴミ問題、あなたにとって問題ですか？
片岡則夫……………74
- 紡績機械の発展史⑩産業革命時の水力式綿紡績工場（1） 日下部信幸……………58
- くだもの・やさいと文化⑩カンキツ（3）ユズ 今井敬潤……………62
- 文芸・技芸④おばあちゃん 橋本靖雄……………80
- パソコンソフト体験記⑩教員が開発した情報基礎「オートマ君」
本多満正……………64
- すくらっぷ⑥イメージトレーニング ごとうたつお……………72
- 私の教科書活用法①[技術科]なぜ技術科が嫌いになるか 飯田 朗……………68
[家庭科]ソバのはなし 青木香保里……………70
- 新先端技術最前線④光ファイバー大型ディスプレイに動画像を映す
日刊工業新聞社「トリガー」編集室……………66
- 絵で考える科学・技術史④レティ・イザベラ水車 山口 歩……………口絵
- 技術・家庭科教育実践史⑦家庭科教材を技術教育的視点で再編成した実践（16）
向山玉雄……………82

▼産教連研究報告

- '94年東京サークル研究の歩み（その9） 産教連研究部……………86

■今月のことば

- よみがえれ！ 蘭草 長谷川圭子……………1

- 教育時評……………81
- 月報 技術と教育……………88
- 図書紹介……………89
- '94年度総目次……………90
- BOOK……………21・35

Editor ■産業教育研究連盟 Publisher ■農山漁村文化協会
Cover photo ■真木 進 Art direction ■栗山 淳

家族・家庭と「家庭生活」

「家族」内容をアメリカの教科書から学ぶ

田中 弘子

1 家庭科教育の前史

家庭科教育の守備範囲を生活技術ないし、「物的要素（自然）と人的要素（人文・社会）を両輪とする生活教育」とすると、その背景の家政史に考え及ぼざるをえない。それが古代ギリシャまで遡ることは、周知の事実である¹⁾。

古代ギリシャの家政論争においては、アリストテレスがひとり、国政や村共同とは別の、独自の価値として「家政」をたてている。また、家における生産＝経済の重要性と同時に、いっそう人的関係に注目している。つまり、生殖のために男女が一緒になるのが家の基礎で、次に、主人が奴隷を、父が子を、夫が妻を支配する関係が家政術だというのである。

ヨーロッパにおいては、農業経済が続く限り近代以前まで、家政は上述の延長線上にあった。17世紀を中心に、いわゆる「家父の書」といわれる男による家政の書が残されている²⁾。これらは、生活を中心とする農学・気象学など諸科学の総合となっているが、特徴的なことは家父と家母の仕事の領分が明文化されていることである。家母の仕事は、糸紡・針仕事・醸造品・薬品・乳・肉製品・その他の保存食品など生活技術（収入）労働と、女子教育が中心である。

ほぼ同時期に、日本においてもこれに匹敵するような家政の書がある³⁾。家父長に対しては「家」をまもる精神と心掛け（「家を治むる、財、計」など）であり、女性に対しては「家」とさらに男性に仕える「婦徳」を要請している。婦徳の1つが「女紅」で、それは「おりぬい、うみつむぎ、すすぎあらい、食をととのえ、きぬをたたみ、席をはき、子をそだててけがれをあらい、」という内容である。相当の技術を伴うこの女紅を中心とする婦徳が、近世・近代の女子教育の中で、各時代の要請にこたえて変転しつつ継承されたわけである。

しかし日本の人口の9割方を占めた庶民階層では、女性も子どももつねに生産労働に従事していた。注目すべきこととして、子どもの「手伝仕事」は厳し

いが、時には遊びやご褒美がそこに融合する独特の歴史があり、それが徐々に姿を消していったのはつい30年以前のことである⁴⁾。

しかしながら、日本の家庭科教育の前史としては、「家」の意識・男尊女卑という背景を維持しつつ、明治期より戦争をくぐって、「裁縫」と「家事」の柱を中心とした女子教育の伝統を維持してきたのである。

2 “幻の教科書”『家族』

近代にいたって生産＝経済の場が市場に集中するようになると、とくに中産階層では、家には「家事」要員（ないし、せいぜい消費要員）として専ら女性が残った。このことをヨーロッパの家政の歴史あるいは女性総体からみれば、「女性の地位は転落した」といえる⁵⁾。20世紀初頭に家政学の体系を誕生させたのが、早くから消費経済が発達していたアメリカにおいてであった事実も頷ける。

日本において敗戦後、民主化の実現にとって「家」の解体が大きな課題の1つであった。法制度上は廃止できたが、教育の中でそれを具体化していくにあたって、「男女共学」の原則と「社会」「家庭」教科の新設がその役割を担うはずであった。家庭科で家族の問題を直接あつかっている教科書は、4社の『家族』（1951年から最長1961年まで使用）で、中川善之助他2名著、『家族』（1949年）（以下、1949年『家族』のように略す）の内容は（表1）の通りである。第2版（1950年）では、すでに初版の単元1の5および単元6、7は省かれている。以後は現在にいたるまでこの

表1 中川善之助他2名著、『家族』、1949（93頁）

単元1	私の家庭と家族
1	私を知る
2	私の家庭と家族生活
3	これからの家庭
4	家庭と社会
*5	よりよい家庭を目ざして
単元2	友だちと隣人と親類
単元3	成人するとは
単元4	結婚準備
単元5	結婚生活に成功するには
*単元6	親になる
*単元7	仕事に成功するには

（'50『家族』では、*は省かれている）

表2 E. デュヴァル著 D. ルイス編、『FAMILY LIVING』、1950（山本訳、『家族生活』、1963（再版））

単元1	どうしてあなたの人格は成長しますか
単元2	家庭での生活（青年と両親は一緒に成長します）
単元3	人々と仲よく暮らして行くこと（テイトに必要な技術，ゴーイングステディ）
単元4	いつの日か来る結婚を待って（個人誤差，あなた方の意見の相違を解決する，働く妻）
*単元5	あなたの生活における子どもたち
*単元6	私共の現代的アメリカの家族

（'63山本訳では、*は訳されていない）

教科書名は存在せず、いわば“幻の教科書”といえる。

ところで、1949年『家族』には、当時のアメリカの教科書E. デュヴァル著、D. ルイス編、『FAMILY LIVING』(1950年)(表2)の影響が顕著である(ルイスは日本の家庭科創設に関与。)アメリカの家族領域に関する教科書の特徴には、(1)個人の確立、他の人間との関係、結婚、家族、生活という構成がほぼ一定している。(2)ボリュームが厚く懇切丁寧な語りかけの文章で、「手引き書」的である。(3)現実を率直にとらえる努力がみられる、などの点が挙げられ、これらは今に引き継がれている(表3)。

日本においては前述の時期以後は、家族領域は大幅に縮小して他の科目に組み込まれたり、社会科の公民・倫理社会の中に移行したりと、変動がはげしい。その扱いの特徴として、(1)生活管理に密着しており、家族領域が独立していない。(2)道徳や法律・歴史などの客観的な知識が中心である。(3)核家族・高齢化など特定の現実問題に結び付ける、などの傾向がみられる。

表3 中・高校用の家族関連教科書リスト

Teen Guide, 7th edition, 7-9, 1990
Teen Living, Middle School, 1991
Life Management, 8-11, 1991
Creative Living, 9-12, 1990
Family Living, 10-12, 1991
Homes: Today and Tomorrow, 4th edition, 9-12, 1990
Child Development: Roles, Responsibilities, Resources, 1990
Parenting and Teaching Young Children, 2nd edition, 9-12, 1990
Married and Single Life, 5th edition, 9-12, 1992

3 現代のアメリカの教科書

アメリカにおける教科書の採択や扱いは州・学校によって異なり、家庭科の関連科目は基本的に共学・選択制である。生徒のニーズに合わせること、教科書が鮮やかな色刷りで読みやすく、教室備え付けの年間貸し出し制が多いという特色がある。また、内容についてとくに1960年代から1970年代にかけて以来、女性を含めた弱者の権利にたいする認識の必要と、健康・環境・消費に加えて職業教育の必要がいわれ、各関係教科にわたって盛り込まれている。

家族領域に関し、現在のアメリカで比較的多く使用され、日本でも一部が翻訳されている教科書『ティーン・ガイド』(V. チェンバレン、1985、7—9学年)と、『Family Living』(リーベンワース他、1991、10—12学年)の内容構成は、表4、表5の通りである。

『ティーン・ガイド』の第10章「家族とは何か」では、はじめに身のまわり

表4 V. チェンバレン著『ティーン・ガイド』、1985 (牧野監訳、1992) の目次の構成 (一部省略)

第1部 人間関係
第1章 一人しかいない自分、大勢の中の一人
第6章 大人になること
第7章 友達
第8章 男の子と女の子
第9章 人々を援助する職業
第2部 家族
第10章 家族とは何か
第11章 家族はどのように変化するのでしょうか
第12章 家族の中の人々
第13章 あなたとあなたの家族
第14章 子どもの成長
第17章 家族や子どもを援助する職業
第3部 住生活
第4部 資源
* 第5部 被服
* 第6部 食物

(* (後半) は、まだ出版されていない)

表5 リーベンワース他著、『Family Living』、1991の目次の構成

U 1 Understanding Yourself and Others
1 Defining Yourself
2 Understanding Others
3 Loving Relationships
4 Taking Responsibility
U 2 Life Relationships
5 Getting Married
6 Making Adjustments
7 Today's Families
U 3 Family Life
8 Having a Baby
9 Growing and Learning
10 Parenting
11 Facing Family Changes
12 Resolving Family Crisis
U 4 Life Management
13 Choosing a Career
14 Balancing Need and Resources
15 Managing Your Environments
16 Managing Independent Living
17 Keeping Healthy
18 Enjoying good Nutrition

の家族のタイプの例を7つ挙げ、本文には現代的な類型6つ(核・ひとり親・混合・養親子・拡大・夫婦)の説明をおこなっている。第11章「家族はどのように変化するのでしょうか」では、家族のライフ・サイクルを6期に分けているが、「3つの段階を飛び越えるかもしれない」「両親は離婚し再婚して別の家族を作り2段階戻るかもしれない」など、各段階・個々の立場について注意深い説明があり、また変化への対処に注意を向けさせている。

『Family Living』の第7章、第11章、第12章(表5参照)は、上記の問題をさらに詳細に展開し、実際的な解決の方法の例示や社会的な支援機関の紹介、およびその様な職業につくための情報を提供している。とくに、「離婚・老い・死・暴力」などの、悲しみや苦痛への内面的な準備と対処など、非常に現実的かつ濃やかである。

総じて、家族は「多様で個性的」であること、また「それぞれのライフ・サ

イクルを変動」し、各段階で「様々の問題や変化」に向かわねばならないことをわかりやすく語りかけているのである。

4 「家族」展開のための指標

アメリカのこれまで見てきた教科書は、「語りかけ」であり「手引き書」的であるが、しばしばそこに一定の著者の持論とその裏付けとなる実証的研究がみられる。高校生用の教科書では、直接その研究を紹介し引用している。したがって、時によって読者が支持できない場合や、少し強引であるような印象をもつ箇所もあるだろう。逆の見方をすれば、科目の選択制と教科書採択の自由こそが、著者の個性的な理論の展開を保障していると言えるのである。また、読者の厳しい検証に耐えるものが、読まれ続けることになる。

しかし結局は、家族研究がどこまで進んでいるのか、また家族認識に関する世論が現在どこにあるのか、について深くとらえる努力が必須であると考えられる。たとえば1960年代のフランスの歴史学派の提起以来、「近代の小家族」が産業との関連で現出し、家族自体が歴史的に変化し、文化によって多様であることが明らかにされて来ている。そして1960年から70年代にかけての大衆的な

提起により、弱者の立場の権利について、少なくとも認識を深める努力がなされている。国際家族年の原則と目的にも人権問題を謳っており、家族について一定の定義はできないことが前提とされている(図1)。

さて、私たちの実際の授業展開において家族領域の扱いの難しさは、価値観に踏み込みやすいこと、多様性と同時に変動という動的要素があること、従ってアプローチ

の方法が多くあることなどがよくいわれるが、これらは相互に関係がある。これらの点を踏まえて、種々の方法で扱う家族領域の内容について、指標の図式化を試みたのが図2である。また、生活管理(または生活設計)について、主体を「個人の意志」におき、概念図を試みたのが図3である。

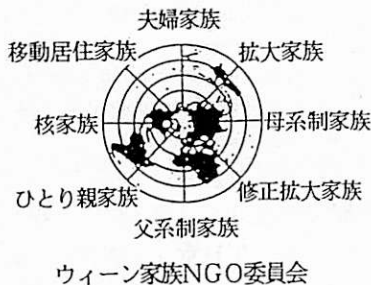


図1 1994年 国際家族年

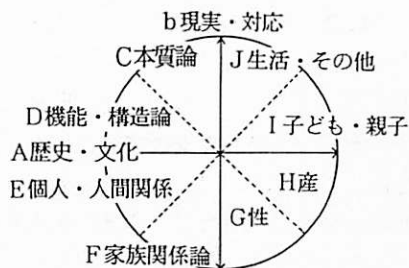


図2 家族領域内容の指標案

たとえば、特定の家族問題や生活課題、社会事象について取り上げるとき、それらの問題が図2、図3においてどのような位置にあり、自分自身の意志や権利・責任の延長線上にその問題を生きてとらえ、どのように実践できるかについて、情報と意見をだしあう過程に意味を見出せるのではないか。

逆に、たとえば「家族」の一定の機能・類型・構造・役割の提示や例示をもって導入すると、平板な知識や固定的な学習の対象となるのを免れず、また、道徳やたてまえが先行しやすく、現実を直視し、原理を発見・認識することを一層難しくすると考えられるのである。

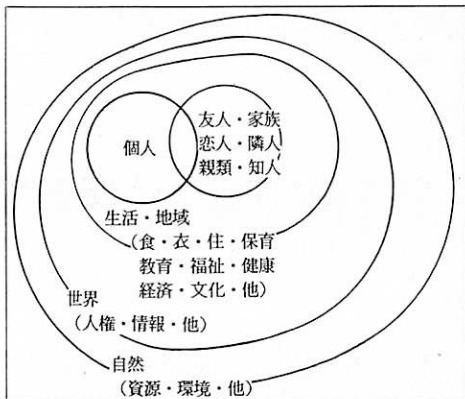


図3 生活設計の概念図

5 結 び

欧米の家族の歴史は男女の対を基礎とし、アメリカの現在の家族関連の教科書にもデイトニングや結婚へのとらわれが強いことが見てとれる。同時に、生き方の多様さを受け入れるための、個の確立(生活設計もこれに基づいている)と人間関係についての訓練に力をいれていることもまた事実である。アメリカの「家政学」が、今年('94)「家族と消費者学」に本格的に移行するのもこのような歴史の延長線上においてであろう。

これにたいして、少なからず人々の意識の中に「家」を引きずっている日本においては、家庭科教科書の家族領域では、家庭の機能・家族の役割を強調し、あるいは家庭管理と密接である。したがって、日本においては、とくに個人の視点と家族の本質論、そして現実の個々の問題分析が重要である。

文 献

- 1) アリストテレス、「ポリイティカ」、前4C
- 2) W. ホーベルク、「農業技術または貴族の農村生活」、1682
- 3) 貝原益軒、「家道訓」、1712 同、「和俗童子訓」、1710
- 4) 竹内利美、「上伊那郡川島村郷土誌」、1934
田中、「近世・子どもの行事にみられる日本人の教育観」、1989
- 5) A. オークレイ、「主婦の誕生」、1974 (岩手・県立盛岡短期大学)

国際家族年と「保育領域」の課題

諏訪 きぬ

1 中学校技術・家庭科「保育」領域のあり方をめぐって

家庭科専修の学生は、3年次に基礎実習を1週間、付属中学校で行なうことになっています。実習も終わり近くなつたある日のこと、夕暮れてから3人の学生が研究室にドヤドヤとやってきました。「先生、先生、保育領域があたっちゃったの」と、いかにも困つた様子なのです。

彼女たちの言い分はこうなのです。「大体ね、中学生は家族なんて、関心ないんですよ」、「それに子どもの発達といつてもいまいちですしね」「子どもの発達と遊び、この2ページを明日やらなくてははいけないけれど……どーしましょう」ということなのです。「調理や被服があつたほうが、まだいいですよ」という訴えも、「なるほど」と同感できます。

「保育領域」は将来への準備教育か

格好悪いので一度も着たことのないまま、今もちょっと引き^つ攀れたゆかたがとつてあります。私の中学時代の家庭科の作品です。それでも当時、それを作ることは、「自分のため」という大義名分がありました。またハンバーグづくりなどの調理実習も自活への一歩と位置づけることができるでしょう。中学生時代を生きるその過程で、より自立的に生きる手立てを用意することができれば、家庭科学習は、それなりに有意義であり、学習の動機づけもしやすいのですが、「幼児の遊び・食物及び被服に関する学習を通して、その心身の発達に応じた生活について理解させ、幼児に対する関心を高める」との目標に沿って、単なる知識として幼児の発達を学んだり、義務的に遊具を工夫したり、遊び着をつくつたりすることに中学生が関心を寄せることは、むつかしいことのように思われます。

今に生かせる学習への転換

「子ども時代」を抜け出して、やつと「大人」の入り口に立つた彼らにとつ

て、過ぎにし過去より未知なる未来への不安や関心のほうが、ずっと大きいに違いないからです。いかに「大人になりたくない」と思っている中学生が増えているとはいっても、だからといって乳幼児の世界にストレートに関心が向いているわけではないでしょう。大人になることを自らの射程距離に置いたときに、「大人になりたくない」という彼らの逡巡は生ずるのであり、そこにこそ「生きる」意味を考えあつていく手掛かりがあるように思います。

「必要は発明の母」といいますが、学習もまた近未来の必要性に裏付けられることが望ましいわけです。ことに家庭科のように、実務的性格を多分にもつ科目の場合には、学ぶものにとっての「現在」の必要性を問うことが求められます。将来、それもずーっと遠い将来（女性の40%、男性の70%以上が20代を独身で過ごす）のためではなく、中学生にとって今に生かせる保育領域の学習とは何なのかを問い直すことは、家庭科教育の今日的課題のひとつといえるでしょう。

実習生の指導案は「①それぞれの子ども時代の遊びについて思い出しながら、幼児の遊びについて話し合う。②出された遊びの中から、ボール遊びを取り出して、どんな遊びをしたか、どんな遊びが楽しめるかを出し合ってみる。③それらの遊びを幼児の発達とかかわらせて順に並べ、発達と遊びの関係についてまとめる。④幼児と遊ぶときの心得について、出しあってみる。」というところで落ち着きましたが、翌日は「うまくいくものかどうか」気掛かりな1日となりました。

2 国際家族年と教育の課題

「今を生きる」という視点から、「保育領域」を考える手掛かりとして、日本家政学会国際交流委員会が作成した「1994年国際家族年（I Y F）の活動を推進するための日本家政学分野におけるチェックリスト試案」（1993年3月）を見てみることにしましょう。この試案は、I Y Fに対する日本家政学会としての活動への提言から家政学会員の私的生活の場における取り組み、さらには関連学会などへのはたらきかけまで広範な内容を包含したものですから、いろいろな受けとめが可能です。ここでは、「6.日本家政学会員の教育（幼・小・中・高・大学など）における取り組み」で、何が課題として提起されたかを紹介することにしましょう。

教育の場の取り組み—10項目の提言

詳しくは日本家政学会誌（Vol.44 No.5 1993）をご覧ください。こととして、

提言されている10項目を簡単にまとめて書き出してみましょう。

- (1) 教育計画に家族の問題を含める（例えば多様な家族のあり方などをテーマにする）。
- (2) “家族の意味”について考えられるようにする（男女それぞれが尊重しあえる人間関係を築く）。
- (3) 男女を問わず、日常生活のために必要な技術を教え、生活を営むための能力を育成する。
- (4) 単親家族に配慮しつつ、家族と一緒に過ごす意味を考えさせる。
- (5) 乳幼児や高齢者、障害者、病人、薬物やアルコール中毒者などがかかえる家族に目を向け、この対応について学習する機会を設ける。
- (6) 男女それぞれの役割や役割期待について、歴史的に将来をも見通して考える。
- (7) 養護や介護に家族全員が参加するようにする。
- (8) 男性の家庭生活への参加、役割分担の大切さを教える。
- (9) 人間の一生の一過程として家族生活や結婚生活をとらえ、それぞれの周期に生起する問題に柔軟に適應すべきことに気づかせる。
- (10) 地域社会や国の家族に対する対策を理解し、必要な社会的サポートについても意見をもてるようにする。

否定をくぐって家族に突き当たる

中学生になると、親へのまなざしが急に辛辣さを増してくることは、誰しも実感済みのことです。自分の中学生時代に思いをはせれば、母親の一挙手一投足がイヤでイヤで仕方のなかった時期があったし、兄が母親に優しく接しられていることに嫉妬さえ感じたものでした。母親となってわが息子や娘と暮らした生活を顧みても、同じようなことが言えるように思われます。とくに娘との仲はギクシャクしたもので、中学2年生頃から高校2年生頃までの3～4年間は、実にささいなことで角を突き合せていたような気がします。母親好みの洋服を何の抵抗もなく喜んでさえ着ていた娘に、ある時突然に「こんなヒラヒラしたものはわたしは嫌いな」と挑戦的に宣言されるわけです。この宣言を「子どもの独立宣言」として聞けるだけの親側の準備ができていないと、対立の様相は徐々に深化していき、親は自分の思いを阻む「じじい」や「ばばあ」になり下げられてしまいます。

ここまでいかなくても「どうしてお父さんのような人と結婚したの？ 今まで退屈じゃなかったの？」と息子に真顔で聞かれてオタオタした、という類い

の母親の述懐もよく耳にしますし、「おばあちゃん(おじいちゃんのこともある)の入ったお風呂は汚いから入らない」といって困ったというのもよく聞く話です。要するに思春期は、自分へのこだわりを通して自分を取り巻く身近な者たちへ厳しく否定的なまなざしを向ける時期として、特色づけることができます。中学生に対するこうした発達の理解をベースにしておくことなしに、家族や保育の学習のあり方を問うことはむつかしいことのように思われます。高校生活も後半にさしかかると、現実の生活をより深く見つめられるようになることも手伝って、親に対する態度も随分やわらかに変わって来ます。親も子どもとの葛藤の体験を通して、子どもの自立(律)性や独立性の大切さをわかっていくのでしょうか。このような現実の家族関係の変容もまた家族や保育学習の基盤を用意してくれるでしょう。

こうした親子や家族の関係の変化を考えると、中学生時代に「親子や家族の否定をくぐること」、そして高校生時代になって改めて「家族に突き当たっていくこと」の教育的意味を考え直してみることで、換言すれば中学レベルと高校レベルとは、家族や保育学習の重点の置き方をかなり変える必要があるということになるのでしょうか。

自分から他者への過程を基軸にする

こうした視点から、先にあげた10項目を眺めてみると、1項目1項目をていねいに吟味してみる必要があります。ここでは基本的な視点のみ記してみようと思います。

まず第1に全体のトーンが、家族の意味を強化する方向を向いていることが気になります。恐らくそれだけで中学生の反発は避けられないと見なければなりません。10項目のなかでは、(3)の「生活能力の形成」を基軸に、家族の庇護から抜け出してどう自立できるかを追求してみるような実践の方が、家族や家庭に視点を閉ざしていくようなものより望ましいように思われます。

その延長で考えれば、「男女の結びつきによる家族の原理」よりは「個の原理」に立ってみる必要があるのではないかというのが第2の点です。男も女も生活(家事・育児)に必要なとされる実務的能力をもち、他人に頼らず自分の力で生きていく(経済的・精神的自立)という今日的テーマを追求することが、自己を社会的に把握し確立していくことにつながっていくのではないかと思うのです。自分のもつどの点を生かして生きていきたいか、どんな生き方をしたいのか、親の生き方を批判的に考察した向こう側に描き出される人生のイメージこそ、個を支えるものとして大切なものに思えます。そのことは、それぞれの自

立のテーマの先に、恐らくは男女共生のテーマが取り出されなければならないのではないかということの意味しているともいえるのです。

3 保育領域の学習への提案

最近保育領域の学習の実践として、中学や高校に広がって来ているもののひとつに「保育園や幼稚園での保育見学や実習」の取り組みがあります。1回2時間だけの短時間のものであれば、夏や冬の休みを利用して2～3日にわたるものもあります。また全員を対象に行なわれるものとボランティア的に扱われるものとあるようです。それらの効果もいろいろに評価されはじめてきましたが、ここでは次の点からその意義をとらえておきたいと思います。

無理なく生まれる幼い他者とのかわり

園見学や保育実習の長所は、第1に、家族だの乳幼児の発達だのいう前に、懸命に生きている幼い命と向き合えることです。ただそこに行って、子どもたちの活動する姿に接するだけで、自分と異なる幼い他者を発見できるし、その意欲的な様子に引き付けられます。またそのあどけない姿を通して自分の生い立ちにも関心が向けられるきっかけをしばしば与えてくれたりもします。家族関係のなかでは、煩わしく感じられ始めた他者との関係が、子どもたちになつかれ、お相手をしているうちに、次第に心開かれ、他者と共にある心地よささえ感じ取る生徒も出てくるわけです。

第2には、中学生がかなり容易に「自分が他者のために役立つ」という体験ができる場でもあるということです。幼い子どもは、どの子も自分を第一に見てほしい、手をかけてほしいと欲し、子どもの方から積極的に人を求めてきますから、子どもと自分との特定の関係が作りやすいこと、さらには子どもはわずかなことでも喜びを表してくれますから、「何かして喜ばせてあげたい」という気持ちを子どもたちが生徒の方に喚起してくれることなど、子どもの園は、他者との関係づくりを成立させる好条件を備えています。ツッパリの生徒が子どもたちの人気者になり、「オニイチャン、オニイチャン」、「オネエチャン、オネエチャン」と慕われることによって、学校での態度も変わってきたというようなことを、時折耳にするのもまさにこうした効果です。

第3には、園側の受け入れ体制を工夫し、学校側も見学や実習のスタイルを組み立て直せば、客観的にリアルな親子の関係や働く親の忙しげな姿、単親家庭の大変さやけなげさなど、さまざまな家庭のあり方や生き様を垣間見る機会が得られることです。1～2時間の見学だけではなく、総合学習風に位置づけ、

もう少し突っ込んだレクチャーを園側をお願いすることによって、もっと意味ある学習の場になるように思います。他所の家庭や家族のあり方を通して、自分の家庭や家族が見えてくる、さらには自分の将来のあり方を描いてみる……そんな学習の条件が園のなかにはたくさんあるように思います。なぜなら幼稚園は親が子育ての一部を委託する現実の場であり、保育園は、親たちが仕事と子育てを両立させるために、日々懸命な姿を見せてくれる実際の場だからです。

他者に役立つ自分と出会う場を

青年たちが大人になるのを躊躇する「モラトリアム現象」について、河合雅雄氏が面白い見方を提示しています。「社会的・文化的環境の変化により、われわれは80歳という一生を持つことになったが、モラトリアム現象はネオテニーに基づく青年期の延長の生物的主張だ、というふうには考えられないだろうか。そうだとすれば、モラトリアム現象を単に負のまなざしで見のではなく、生物的自然現象の一つとして肯定する目も必要であろう」というのです。（『子どもと自然』岩波新書1990、p. 44。〈注〉ネオテニーとは、幼形成熟のこと。ちなみに河合氏は、脳の発達が十分になし遂げられ、頭骨の縫合が完了する27歳頃までを青年期とすべきことを提唱している。）

こうした視点にも触発されながらも、長くなる一方の準備教育期間の中に、勉強ともスポーツとも異なる仕事の間があってもよいのではないかと思うのです。保育の授業の延長線上に、園でのボランティア活動や一部アルバイトのようなものが組織されるような取り組みは望めないかということです。学校5日制を視野におきつつ、掃除や食事の後片付けなど簡単な仕事の手伝いや補助の部分に生徒の手を借りるような場を教育的に用意していくことは考えられないかということなのです。かつての児童労働に戻るのではなく、本物の仕事を提供することによって「他者に役立つ自分と出会う」場を作り出すことができれば、今日の密着した親子関係に多少の距離を生ずることもできるでしょう。

かつては家庭のなかにお手伝いを必要とする作業がたくさんありました。子どもたちは、お手伝いをしてもらって小遣いを貯めて、ほしいものを買う楽しみも持っていました。家庭のなかから消え失せてしまったこうした初歩的な仕事も、数多く残されているのもまた、園のように大勢の人々が集い暮らす場です。

こうした体験のなかで作られる遊具や生活用品は、高い有用性を持つことができます。有用性に支えられた学習の場を組織することが、今ある保育領域の目標に、新しい息吹を吹き込むことにつながっていくように思います。

（鳥取・鳥取大学教育学部）

図書館と連携した保育学習

課題別学習とブックトーク

貴村 宣子

1 はじめに

新学習指導要領の実施にともない、岡山市では技術・家庭科を3年間男女共学で取り組むのが主流になってきている。

私は、昔から保育の領域を女子のみに教えることに疑問を感じていた。人間を生み育てることは男女共同の作業であり、自分の生まれ育ってきた過程を振り返り、これからの生き方を考えることも、また人間への理解・人間への優しさを育むことも男女とも必要なことだと思っていた。

男女共学で保育を教え始めて今年で3年目、最初は恐る恐る始めた男女共学だが、意外に抵抗なくすんなり受けとめてくれた。しかし、女子のみ指導していた頃と比べると、より一層の指導法の工夫や教師の指導力が問われることとなった。保育領域はややもすれば講義中心の授業になりやすい。また身近に幼児が少ない現状の中で、子どもを育てる立場にたてない中学生に興味深い授業を展開するのはどうしたらよいか。個を生かし、男子にも興味深い授業をどうすればよいか、わたしたち家庭科教師の大きな課題である。

そこで学校図書館の協力を得て、課題別学習、ブックトークなどを取り入れることにした。中でも課題別学習は、生涯教育の基礎となる主体的に学ぶ力を育てるとともに、枠にとらわれず自分の考えを自由に発展できる大切な取り組みのような気がしている。

2 図書館は知識の宝庫だ！

生徒は「保育？ 保育って何するん、先生」と聞く。保育というと、生徒たちは子どもを育てる、赤ちゃんを育てる方法を勉強するくらいにしか考えていない。そうではなく、中学生の今でも大切な学習だということを伝えたいが言葉では伝えきれない。なんとかして保育というテーマに注目させたい。そんな

3 課題別学習では

(1) 取り組みの計画

前時	課題別学習のねらいと計画を説明 課題の提出
第1時	課題と課題追求の方法を決定 班を決定
第2～5時	課題追求
第6～7時	発表

(2) 課題の例

「子どもと絵本」 小さい時に絵本をよく読んでもらい、おもしろかったから調べてみたいと思って取り組んだようだ。心に残っている本を生徒や先生に聞いてまとめたり、絵本が子どもたちにどんな力を付けるのかを調べていった。

「エイズについて」 男の子のツッパリ君達は何人かいたグループで、図書館にエイズについての本がたくさんあったということや、いくら性的なことについての興味もきっかけになっていたようだ。どんなことを調べるか少し心配もしたが女子が男子を上手にリードして盛りあがった。

「幼児の健康と病気について」 肥満児の問題や成人病予備軍の問題にも触れていた。

「聴覚障害者の言葉の発達」 我が校には難聴学級があって、聴覚にハンディのある生徒が何人かいる。3人の男子生徒がこのテーマに取り組んだ。本で調べたり、お母さんに聞いてきたり、「家中の物に名前が書いてあって、それで物に名前があることを教えてもらい、言葉を覚えていった。」というような話。

「将来自分に、もし耳の聞こえない子ができたら、自分も同じようにして言葉を教えてあげよう」という内容もあった。言葉は他の子と比べ聞き取りにくいのだが、教室全員がシーンとなって発表に聞き入り、まさに感動の渦という感じだった。

その他「子どもの遊び場今・昔」「幼児の言葉のつぶやき」「おもちゃについて」などのテーマがあった。

自分たちにぴったりしたテーマを追究できた班は、短時間で集中して調べ、自分自身も満足がいく学習ができたようだ。



写真1 ブックトークに聞き入る

- ” 題名” 聴覚障害者の言葉の発達
- ” 疑問” 聴覚障害者はどのようにして言葉を覚えてきたか
- ” 研究方法” ・親に聞く・本（アルバム）で調べる
 - ・今まで歩んできた道を振り返る
- ” それぞれの両親に聞いて”
 - ・補聴器をつけるようになると、父さんか、母さんに本を読んでもらった。
 - 父さんや母さんの言っている事よくわからなければ、相手の口をよく見て、その言葉はどのようにして使うかも教わった。
 - また、正しい言葉のしゃべり方は、母が口の動かし方を一つ一つていねいに教えてくれた。
 - 間違った言葉の使い方をしていたら、父や母が注意して正しい言葉の使い方を教えてくれた。
- ” 将来、自分に子供ができたら”
 - ・もし子供ができたら、僕は親として正しい言葉の使い方を教えたい。子供がよくわかっていなければ、紙にでも書いて詳しく、はっきりと覚えさせたい。

図2 生徒の発表資料(一部)より

(3) 課題設定と班作り

班を作る条件として、「生徒の問題意識を大切に、調べたいテーマで班を作っていくこと、できるかぎり男女混合で」と指導したが、結果的には気のあった者同士で集まったり、課題が偏ったりした。テーマごとに集まって主体的にいい班を作ることが理想だが、それは難しいということをつくづく感じた。また問題意識がはっきりしない生徒もあり、テーマの設定に苦労した。

(4) 教師と司書の援助

生徒が何を知りたいか、学びたいかという動機を掘り起こし、自分の問題として意識化させることがまず最初大切なことである。また課題追究の途中、リーダーを中心に、メンバーの問題意識をどう集中させていくかという点で教師の声掛けが大切だと思う。教師としてはつい時間のことを考えて、おどしてみたり叱ってみたりということになりかねないのだが、あせらずしっかり励ましてやることであろう。生徒たちの話し合いを聞いていると、回り道の話もあるが、意外にしっかり考えているものだ。生徒のちょっとした発想や工夫を誉めてやる気を引き出してやりたい。教師の指導力と人間性が問われる場面だ。

(5) 発表

みんなが、学習したものはみんなのものにしていきたいということで、班ごとにB4判一枚程度の紙に班のまとめを準備させ発表資料にした。模造紙に壁新聞ふうに作った班や、実物を持ってきて使った班もあった。

熱心に調べた班の発表は聞かせる力があるし、いい加減な発表にはそれなり

の反応で、生徒たちの見る目の確かさも感じた。発表を聞いての感想も書かせた。質問が多くでないのが残念だった。



写真2 おもちゃについての発表

4 感想と今後の課題

学校図書館の熱心な先生のおかげで、保育の豊富な資料ができ、授業を大きくふくらませることが

できた。視聴覚・理科・社会科の先生など、日頃から多くの教師の援助をもらいながら技術・家庭科の授業を充実させているが、今回はずいぶんお世話になった。職員室で実践を報告する中で、他の教科へも影響を与えたように思う。教職員が手をつなぎ協力しあって「いい授業作り」を子どもたちのために研究していかなくはと思う。今後も学校図書館をおおいに活用させてもらおうと思っている。

課題別学習の授業の教室は図書館がよいが、たとえば荒れた学校では、図書館に移動している間に生徒がいなくなってしまうこともあるだろう。家庭科室に資料を運びこんで授業することもできる。私は毎年おもちゃ製作の資料なる本をダンボール箱につめてもらって家庭科室に運びこみ利用している。

課題別学習は多くの課題を残した。まずどこに位置付けるかの問題である。今回は、途中に「調べ学習的」に取り組んだ。しかし生徒の問題意識は幅広く教師がフォローするのも時間もかかる。次回は基礎・基本を最初に教えて、その発展として保育学習の最後に位置付けるようにしてみようと思う。

時間の問題もある。こうした学習はとにかく時間がかかる。熱心にすればす



保育関連図書リスト

1.	人間とは	1
2.	生命の誕生、性と母体	2
3.	保育、子育て全般について	4
4.	幼児の心身の発達	7
5.	幼児の生活	8
6.	幼児と食事	9
7.	幼児と遊び	9
8.	絵本と子どもの本	11
9.	地球環境	12
10.	男性と女性・社会と家庭	13
11.	子どもの権利条約	14
12.	昔の子ども、今の子ども	15
付録	エイズについて知る本	16

るほど放課後にも食い込む。能率よく効果があがる方法はないものか。

一人ひとりの生徒の問題意識を大切にして取り組んだ「課題別学習」は、課題も残しながらも、学習への意欲を生み出し、自分たち自身で解決していくことの楽しさを培っていったように思う。今後

とも生徒たちにとって素晴らしい学習環境—解決の助けとなる豊富な資料と、援助してくれる教師や司書、地域の人々を地道に作っていかねばと思う。

(岡山・岡山市立丸之内中学校)

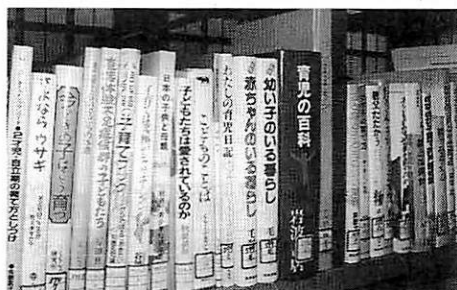


写真3 保育の100冊コーナー

BOOK

『ワーズ・ワード colour visual dictionary』

ジャン=クロード・コルベユ、アリアン・アーシャンボウ著 長崎玄弥総監修

A 4変型判 896ページ 4,900円 同朋舎出版

和製英語が、日常会話に使われることが少なくない。書評子は、この和製英語をかなり識っているつもりであったが、英語と思って使った単語で失敗したことがある。そのひとつが、電源を入れるコンセント。英語ではoutletという。ある友人から「電気掃除機」を英語で何というかの問いに、electric sweeperといったら、vacuum cleanerというと教えてくれた。和製英語ホッチキス、バックミラー、ストロボ、シャープペンシル、フライパンを英語で何というか。全部できる人は、かなり英語力がある。答は欄外。

この本は、すべてカラーページで絵図にそれぞれ、日本語と英語で説明している。28のテーマから成っている。それらは、天体、地理、植物、動物、人体、農業、建築、住宅、家庭、園芸、日用大工、衣服、装身具、日用品、情報伝達、交通、事務機器、音楽、手工芸、スポーツ、ゲーム、計測機器、光学機器、健康と安全、エネルギー、重機器、兵器、シンボル。総索引がある。英語、日本語の両方があり、単語から対象物を引くことができる。試しにsegment(区切り、区分、部分)を引いてみた。あったのはみかんの実の一袋の意だけ。トンネルを掘る工法のひとつにシールド工法がある。掘ったあと、コンクリートの片を輪にしてつめてトンネルにしていくが、この片もセグメントという。この言葉は無理にしても、電卓の数字を示す片(7 segmentsで0~9を表わす)は載せてほしかった。「Word's Word」は、用語辞典でイラスト図鑑でもある。reasonable priceで、おすすりめです。(郷 力)

ホッチキスはstapler、バックミラーはoutside mirror又はdoor mirror、ストロボは商品名なので(electronic) flash、シャープペンシルはmechanical pencil、フライパンはflying pan。

家族と保育の接点を求めて

保育を「家庭生活」に融合させた指導計画

首藤 真弓

1 はじめに

1) 保育と家庭生活の関連

本校の第3学年は、第1学年で家庭生活代替で被服領域を履修済みである。今年度は、第3学年において、保育と家庭生活をあらためて履修させることにした。

そのため、教材研究をしていた時に、次の文章に出会った。

あなたが生まれた時、あなたはあらゆることで家族が必要でした。家族はあなたの食物、衣服、住居のよりどころだったのです。

(「ティーン・ガイド」1992、家政教育社、p104)

この文章から、保育領域の内容と家庭生活領域の内容が非常に関連が深いことに気づかされた。中学3年生という義務教育の終了の年に、子ども時代を振り返らせることは大切な意味があり、これが保育学習の意義とも考えられるが、その子ども時代の思い出には家族との関わりを抜いては考えられない。

2) 家庭生活を第3学年で扱う

保育の学習内容は従来第3学年で指導してきたので適時性を満たしているが、家庭生活については第1学年でのみ扱ってきたので初めてのことである。

また、1、2年生で被服、食物学習を教えたので第3学年で扱うには既習事項との関連も考える必要がある。

3) 保育を核にして家庭生活を融合

対象学年への適時性を考慮して、家庭生活の内容を整理する必要があると考え、二領域の関連を生かしながら保育領域を核として、家庭生活領域を吸収するような形で指導することにはどうかと考えた。そこで、二つの領域を融

合せた指導計画をたてることにした。

保育を核としたのは、生徒は保育の学習をとおして自分の子ども時代を振り返り、このようにして自分が成長してきたのだという自己を理解し、もう子どもではないのだという現在の自己を認識していくものと考えられるからである。また、家庭の保護なしには生きることさえむずかしかった乳幼児時代を経て、人間として生きていく自己形成の場としての家庭の意義を認識するだろう。そして、自己を認識するということは、自己を対象化して考えることであり、自己形成の基本である。これまでの自分がいかにして形成されてきたかを理解し、これからの自分をどのように形成するかを考える機会を設定することが、中学3年生にはふさわしい学習内容ではないだろうか。

したがって、保育・家庭生活領域の目標を、次の三項目とした。

- (1) 幼児のための絵本を製作させることなどとおして、幼児に対する理解を深めさせる。
- (2) 幼児を理解させることとおして、家族に支えられて成長してきた自己に対する理解を深めさせる。
- (3) 家庭生活をよりよくしようという態度を育てる。

2 保育・家庭生活の指導計画

本校では3年間全面共学であり、第3学年では通年2.5時間、技術系列と週交替で授業を行なっている。したがって家庭系列は1年間で約44時間実施する。

本年度は保育領域を核として保育・家庭生活を融合させて、第3学年にふさわしく家庭科のまとめ的な授業にしたいと考えて、次のように計画した。

指 導 内 容	時 数	備 考
幼児の心身の発達	4	教科書を中心に
幼児の生活習慣の形成	2	VTRを利用して
幼児の遊び	10	絵本の製作
幼児の観察	2	幼稚園訪問実習（絵本を読んできかせる）
幼児の衣生活	6	1) 幼児の衣服のデザイン 2) 幼児の衣服の素材

幼児の食生活	4	1) 幼児期の食生活の特徴 2) 幼児食実習
幼児の住生活	6	1) 保育環境としての住宅 2) 保育環境としての地域
幼児の家庭環境	4	家族の生活 (ロールプレイング)
家庭の経済	4	1) コンピュータを利用して 2) 消費者教育
まとめ	2	作文「家庭科の学習を終えて」

3 評価計画 (特に絵本の作品評価に関して)

1) 個性を大切にしたい評価の考え方で

本領域では絵本という作品を提出させる。従来の評価法であれば、毎時間の進度が早くて、作品が相対的に優れているものを高い評価としてきた。

これまで10年ほど絵本の指導をしてみても思うことは、作業が遅くみえる生徒でも良い作品ができるという事実である。そのような生徒には、被服実習のように、毎時間進むべきところまで進まないで減点という評価では適さないことがわかった。

そこで、従来よりも時間設定をゆるやかにして、途中での(成績につながる)作品評価はなしにして、完成作品提出日を設定して、完成までのアプローチの方法は個性に応じて柔軟なものにしてみた。毎時間の授業の評価は、形成的な評価のみ行なうことにして、個人がそれぞれ課題を持って取り組むように観察し、それぞれの課題を解決するための支援と励ましを与えることにした。

また、個性を作者紹介のページで表現させ、自分のこれまでのあゆみを前向きにとらえて表現できたとき、高い評価をすることにした。

2) 良い作品は指導の目標に沿ったもの

絵本などの作品を見ていくと、絵のうまい生徒の評価を高くしがちである。しかし、絵がどれほどうまくてもそれが幼児にとって理解できないものであれば目標に沿っていないのでそれは低い評価とする。

本授業は美術の授業と違って、「幼児に理解できる内容の絵本をつくる」という学習課題であり、それを目標にして生徒が幼児を理解しようとしたり、自分

の子どものころのことを振り返ったりするという学習活動を行なうのである。絵でうまく表現できない生徒には、折り紙を貼るとか切り抜きを貼るなどの技法をすすめ、何よりも幼児が理解できる作品をめざさせ、評価した。

3) 自己評価の機会を設定する

できた絵本の読み聞かせを、幼稚園訪問実習でさせてきた。それによれば、読み聞かせをした年の方がしなかった年よりも生徒の満足度が高かった。その要因は、幼児への読み聞かせを通して自己評価にもつながり、教師の評価を受け入れる素地ができるからではないだろうか。また、作品を完成させた充実感や幼稚園という環境に身を置いてみる体験もプラスにはたらくようである。感想には将来の職業に結びつけて書いてくる生徒もいた。

4 おわりに

第3学年での保育・家庭生活領域44時間の指導計画と評価の考え方をまとめた。

この案の前に、第1案として、単純に保育22時間、家庭生活22時間とし、内容も指導書をもとに組んでみたが、それは、次のような点で実態に合わないと感じた。

- (1) 2年生で食物領域を学習しているので「簡単な調理」は易から難へという指導の順序に反するので不適切。
- (2) 「家庭の仕事の種類や内容」や「家庭の仕事の計画」や「室内美化の小物づくり」は中学3年の冬の学習には不適切。

以上の2点から、指導計画を見直し、何のために学習するか、生徒の理解しやすいように（思考の論理に沿うように）整理して指導計画を立てることにした。その視点は以下の通りである。

視点1) 保育学習と関連づけながら、家族、衣生活、食生活、住生活、経済、環境問題、消費者問題を指導したい。

視点2) 家庭生活領域については、既習事項を省く。

視点3) 生徒の実態を重視し、指導の順序性や適時性を欠く内容は工夫する。

(宮城・仙台市立鶴谷中学校)

母親の自立と保育

おかあさん！ ともにがんばりましょう

熊山 孝子

はじめに

乳幼児期における人間形成は、保育者の姿が大きく影響している。特に愛情に満ちた母親の育児態度は、子どもの精神発達や人格形成を豊かにする。

しかし、最近の若い母親の間には育児に対する知識が乏しく、自信がないなどにより子育てに不安を抱いたり、その反面、無関心な親が増えつつあると言われている。子どもが人と人との信頼関係を作っていく上での一番基礎となる最初の出会であるお母さんに対して、信頼の絆を結べなくなっている。

B男の母親も若くして母になり、いろいろな理由や生いたちにより、母親自身が十分な育て方をされなかったという中で、我が子を育てる手だてを知らないままにきたようである。そのため、B男に発達面での遅滞が出てきているのではないかと思われる。母親の生いたちや実態を理解しながら、B男が母親や家族やまわりの人々との信頼の絆を結びながら、健やかに育つにはどうすればよいかを母親と保育所が共に考えていこうと思った。

B男の姿

1歳4か月で保育所に入所する。正常分娩で出生時体重4kg。人工栄養で育てられる。父(20歳)、母(20歳)の3人家族。近所には母の父母が住んでいるが、祖母はB男の家庭にはほとんどかかわっていない。

母親は高校卒業後結婚、まもなくB男を出産する。保育所への子どもの送迎時ではB男への言葉かけやほほえみかけなどもなく、無表情である。友だちの誘いにも気軽に応じて、夜遅くまでB男を連れ歩くことが多い。母親としての自覚や、母親自身の生活習慣の確立が弱い。子どもへの愛情表現やほたらきかけなどの育児知識がほとんどない。

B男は入所してきたが、無表情でまわりの保育者や友だちにほとんど関心を

示さず、抱っこされるのをいやがる。話しかけても目を合わさないなど自己表現（特に愛着・依存）をしない。言葉（喃語なども）がなく、泣く時は声を出さずに涙を流す。動きが少なく欲求も示さない。家庭では、言葉かけや、あやされたりすることがほとんどなく、遊びは部屋の探索と、台の上にあがって窓の外をながめているなど、母親にとっては手間のかからない子どもであった。頭に比べて体・手足が小さく、歩行は不安定でよくころぶ。新年度になり、新しい友だちや保育者に慣れず、不安や緊張が高まっている。おもちゃなどには興味なく部屋の中を歩き回る。

◇ B男への願い・家庭との連携

- ・母や家族や保母との愛着関係を結びながら、友だちやまわりの人たちに関心を持ち、ふれあうことの楽しさを経験してほしい。
- ・自分の気持や欲求を表現（特に言葉で）できるようになってほしい。
- ・母親との信頼関係を深めながら、母親としての自覚や自信を持ち、子育てについての知識を身につけて実践できるように協力していきたい。

◇ 実践経過（B男1歳9か月から）

	B男の姿 (友達とのかかわり)	保育者の働きかけ	家庭との連携
4月 (1歳9か月)	<p>○母親と離れる時や自分の欲求が受け入れられない時など声を出さずに涙を流す。</p> <p>○遅く登所する(起床9時30分)。泣くことはないがまだ目ざめていないでじっとしている。</p>	<p>○目を見ながら笑顔と言葉で接し、情緒的なふれあいを十分持つようにする。</p> <p>○十分目がさめていないので抱こうとするといやがって逃げる。リズム室のすべり台に誘うと自分で登り、すべっていくうち</p>	<p>○家庭訪問後、登所してきたことを喜び、新しい部屋や保母に慣れていないので毎日登所することでB男が安定していくので、朝はがんばって起きてほしいと励ます。</p> <p>○遅く登所したことについて母親と話す。「ゆうべB男を連れて友だちとボーリングに行き、就寝は11時」とのこと。子どもにとって不規則な生活はいろんな面に影響を与えることを一緒に考える。</p>

	<p>○友達への関心がうすくて、部屋の中をフラフラ歩く。言葉はほとんどなく表情も固い。</p>	<p>にだいぶ目ざめてきた。</p>	<p>○「きのうの夜、又ボーリングに行く。早く帰るつもりでしたが茶店に寄って帰ったのが9時30分ごろ。結局就寝を10時と遅くさせてしまいました。子ども中心に生活しなければいけないのはわかっているのですが……B男ごめんね」(連絡帳より)。母親が反省しながら努力しようとする気持ちが伝わる。</p>
<p>5月(1歳10か月)</p>	<p>○友だちの前で名前を呼ぶと大きく口を開けるが声が出ない。</p> <p>○いつもより早く登所する。外を見て盛んに何か言っている。保母が笑いかけると少し笑う。</p> <p>○よく動くようになってきた。押入れに入って「キャー」「アー」と叫んだりしてちゃめっけがでてきた。目が生き生きしてきた。</p>	<p>○B男の緊張をほぐすために、名前を呼ぶ時は手を握ったり肩を抱くようにする。</p> <p>○外を見て何か言っているの、そばへ行って一緒に見る。小鳥の様子や遊具の話をしたり、歌を歌ったりする。</p> <p>○おとなしかったB男脱出の機会をとらえ、B男とのたわむれ遊び(くすぐりっこ、追いかっこ)を多くして心も体も開放していき、保母との親しみを深めていくようにする。</p>	<p>○言葉がほとんど出ないことについて家庭での状況を聞く。「B男に話かけることはあまりない。夫婦がテレビを見ながら話をしている間、B男はひとりでその辺で遊んでいる。母親に要求したり、甘えたり、仕事のじゃまになるようなことはしない」とのこと。B男の言葉や、無表情の原因がこのあたりにあるのではないか。どんなことでもよいから表情豊かに話かけたりスキンシップをすることを理解してもらおう。</p> <p>○母親は、送迎時にB男に話かけたり、他の子どもたちにも声をかけたりすることが多くなってきた。</p>

<p>6月 (1歳11か月)</p>	<p>○水槽の中の金魚を指して「ムイムイ」と言う。初めて単語が出てきた。他の物もすべて「ムイムイ」と言う。B男の声も表情も生き生きしていた。</p> <p>○トレーニングパンツで過ごす。時間を決めてオマルにすわるがほとんどしない。</p>	<p>○初めて意味のある言葉を発したことをB男と共に喜ぶ。</p> <p>○B男の「ムイムイ」と言う言葉を保母も一緒に真似て何度も言ってB男が言葉を発することの気持ちよさを感じるようにしていく。</p> <p>○あまり抵抗のない程度に排泄に誘う。</p>	<p>○母親にも初めての一語文が出たことを知らせ共に喜び合う。言葉が出たのはB男が母親やまわりの人たちと心と体のふれあいを通して信頼関係ができたことを知らせる。</p> <p>○母親や父親がB男と一緒に遊んだり、B男が指さして言葉を言った時など意味づけしたりしてほしいと話す。</p> <p>○家庭より、「園からしていたパンツは帰った後、濡れるまでつけているが、それ以後は大便をされると困るのでオムツにしている。家庭でもパンツにしてみようと思う。」</p>
<p>8月 (2歳1か月)</p>	<p>○パンツの前をたたいて「シーシー」とはっきり告げに来る。した後であったが、食後は成功した。</p>	<p>○排尿を告げたことを十分ほめてやり、友だちにも知らせて共に喜び合う。</p>	<p>○家庭より「きのう初めてオマルに大小便をしてくれました。うれしくてほめてやりました。しかし朝パンツにしてしまいました。こういう場合怒ったらダメですか。」</p> <p>○保育所より「成功した時だけうんとほめてあげて下さい。成功感とほめられたことがいつも一緒に、快の刺激になって習慣化されると思います。」</p>
<p>11月 (2歳4か月)</p>	<p>○母親が仕事について迎えが遅くなると、カバンをかけて落ちつきがなくなり、しきりに「抱っこ」と言うてくる。</p>	<p>○居残りをはじめたので他の保母にも慣れるように担任保母を介しながら安心感が持てるようにしていく。</p>	<p>○母親は、栗むき、早朝ジュース配達、縫製などをするが続かず、喫茶店へ勤めるようになる。</p> <p>○朝が忙しくなり、朝食をとらないで送ってくるので、母親が慣れるまで簡単なものでもよいからたべさせるように話し合う。</p>

1月 (2歳5か月)	○表情が明るくなり、一語文を羅列しながら自分の意志を伝えようとする。友だちと体をくっつけて楽しそうに遊ぶ。 ○わらべ歌遊びの鬼のせりふを言って楽しんでいる。	○興味や関心のあることには積極的にかかわろうとするので、保育者も一緒に参加して共感したり、遊んだりしながら、言葉の発達を促している。	○B男の成長ぶりを知らせ母親と共に喜ぶ。家庭でもよくおしゃべりをして表情が豊かになる。 ○家庭訪問、起床が遅くなる原因は両親が夜遅くまでテレビを見ていてB男が眠れないとのことなので、部屋を仕切ったり、B男を寝かしてからテレビを見るなどの話し合いを持った。
---------------	---	--	--



反省と考察

母親との話し合いや家庭訪問の中から母親の育った背景を理解することからはじめた。母親の育った環境は、B男を育てるには不十分な点が多く、若いということなども含めて母親の今の生活そのものについても保育所と連携し、母親が何でも話せるような雰囲気づくりをしてきた。しかしこちらの押しつけになったり、批判的な態度に受け取られたり、十分な信頼を得るまでにはいかなかった。それでも、少しずつ育児について積極的な質問が出たり、B男への接し方や表情に母親らしい姿がみられるようになった。

母親の努力や良さを十分認め、温かく受け止めながら共に喜んだり、励ましあいながらB男の成長を見守ってきた。

B男は表情が明るくなり、言葉も豊富になって積極的に遊びに入るようになってきた。素直に抱かれたり、自己表現ができるようになってきた。友だちとぶつかり合いながらも友だちといふことの楽しさを経験している。母親の前向きな姿勢と保育所の生活によって、B男は著しい成長をしてきたように思う。

これからも母親が子育てに戸惑ったり、迷ったりしながらも子どもへの愛情や信頼を失うことなく、子どもの成長の喜びや楽しさが持てるようになってくれることを願いながら、保育所も共に連携をすすめていきたい。

(徳島・阿南市立宝田保育所)

家庭経済を消費生活センターで学ぶ

細川 律子

1 はじめに

岡山県消費者生活センターは、家庭科担当者の実技研修等で、「家庭生活」領域での家庭経済を教えるための基礎的な知識や情報の習得や実習等に利用してきた。センター内の展示場も経済社会の変化に対応した興味のある内容のものや、生活の中に生かせるものが多く、「百聞は一見にしかず」で、生徒たちに見せてやりたいと思っていた。消費生活センターの仕事の一つとして学習講座(若者のための消費者教育)があることを知り、専門的な立場で事例をあげての話は生徒たちにとっても興味深く、現在社会問題となっている悪徳商法やカードの利用についても、身近かな問題として考えられ、実践できるようになるのではと思った。生徒の実態から将来生活するうえで、どのようなことが身につければよいかを考え、次のような授業計画をたてた。

2 授業計画——(4時間)

1. 家庭の収入と生活費……1時間
 - ①高校受験・進学時に必要な費用
 - ②家庭の収入と生活に必要な費用
 - ③家庭の収入と支出のバランス
 - ④いろいろな支払いの方法
2. 消費生活センターで学ぶ……2時間(本時)
 - ①消費生活センターの役割と仕事の内容
 - ②いろいろな販売方法
 - ・契約とは何か
 - ・クーリング・オフ制度についての解約方法の実習
 - ・カードのいろいろ

最近の相談内容(平成5年度)

- | | |
|-------|--------|
| ○件数 | 3379件 |
| ○販売方法 | 通信販売 |
| ○商品 | ワースト5 |
| 1. | 教室・講座 |
| 2. | 学習教材 |
| 3. | クリーニング |
| 4. | 工事建築加工 |
| 5. | 医療用品 |

③「カード破産」……ビデオ鑑賞

・クレジットカードのしくみ

④消費生活センターの展示場見学

3. 悪徳商法と消費者の権利……1時間

3 消費生活センターでの授業の流れ

(イ)消費生活センターが設立された背景には、消費者問題から弱い立場の消費者を守るという目的で各都道府県に設置された。仕事の内容は次の4つである。

○消費生活について相談にのる。

・商品やサービスを購入するときのアドバイス、購入後の苦情相談を行っている。

○学習する。

・暮らしに役立つ情報を学ぶために各種講座、研究会を定期的に開催している。

・希望のテーマの学習会をセンター内または地域でやる。

・16ミリ映画・ビデオテープ、パネルの貸出をする。

・機関紙・パンフレットを発行している。

○検査をする。

・みんなが不安を感じたり、疑問を持った商品のテストをする。

・テストの結果は情報として提供する。

○消費生活情報オンラインシステム

・国民生活センター（東京）に集められた全国の情報を整理し提供する。

(ロ)いろいろな販売方法……プリント

・契約とは ・未成年の取り消しについて ・解約(クーリング・オフ制度)
返品について ・トラブル防止のためには等、販売方法のポイントをクイズ形式の問題に入れながらの学習は、楽しみながら理解できたようである。

(1)お店へ行っておこづかいで3,000円のファミコンソフトを買ったが、友達も同じものを持っていたので翌日交換に行った。交換してもらえるか。

①交換できる19人	②交換できない36人	③お店によって違う35人
-----------	------------	--------------

正解
③

(2)雑誌の広告を見て2,000円のペンダントを申し込んだが、送られてきた商

品は思っていたのとイメージが違った。返品できるか。

① 3日間以内なら返品できる 60人	② 返品できない 13人	③ 広告によって違う	正解 ③
-----------------------	-----------------	------------	---------

(3)セールスマンがやってきて、10万円の学習教材を勧められた。僕がやる気を出したので母が買ってくれた。1週間後教材が届いたが、難しすぎるとわかった。返品できるか。

① 返品できる 15人	② 返品できない 38人	③ 契約書を書いた日を含めて8日以内なら返品できる 37人	正解 ③
----------------	-----------------	----------------------------------	---------

(4)レンタルビデオの会員カードを落としてしまった。きみならどうするか。

① 放っておく 9人	② すぐお店の人に知らせる 81人	正解 ②
---------------	----------------------	---------

(1)の店舗販売についてはレシートを持参しておれば交換できると思っている生徒もいるが、基本的には一度買ったものは交換できないと思っている。

自分の意思で買物をしている生徒が増えていることがわかると同時に、契約とは何かとか未成年の取り消しについても理解しておくことが大切である。

(2)の通信販売については本人自身で利用した経験をもっている生徒が9名で、服・ペンダント・指輪などを購入していた。サイズが合わなかったという経験談もあり、広告の取引条件を確認しての購入の必要性が理解できたようである。

(3)の訪問販売については中学になって学習教材の訪問販売を経験した生徒が8割いた。実際にクーリング・オフ制度を適用し契約を解除した生徒もいた。上手なことわり方等が話題になり、契約解除の手続きの実習をした。

(4)カードについては、テレホンカードは全員持参しておりキャッシュカードも2名持っていた。レンタルビデオカードは6割の生徒が持つており、紛失したまま放っておいた生徒が9名いた。放っておいた時の裁判事例を聞きカードを持つ責任を自覚したようである。

(イ)「カード破産」のビデオを鑑賞して一生徒の感想文から一

◎私は今までカードというのは、お金を持ち歩かなくても、品物が買えるとても便利なものだと思っていました。でもこのビデオを見たことでカードを持つときの責任の重さを感じました。たくさんの人に迷惑をかけること

など、これから先、私がカードを持つときは気を付けたいです。

◎カードはとても便利なものだなあと思いました。でもあまり便利でつついたくさん買って、最後には悪い結果になることもわかりました。僕はいつもこづ

かいを無計画に使っています。僕もきっと将来はカードを使うと思いますが、ほしいものは全部買うのではなく、本当に必要なものなのかなど、いろいろ考えながらカードを使おうと思います。借金地獄におちないために……。

ビデオ鑑賞後クレジットのしくみについて学習し、生徒の感想文からも現在のお小遣いの使い方の反省が多い。カードは持ちたくない、2枚くらいかな、と責任を持った使い方をしなければいけないことを痛感したようだ。

(二)展示場見学

「かしこい選択 ゆたかな生活」—新時代の消費者像を求めて— というテーマで身近かな問題を取り上げた展示があり、それぞれの場所で歓声があがっていた。

4 まとめ

中学校から歩いて5分という場所にあるというものの生徒たちは実際に行ったこともなく、建物を知っている程度であった。また消費者センター職員も中学生に授業するというのは初めてで戸惑われたようだ。経済に関するアンケートでは自分の家庭の収入額を知っている生徒は2名、小遣い帳をつけているの



写真1 消費生活センター内パネル



写真2 合成洗剤の中の蛍光物質に光があたって光る

は8名という実態の中で、自分の意思で買物をしている生徒が増え、通信販売の利用や自分で買う金額が高額化していること等がわかった。中学生とはいえ複雑な約款を理解できずにトラブルに巻きこまれる実態がある。

この体験的な学習を通して、なかなか実感として捉えにくい内容を、専門的な立場から最新の情報をいれながらの学習によって、自分も社会の中の一員であり、家庭の経済を考えた上での消費者としての自覚と責任を持ったことが感想文などから受けとることができた。今年度は生徒一人ひとり課題を持ち消費生活センターで学ぶ計画を立ててみようと思っている。

(岡山・岡山市立旭中学校)

BOOK

『新学力観をのりこえる』

教育科学研究会・坂元忠芳・須藤敏昭 編

(A5判 216ページ 2,400円 国土社)

新

学力観について書かれた書籍は少なくないが、本書は研究者と現場の教師18人の共同執筆であり、新学力観について多面的な分析がなされているのが特徴である。

第一部「いまなぜ『新学力観』なのか」では、「新学力観」の政策側の意図を分析し、その歴史的・社会的背景を明らかにしている。さらに、「新学力観」の問題点を、現実の学校や企業の中で起きている事象との対比でわかりやすく解きあかしてくれている。編者を含めて4名の比較的短い論文ではあるが、内容は濃い。しかし、教育に直接携わらない多くの人にも読みやすい記述になっている。

第二部「『新学力観』は教育現場に何をもたらしたか」は、小中高校でおきているさまざまな問題を東京・青森・鹿児島などからリアルに伝えている。自分の周りだけでなく、全国の状況を知る必要性を教えてくれる。このままこうした弊害が続くとすると、数年後には日本中の学校が大混乱に陥るのではと思えてくる。

第三部「『新学力観』をのりこえる学力論・学習論と教育実践」は現場の教師としては一番期待するテーマである。ここでは小(社会)中・高(数学)の実践が紹介されている。また、「学習指導の転換」「学力の主体性と共同性」といった教師がこれから教育について考え、実践していくについて重要な示唆を与えてくれる。しかし、「進路指導論」については内容に異論を抱いた。ここでは詳しく述べる余裕がないが、産教連の前身である職業教育研究会に対する誤解があるように思う。民間教育団体についても相互批判は必要だが、一面的な文献分析だけではその団体の研究や運動を理解したことにはならないと思う。進路指導についてはもっと展望の見える、現場の教師の立場に立った研究を望むと同時に、職業指導についても、現在の中学校での実態調査などをしていたらと思う。

(飯田明)

りんごの皮むきから愛情弁当作りへ

「家庭生活」における「食生活」の実践

玄馬佐知子

1 はじめに

中学校に入学して、初めての技術・家庭科。しかも、新しい学力観に立った学習指導が求められている「家庭生活」。とにかく、生徒たちに「おもしろいんだぞー」という印象を持たせ、座学ではなく、体験させてみようと思い、ザ・チャレンジと名付けました。

まず、1時間目に食生活の基礎として、「りんごの皮むき」をしました。この授業の目的は、①正しい包丁の使い方を学ばせること、②生徒の実態を把握すること、③調理室の使い方に慣れさせることです。

そして、包丁の使い方に慣れたところで、「りんごの皮むきテスト」をして、手作りのりんごジュースと市販のりんごジュースの比較実験をしました。最後に、ザ・チャレンジのメインである「心のこもった愛情弁当作り」の実習をしました。

35時間中の7時間で、食生活全般を学習できたとは思えません。しかし、生徒たちの生き生きとした姿を見て、『生きる力、実践できる力』を得てくれたのでは、と思うのです。

2 小学校で「じゃがいもの皮むき」をしたけれど（1時間目）

「りんごの皮むきができる人？」と聞いてみると、自信持って手を上げる生徒は、2～3名。「包丁が正しく使える人？」「シーン！」といった状態。

「たしか、小学校で、じゃがいもの皮むきをしたよねー？」と聞くと、ほとんどの生徒がうなずく。

「では、やってみよう！」とはじめてみると、危ない手つきの生徒が多い。包丁の持ち方（特に、包丁を持つ手の親指の動かし方）が、ほとんどできていない。ひどい生徒は、カッターナイフで鉛筆を削るように、むいている。廃棄

率が実に大きい。生徒40名中、上手にむけたのは4～5名であった。

薄く・長く・速くをめざしてがんばろう。2週間後に、りんごの皮むきテストをすることを予告した。少しでも、包丁の使い方が上手になれば、生活に役立つ力がつくと思った。生徒たちには、「手は体の外に出た脳」(手先が器用になれば、頭がよくなる)の話も付け加え、やる気をもたせた。

3 包丁の達人に近づいたかな? (3時間目)

「先生、早くテストしよう!」「今日で8個目じゃ。この前より自信ある」など、やる気満々の生徒たち。2回目の実習なので、準備も早い。

テストの採点基準は、①速さ(タイムを計る)、②皮の切れた回数、③一番長

ザ・チャレンジ —— あなたは、包丁の達人になれるか?

「りんごの皮むき実習」

作業手順

- (1) エプロン・三角きん・、マスクをつける。
- (2) 手を洗う。
- (3) りんご、まな板、包丁を洗う。
- (4) 先生の合図で、りんごの皮をむく。

(薄く・長く・速く) □ここがポイント

- (6) タイム・一番長く続いた皮の長さを記入する。
- (7) 食べやすい大きさに切り、芯をとる。
- (8) ボールに、食塩水を作る。約1%

ここで問題 □ 1%の食塩水とは?

1000mlの水 計量カップ () ccを () 杯

↓
食塩 () g 計量スプーン 小さじ () ccを () 杯

- (9) りんごを(8)の食塩水につける。

またまた、ここで問題 □ なぜ、りんごを食塩水につけるの?

(理由) ()

記録

タイム (分)

一番長く続いた皮の長さ (a)

図1 1時間目のプリントの一部

タイム (分 秒)
切れた回数 (回)
一番長い皮の長さ (cm)

班の結果

・一番早くむけた人 ()
・一番切れた回数の少ない人 ()
・一番長い人 ()
・80 cm以上続いた人 ()

図2 3時間目のプリントの一部

くつづいた皮の長さ、の3項目であることを知らせ、テストを始めた。

ストップウォッチで計り、「よーい、始め!」。真剣に皮をむいている生徒たちの手つきは、かなり速い。親指の動かし方もスムーズになっている。「ハイ!」とむき終わった生徒の声。「32秒」「ハイ!」「38秒」……と続く。最後の生徒が、終わった。「最高記録じゃ!」「おいしい! 1回切れた」などの声が聞こえる。全員の結果が出たところで、結果の発表を行なった。「班で1番速くむけた人、起立!」(うれしそうな顔が見える。)全員が拍手で祝福。「このクラスの一等賞は、〇〇さんですね。タイムは32秒。」(すごーい!という声とともに、一段と大きな拍手。)
「途中で一度も切れずに続いた人、起立!」…と表彰が続く。

比較してみよう。作ったジュースと市販のジュース。

	(1) 手作りのりんごジュース	(2) 市販のりんごジュース
色		
味		
糖度		
価格		

参考
食物繊維は、「大腸ガンになりにくい」「便秘の予防」「肥満の予防」「糖尿病の予防」などに、効果がある。
りんごは、整腸作用がある。

図3 手作りジュースと市販ジュースの比較

4 りんごジュースを作ってみよう

りんごの皮むきテストをした後、そのりんごをすりおろし、ジュースにした。りんご1個から、ジュースがコップ2分の1～3分の2しかできないことを体

験した生徒たちの驚き。そして、ふきんの中に残った物は何なのかと考えさせる。日頃、手作りのジュースを飲む機会が少ない生徒たちに、市販のジュースと比較させてみた。1年生には少し難しかったかもしれないが、糖度計を使い糖度も比較させた。市販のジュースを飲み慣れている生徒たちにとっては、驚きが多い実験実習だったようだ。

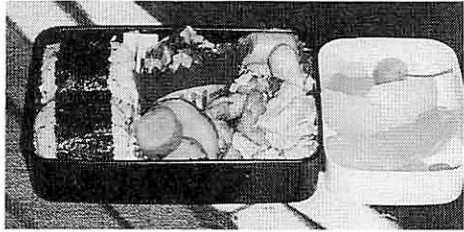


写真1 手作り愛情弁当

5 心のこもった愛情弁当を作ろう

教科書には、簡単な食事づくりの例として、「朝食作り」と「弁当作り」が出ている。どちらをやりたいか、と聞くと圧倒的に「弁当作り」と答える生徒が多い。1年生には少し難しいのではないか、時間内にできるだろうか、栄養についての基礎学習なしでできるだろうか、など不安でいっぱいだったが、生徒の希望を取り入れ、やる気に期待した。最初の試みでもあり、「失敗は成功のもと」と考え、「弁当作り」に決定した。しかし、「家庭生活」では、「家族」について考えさせ、家庭の大切さを理解させる必要があると思い、今回は「家族のための心のこもった愛情弁当」という題材にした。

できあがった弁当に、家族宛てに「メッセージカード」を添えて、心を伝えた。

◆メッセージカードより

私を作ったお弁当を食べてね。作ってみて、どんなに大変かよくわかったよ。私たちは4人で1時間半もかかったのに、お母さんは、それを全部1人でするからすごいと思う。これからも、おいしいお弁当をよろしく！

お母さんへ

初めてのり巻きを作るということでどうなることかと心配でしたが、なかなか上手にできていました。コロッケもお肉もゆで卵も一生懸命作ったことがよくわかりました。やさしい気持ちのいっぱい入ったおいしいお弁当でした。

母より

<p>ほくが作った、愛情こもりまくった弁当を、どうか食べてください。 お母さんへ</p>	<p>ごちそう様でございました。愛情のこもりまくった弁当は、非常においしくて何とペロッと食べてしまいました。卵焼きの甘さとポテトサラダの鼻に「ツン」とくる刺激がよかったよ～。</p> <p style="text-align: right;">母より</p>
<p>この弁当はうまいぞ！ 全部食べるのだ！ かあちゃんへ</p>	<p>おいしいお弁当でした。子供なりのアイデアで心まで楽しくなる思いでいただきました。友達同士色々な話題になったでしょうね。こんなお弁当を持って、春にお花見でも行こうか。</p> <p style="text-align: right;">母より</p>

6 感想と今後の課題

生徒も教師も共に楽しく授業をすることができた。特に、「食生活」については生徒の興味関心が深いところである。いろいろな内容を盛り込んだので、生徒も意欲的に取り組めた。りんごの皮むきで包丁の使い方の基礎を学び、弁当作りの実習をしたので、かなりの生徒が包丁を上手に使っていた。

弁当作りについては、問題点が多かった。まず、計画の時間がかかり過ぎたこと。やはり、栄養などの基礎学習をしていない1年生には難しかったようである。そして、食品の概量がわからず、作り過ぎた班もあり、教師の細かい指導が必要である。しかし、「家族・家庭」について学習する「家庭生活」においては、今回の弁当作りは、大変良かったようである。我が子の作った弁当を食べて、親子の会話がは



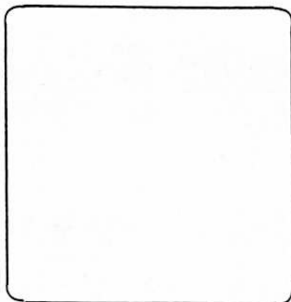
写真2 愛情弁当調理中

心のこもった愛情弁当を作ろう () 班

献立名

愛情弁当の出来上がり図

- ・主食 …… ()
- ・おかず …… ()
- ① ()
- ② ()
- ③ ()
- ④ ()
- ・その他 …… ()
- ・デザート …… ()



デザートの容器



愛情弁当チェック表

1 栄養のバランス

※ 弁当の献立の中に入っている食品群には○をつけなさい。

- ☆ 炭水化物を多く含む食品 …… ()
- ☆ 脂肪を多く含む食品 …… ()
- ☆ たんぱく質をおおく含む食品 ()
- ☆ 無機質を多く含む食品 …… ()
- ☆ ビタミンを多く含む食品 …… ()
- ☆ カロチンを多く含む食品 …… ()

2 色合い

赤 () 緑 () 黄 () その他の色 ()

《指導計画》

- 第1時 りんごの皮むき
- 第2時 心のこもった愛情弁当を作ろう(1)
- 第3時 りんごの皮むきテスト りんごジュースの比較実験
- 第4～5時 心のこもった愛情弁当を作ろう(2) 実習計画
- 第6～7時 心のこもった愛情弁当を作ろう(3) 調理実習

図4 2時間目のプリントの一部

ずんだというメッセージが多かった。そして、その実習後、土曜日の弁当を自分で作っている生徒が増えたことは、教師にとって実に喜ばしいことであった。

まだまだ「家庭生活」については、教材研究が必要であり、生徒たちの意欲を増すためにはますます教師の指導力が問われる。豊富な知識と柔軟な考え、生徒に負けないエネルギーが必要である。

(岡山・倉敷市立福田中学校)

家族の役割と人間関係

高校「生活一般」に交流分析を導入する

大沼 洋子

はじめに —— 交流分析とは

交流分析は、人間の行動に関する一つの理論体系で、それに基づいた心理的治療法である。エリック・バーンというアメリカの精神科医が1950年代頃から提唱した。簡単に定義すると「互いに反応し合っている人々の間で行なわれている交流を分析すること」となる。グループ療法をきっかけにカウンセリングや個人療法に応用されてきた。精神分析に比べ、理解しやすくできており、記号や図式を用いて表わす。そして、自己理解が深まるにつれて、相手の行動や性格についても理解が深まるので、対人関係も改善されてくるのである。

つまり、交流分析の目標は、自己への気づきを増し、心身の自己コントロールを可能にすること。二つめに、自律的生き方（自分の感情、思考、行動について自分で責任を持つ、特に悩みや問題に関して、他人や環境のせいにはしない、人間関係の問題を解決するにあたって、過去と他人は変えられないという事実を踏まえ、自分の感情、思考、行動を変える道を選ぶ）を身につけること。三つめに、愛情と信頼に基づく真実の心のふれあいを回復すること、つまり相手の歪んだ反応態度に基づく人間関係に、葛藤が生じても、肯定的、受容的な構え（相手に変化を強わず、自分を変えるアプローチをとる）で望むこと、この三つである。

以上の目的をもってすすめる交流分析は、「構造分析」「交流分析パターン分析」「ゲーム分析」「脚本分析」の順で行なう。

家庭科学習におけるロールプレイングと交流分析の相関

平成6年度から実施している現行の学習指導要領では、「家庭経営」の家庭経営総合実習（家族関係演習）として、ロールプレイング（劇化法）が、人間関係の技法を習得させる目的から、載っている。これは、戦後、昭和33年の学習

指導要領で初めて「劇化」という形で出され、その後の改訂で無くなったものであるが、指導内容として、再挙されたものである。

また、同書には、普通教科としての家庭科3教科の「家庭一般」「生活技術」「生活一般」のいずれにも、「(1)家族と家庭生活、ア、家庭の機能と家族関係、イ、家族の役割と人間関係」という項目において、「家族同士の人間関係を保つための方法について、具体的な事例を通して身に付けさせる」と、さらに、指導資料「指導計画の作成と学習指導の工夫」には、例として「4/16時間として、家族構成の変化、夫婦・親子など家族関係について具体的に考えさせる(ロールプレイング、映画、ドラマなど)」と記載されている。指導資料には、「ロールプレイングでは、生徒がある場面で、それぞれの役割を演じることによって、今まで気づけなかった相手の立場や気持ちに気づかせることができる。(中略)上手に演じることが目的でなく、それぞれの場面で、一人ひとりの生徒の考えを十分に話し合っておくことが大切である」と説明している。

家庭科4単位必修科目として、短時間で効果的な家族の役割と人間関係を深めさせるには、学習指導法として、前述の目的を持った交流分析の学習は、ロールプレイング同様に用いることができると考えられる。自己管理能力を育成することにもなるからである。



本地域の生徒が交流分析を学習する必要性

宮城県の県境に近い北東部に位置し、生徒のほとんどが、仙台や東京に就職している。若年層の流出のため、人口が減少している地域の中で育っている高校生が、どこでどのような家庭を築いていこうとしているのか、家庭科を教えながら疑問に思っていた。

そこで、地区の教員と共に、アンケートを行なった。その平成4年度に行なわれた本校を含んだ本吉地区の生徒の家族関係に関するアンケート⁽¹⁾に現われた生徒の実態を見ると、親のような家庭を築きたくないと答えた者が多かったこと、8割の者が親に対して不満を持ち、頼りない、と思ったり尊敬できない者が各1割、接触がない、放っておかれる者も1割いたこと、この地を離れて家庭を形成しようと思っているものが男子7割、女子9割にのぼっている点を考え、かつ、父の不在(遠洋漁業の船員、都市部での土木・建築の作業員や工員をしている)を考えると、家族における息子、娘、孫の立場である今、交流分析を学習し家族との人間関係改善をし、今の定位家族を本当の心の拠所としたのち、生殖家族を形成させる必要性を感じた。



実践例——「家族の役割と人間関係」として取り入れる

事前学習

生徒は、前の時間の最後に、15～20分程度、エゴグラムを書き、数値化し表にして提出した。教師の問いに対して黙々と○△×を書き込んでいく。自分の心のなかを知ることはおもしろい、どのような性格であるとでてくるのか楽しみだとの感想を書いている（教師は、次の時間までに、○×の数の合計が合っているかチェックしておく）。

生徒によって違いはあるが、クラスの平均をとると、どのクラスも、大人の自我状態が、まだ未発達で、「M型」の、非行型いわゆるFCが多く、他はすべてそれらよりも低い形であった。また、いずれの数値も女子が高かった。

エゴグラム・チェック・リスト（中高生用）

以下の質問に、はい（○）、どちらともつかない（△）、いいえ（×）のようにお答えください。ただし、できるだけ○か×で答えるようにしてください。

○ △ ×

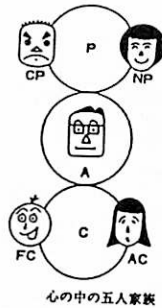
C P （ ） 点	1	あなたは、何ごともきちっとしないと気がすまないほうですか。			
	2	人が間違ったことをしたとき、なかなか許しませんか。			
	3	自分を責任感のつよい人間だと思えますか。			
	4	自分の考えをゆずらないで、最後までおし通しますか。			
	5	あなたは礼儀、作法についてやかましいしつけを受けましたか。			
	6	何ごとも、やりだしたら最後までやらないと気がすみませんか。			
	7	親から何か言われたら、そのとおりにしますか。			
	8	「ダメじゃないか」「……しなくてはいけない」という言い方をしますか。			
	9	あなたは時間やお金にルーズなことが嫌いですか。			
	10	あなたが親になったとき、子供をきびしく育てると思えますか。			

N P （ ） 点	1	人から道を聞かれたら、親切に教えてあげますか。			
	2	友達や年下の子供をほめることがよくありますか。			
	3	他人の世話をするのが好きですか。			
	4	人のわるいところよりも、よいところを見るようにしますか。			
	5	がっかりしている人がいたら、なぐさめたり、元気づけてやりますか。			
	6	友達に何か買ってやるのが好きですか。			
	7	助けを求められると、私にまかせなさい、と引きうけますか。			
	8	だれかが失敗したとき、責めないで許してあげますか。			

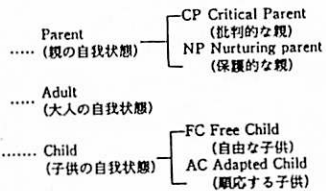
エゴグラム・チェック・リスト（中高生用）の一部

1 時間目

エゴグラムを、「3人のわたし」というプリントを使って説明。どのグラフが一番いいということではないこと、自己を批判するよりは、やさしく養護的に物を見ることの方がしんどくないこと。ACが、FCよりも低い場合は、もう



心の中の五人家族



心の中の五人家族

ちょっと自分の気持ちを表現してみたり、遊んでみたほうが楽ではないかということ。A (大人) の視点で判断したのち、どの自我状態で反応したほうがいいか考えて行動していくと、人間関係がうまくいくことが多いことなどを話す。練習問題を行なう。ひとつの出来事に対して、どの自我からどのような言葉がでてくるのか、3通りの反応が考えられることを学ぶ。高校1年生だが、「ジャンケン」をもちいて、Pなら「グー」、Aなら「チョキ」、Cなら「パー」と全員一斉に手を挙げさせる。きょろきょろとまわりを見回しつつ挙げる者、ワントンボ遅れて多そうなものを挙げるもの、挙げながら変えるもの、最初に手を挙げて、まわりの様子とプリントから読み取れるものをみてくびを傾げるものと、その様子を教壇のうえから見るときながら小学生の様子である。

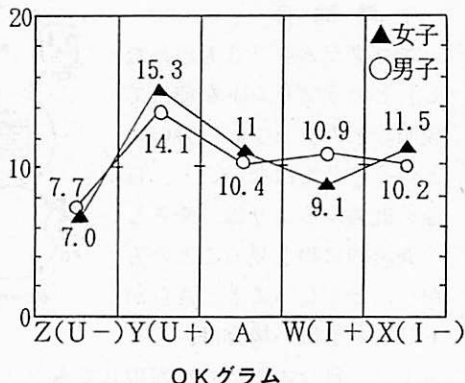
2 時間目

PACを理解し、その分類ができたことを確かめて、次に移る。それぞれの人間の心の中にPACがあること。人と関わったり、会話するときには、自分のPACのいずれかから、相手のPACのどれかに言葉を投げかけていること。そして、やりとり分析 (平行交流、交差交流、裏面交流) を説明する。先に、平行交流の説明をし、例示を見せる。この時、だれの心のなかにも「大人」の自我状態があって、親、友人などの「大人」の自我状態に向かって話かけると、会話が続くこと。また、相手が自分のどの自我状態に向かって言葉を投げ掛けているのかをキャッチして反応すると、会話が進むなど、黒板に例を挙げて説明する。練習問題をさせる。次に、自分自身の人間関係をふりかえって、2例ずつ作成させる。現実の自分を客観視するための演習である (おさらいののち、やりとり分析をするので、裏面交流は次の時間に回す)。生徒の会話例は、親とのやり取りのなかでは、自分のCから、親のPへの発信が多く、どの人との会話でも、AからAへのやり取りはあまりみられなかった。

3 時間目

もう一度おさらいしたのち、裏面交流の学習をする。そして、前回同様に、演習として、2例を作成させる。進度にムラがあるので、終わったものは、さらに「やりとり分析に続く会話」のプリントを行なう。最後の10分を用いてOKグラム（対人関係における基本的な姿勢を見るもの）の質問に全員取りかかる。表を

作成する。回収。（次の時間に説明する論旨を伝える）生徒のエゴグラムの平均は、右の図のとおりであるが、I（-）つまり、自己否定の者が多かったことが問題点としてあげられる。



4 時間目

OKグラムのプリントを返却し、エゴグラムのA（大人）を転記し、エゴグラムとの相関に気づかせる。

- ・ U（-）：他者否定の構え、CPと相関 You are not OKの略
- ・ U（+）：他者肯定の構え、NPと相関 You are OKの略
- ・ I（+）：自己肯定の構え、FCと相関 I am OKの略
- ・ I（-）：自己否定の構え、ACと相関 I am not OKの略

この4つの組合せから、へ型（自他ともに肯定的、前向きな人）、逆へ型（自分勝手な人、まわりを悩ませる）、N型（自己卑下の人、よく悩む）、V型（厭世的、葛藤する人）の各型にわけられるが、自分も他人も肯定的に考えることができる、対人関係にストレスが少なく、自己実現しやすいこと。望ましい形は、前向きで建設的な考えを持っているこのパターンであることを説明する。

これらの構えは、幼い頃からの親子関係、つまり重要な人との関わりのなかで形成されるものであることを説明し「人格形成ふりかえり表」を記入させる。

— 文 例 —

1. 子どもに戻って両親の人物像を書いてください。（母・父別）
2. 両親はあなたをよくほめましたか。
どのように、どんな言葉でほめましたか。（母・父別）
3. 両親はあなたをどんな態度、言葉、表情で叱ったり非難しましたか。
（母・父別）

4. あなたが両親に甘えようとしたときの両親の様子はどのようでしたか。(母・父別)
5. 両親のしつけの方針はどのようなものでしたか。(母・父別)
6. あなたは両親から罰を受けましたか。どんなものでしたか。(母・父別)
7. 人生や生活について両親はどんなことをよく言っていましたか。(母・父別)
8. 両親は、あなたが成人になったら何になることを望んでいますか。(母・父別)
9. あなたは、子ども時代に大きくなったら何になりたいと思っていましたか。 など続く



さいごに

生徒は、交流分析をゲーム感覚で始めるが、次第に自分を見つめ、自分と友・家族はどのような関わり方をしていたのか気づくようである。ふりかえり表を見ると、「誉められたことはない」「誉められたかもしれないが、覚えていない」、甘えようとしたとき「甘えられない」「甘えたことがない」「怖くていえない」「拒否された」と答えた者もいた。「今の定位家族の中で、子どもたちは愛されて育てられているのだろうか」そう思われるような者もいた。しかし、どんな環境であれ、家庭、家族は子どもにとって大きい影響を持っている。青年期に入る今、自分も親も客観視して、自分はどうかあるべきか考え、また自らが、他人との関わり方を変えていくことを学習することによって、人間関係を改善していくこと。自分も今の家族も肯定して生活することができるようになることが、未来の家庭を形成する者への学習指導ではないかと思う。

注1 「家庭経営分野指導のための地域、生徒の実態—家族関係に関するアンケート・国勢調査の結果から、家庭科に与えられた課題」(「家庭科教育」平成6年度5月号 宮城県高等学校家庭科研究会第1地区会)

参考文献

- ・「人間開発の旅—グループワーク・トレーニングの実例と解説—」坂野公信、高垣芳郎共著、遊戯社
- ・ブルーバックス「自分がわかる心理テスト」芦原睦著、講談社
- ・「親と子の交流分析—心のふれあいを求めて—」水谷大二郎著、法政大学出版部
(宮城・県立志津川高等学校)

おもちゃと保育

保育園訪問の体験から

荒井 智子

多くの中学校で実践しているであろう保育園での実習。ビデオや図書教材等活用して学習していても、一番理解できるのは、体験学習である。特に最近、核家族化と少子化の進行にともない、思春期に直接乳幼児に触れたり、世話をしたりした経験を持つ子どもが少なくなっている。そのために小さな子どもへの理解や体験に基づく知識をもたないまま、大人となり、親になっていく場合が少なくない。そのことによって、子育てにあたっては、不安や自信の喪失を招いたり、いろいろの育児に対するトラブルの一因となることすらある。

おもちゃ作りの計画と遊び方

保育園の園児のためプレゼント用におもちゃを製作する。

製作時間は5時間位で、幼児が喜んで遊べるもので、危なくないものということで、下記の内容で計画表を作成して製作にあたる。保育実習費を生徒から集めているので、班ごとに実習費をやり、購入するものはその金額の中で賄うことにしている。段ボールなど、家にあるものの活用もおおいにさせている。

昨年度は布ボールが大変喜ばれた。体にあたってもいたくないので、恐怖心をいただくことなくボールを使えることが良かったようだ。それに簡単なリング板を持っていたら、リングにボールを入れることにとっても興味を持ったようだった。

製作したおもちゃを幼児たちがどんなふうに工夫して遊ぶのかを観察することも幼児を知るうえで大変いい。生徒たちがイメ



写真1 「肩ぐるまやって！」

おもちゃの製作計画表の例

おもちゃの製作計画表		氏名	
3年組班	氏名		
種類	題名		
対象年齢	才	実習場所	保育園
ねらい	。		
製作するものの略図	必要な材料・用具		
作業の順序	1 2 3	4 5 6	
おもちゃの例	布ボール 糸電話	絵本 ボーリング	キャタピラ 輪なげ 紙しばい パズル

会計のまとめ

班	収入	円	シートを貼る
代表者	材料代	円	
	合計	円	

ージしていたのと違う様子で遊ぶのを見て、びっくりしていることもあった。幼児はとっても動く。生徒たちの方が目をまわしてしまいそうなほどよく動く。特に男子生徒が遊んでくれる肩ぐるまなどはうれしいようで、せがんでいる。最初はにかんでいた生徒の顔もいつしかほころんで、幼児のいいなりになっている光景が見られる。学校ではやんちゃな生徒も、ここ保育園では、立派なお兄さんぶりを発揮している。

保育園訪問にあたって

保育園の方でも年間のカリキュラムがあるので、4月当初に訪問先の保育園と話し合いを持つ。時間が許されるならば、保育学習の最初と、おもちゃ作り

を終えてからと2回位訪問できればいいが、時間的にも無理なので、私たちの学校では、保育園の行事のない月ということで11月上旬をあてている。

午後には訪問となると、お昼寝の時間になるので、4月当初の時間割を組む時に、要望として3年生の授業は午前中に組んでもらうようにしている。

訪問前に下記の内容で保育園の方に書類を提出する。

依頼状の例

平成〇年〇月〇日	
〇〇〇〇園長殿	〇〇市立〇〇中学校校長 〇〇〇〇
貴 〇〇〇〇園の見学についてのお願い	
本校3年生の技術・家庭科の保育領域の学習を、貴保育園見学によって深めさせていただきたいと思っておりますので、宜しくお取り計らい下さいますようお願いいたします。	
1. 対象学年	3年生〇〇〇人
2. 日 時	〇〇月〇日 () 〇時～〇時〇分 3年〇組 〇人 〇〇月〇日 () 〇時～〇時〇分 3年〇組 〇人
3. 内 容	〇手づくりのおもちゃを持参し、幼児たちとともに遊びながら幼児の様子を観察する。

保育園の見学後、右記の内容で各自まとめ、発表し合う学習をしている。生徒たちは常日頃幼児と接する機会が少ない。あるいは、無に近い生徒もいるので、とても緊張するようである。特に男子生徒は、どんなふうに語りかけたらいいのかと心配する生徒もいるようである。しかし、訪問してみると、いつしか幼児の無邪気な姿の中にすっかりうちとけている。

訪問が全クラス終了した後に、

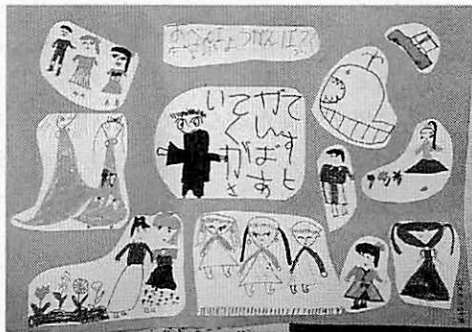


写真2 「てすとがんばって!!」

お礼と来年度への計画案づくりを兼ねて保育園を訪問している。園の先生たちに生徒の感想文を読んでもらい、更に充実した訪問学習するための話し合いをする。訪問した時のスナップ写真の交流会などもして、園にも学校にも写真の掲示をしている。

園児との交流会

受験が近づくころ、保育園の園児たちが学校へ激励のためにやってくる。文字は書けないので幼児たちの絵が描かれたお手紙を3年生に配る。

前もって、3年生の学活の時間をいただいて、簡単な贈呈式を各クラスでもらう。受験も近いせいか、生徒たちは小さな園児たちの激励を喜んでいる。

私たちの学校では上記のような交流会をしているが、それぞれの学校で工夫なされて、より意義深いものに行っている例もいくつか耳にしている。なんとといっても、生徒たちが直接接してきた幼児たちとの交流は、訪問前とは思いやりという点で大きく成長している。こんなことから、体験学習は大きな心の収穫になる。是非各学校工夫なされて実現なされた方がいいと思う。

保育園を訪問しての生徒の感想は次のようにまとめる。

1. 遊具は対象年齢に合っていたか。
2. ねらいは達成できたか。
3. 遊んでいる様子
4. 改善すべきところ
5. 訪問をしての感想

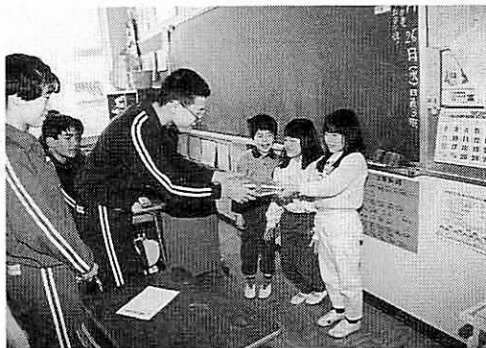


写真3 「きんちょうしちゃった」



写真4 「もっとつくってよ!」

(山形・山形市立第六中学校)

自然と食と教育を結ぶもの(2)

江戸時代と現代を重ねて見えてくるもの

農山漁村文化協会 専務理事
坂本 尚

食をどう捉えたらよいか

現代という視点から「食」というのを、どう考えるかとなると、「ヒトの食」と、「人間の食」という、両方から見ていかなければならないことになります。「ヒト」の食というのは、ホモサピエンスの動物としての身体、「人間」というのは文明を持った人間です。つまり頭で食べるわけです。この文化というのが、なかなかのくせ者で、子どもたちにテレビのコマーシャルを見せて、子どもの欲する通りに食事をさせると、間違いなく身体を壊します。つまり外側から、資本が食べさせたいものを、どんどん宣伝するわけですから、これは文明ですが、それによって食べるようになったならば、だいたい人間の身体は壊れます。ですから、そういう「ヒトとしての食」と、「人間としての食」とが矛盾している。おもしろいんです。つまり「ヒトと人間」が矛盾している、という具合に捉えることができる。つまり前項で、「内なる自然である身体」と「農耕という自然」が矛盾する、つまり自然と自然が矛盾していると申しました。そこから捉えていかなければいけないのです。食べ物もそうです。「ヒトとしての身体」と、人間としての「文明としての身体」が矛盾している。この身体は両方が自然ですから、自然と自然が矛盾している。その自然と自然が矛盾しているところを、どう克服していくかという具合に考えないと、問題別対応の「1対応1の技術」になって、次々と問題が発生次第、防御策を考えていくという、無限の戦いを挑んでいくことになります。それでも問題は解決しません。どんどん問題は広がって、大きくなっていくことになると思うんです。そこをどうしなければならぬかということですから、食という問題は、そういう角度で捉えなおさなければならない。それは、詳しくはお渡しした「自然と人間を結ぶ」に書いてありますから、ご覧下さい。島田先生の説ですね、長崎先生のもそうです。

食は、「栽培」—「加工」—「貯蔵」—「調理」というものを経て食べられる

わけですから。それを、ヒトと人間との矛盾関係から把握して、どうするかを考えていく必要がある、ということになります。

全体的に、こういったものが調和的に進んでいる時代というのは、どういう進み方をしているかという、これを支えているのは教育なんです。教育というのは学校教育という意味ではありません。「家庭教育」、「地域教育」、それから学校教育です。現代のように、学校教育に一切合切を、すべてゆだねるというわけではありません。

「家庭教育」「地域教育」「学校教育」どう捉えたらよいか

戦前までの日本を考えると、地域も教育力を持っていたし、また家庭も教育力を持っていました。何を食べるかというのは、家庭で教えるわけで、別に給食で教えるわけではありません。現代では給食で教えなければ、よい食習慣がつかないという、妙な時代です。地域環境もそうです。これ以上木を切ってはいけなとか、これ以上何々をしてはならないというのは、地域的な教育で行なわれていたわけです。村なら村の掟として、そういうものが守られていたわけです。学校の方は読み書きそろばんですから、これは知識教育をきちんとやっている、寺子屋教育です。「家庭教育」「地域教育」「学校教育（寺子教育）」この三つがそろって一つの教育をなして、それが自然と人間の調和関係を保っていたということが言えるわけであります。

今日では、「家庭教育」も「地域教育」も衰退して、「学校教育」にすべてが委ねられている。うっかりすると、箸の持ち方まで「学校教育」でやらなければならないという、妙な時代なんですね。箸がちゃんと持てるか持てないかは、学校で教育するかどうかで決まるんであって、家庭では箸の持ち方を当然教えない、ということが前提になっているみたいな、妙な社会です。

ここから逆に、自然と人間の調和を目指す社会を作る、というふうにかえますと、それを壊してきた過程というのは、先ほど述べたように、内なる自然、身体と、農耕＝第二次自然とが矛盾関係に陥っている。それから、「ヒトの身体」と「人間の身体」が矛盾する。教育の方は「家庭教育」も「地域教育」も放棄されて、教育力を失って、「学校教育」だけが教育力を保っている状態。これらをちゃんとしたものに戻していく上で、力を持っているのは、現在では学校教育しかない、ということになるのです。

学校教育が、「家庭教育」や「地域教育」を回復しなければならない、という妙な責任を負わされる。そうしなければ、学校もやっていけないし、先生もたまらないし、いくら言っても、目的は達成されない。やはり地域を巻き込まな

ければならない。次には、家庭を巻き込まなければならない、ということです。そういう前衛的な役割を、「学校教育」が負わなければならないというのが、現在の教育の課題なんです。

それでは、「自然と人間の敵対矛盾関係」を克服していく、「自然と人間の調和をめざす教科」というのは何であろうか。というと、まさにみなさん方がおやりになっている、「技術・家庭科教育」が一番基本になるということになります。これが基本になって、学校教育体系の全体を変えていき、地域の教育力を回復し家庭教育力を回復する。こういう、今まで積み上がってきた、「家庭教育」から始まって、「地域教育」、それから「学校教育」と積み上がってきたものを、今度は、逆に「学校教育」から、全体に下ろしていかなければならない。そういう役割を「学校教育」が持ち、その中で技術・家庭科教育が、大きな役割を担わなければならない、ということが大事です。そう農文協は考えてきました。

(3) 自然と人間の調和をめざす教育

「自然と人間の調和をめざす教育」ということが、現代の教育の意味になる。これまでの教育というのは、そうは言っていませんが、社会の生産力の発展を目指す教育というのが基本です。近代日本の教育はそうです。いかにして、ヨーロッパに追いつき追い越すか、ということに基本をおいた学校教育体系、というのが作られていて、それが成功してきたのです。つまり、生産力を発展させていくことが、教育の基本原理で、それに応じていろんなことが述べられていた。今日はそうでなくなって「自然と人間の調和を目指す教育」というのを、新しく、きちんと作っていかなければならない、という時代に入っています。社会の生産力の発展を目指す教育の時代に続く、新しい時代でしょう。

なぜそうなのかということ、今までは歴史的時間的に見てまいりましたが、今度は平面的（空間的）に見てみましょう。現在の生産というのは、生産—流通—消費、これで止まらないんです。現在ものを作る時の一番の問題は、「廃棄」をどうするか、というところから考えなければならない。

ものを作るということは、必ず廃棄物を生産する。生産過程でも廃棄物はできますし、消費過程でも廃棄物はできます。消費も廃棄物を生産します。その「廃棄物」をどうするか、ということを考えずに、生産をやるということは、地球と人間を破滅させることだということに、現代の特徴があります。

こういう時代は、人間にとって初めてなんです。採集狩猟の次に農耕が始まりました。その場合、人間は欲望について肯定的です。人間の欲しいものをとればよい、作ればよいのです。産業革命の時代まではそうです。けれども、産

業革命の時代が終わり、現代資本主義の時代になりますと、流通の生産に対する支配力が強まります。流通、販売によって、生産が決まってくる時代になります。流通、販売の都合で生産が決まる。生産よりも、販売が基本になります。それがもっと高じると、生産側が、欲望を作るという時代になります。産業革命の頃には、食べたいと思うものを作っていたわけです。現代は宣伝によって、欲望を先に作ってから、食わせる。こういうような時代になってくるわけです。人間の欲望が作られるということになります。おそろしい時代です。「ヒトの食」と「人間の食」が矛盾する時代です。

その時代を越えて、今日では、「廃棄すること」を考えて作らなければならない時代になりました。生産は、完全に人間の欲望から離れます。資本が、消費を作る場合でも、人間の欲望を基本にしました。人間にコココーラを飲みたいという欲望を起させる。これは、どう考えても人間の欲求ではありませんし、健康にとって何の意義もありません。「スカッとさわやか」なだけです。これは資本が生み出した欲求、それでも飲んでスカッとするということで、人間の欲望が土台になっています。

けれども、「廃棄」をどうするかという欲望なんて、誰にもありません。廃棄をしたいという欲望によって買うなんていう人は一人もいません。つまり、人間の欲望からだけでは、ものを生産できない時代に入っているのです。

生産の倫理の時代へ

廃棄をどうするかというのは、倫理的な問題です。「いかにあるべきか」ということを経て、ものを作らなければならない。そういう倫理の時代に入っているんです。そうでなければ、必ず生産が破綻していくということです。その上で、人間の欲望に応えなければならない。どんなに人間の欲望に応えていても、廃棄上に問題があれば、作るべきではない。つまり倫理が優先する世の中になっています。そうすると教育とか、考え方というのが、基本にならなければならないということです。そうしないと地球が壊れてしまうのです。

もう一つ、サステイナブル (sustainable) な発展ということがあります。つまり、工業の発展でも、農業の発展でも、限界があって行き詰まるということは、これまでの時代では考えられなかったんです。廃棄の時代においては、いつかつぶれる可能性があるから、つぶれないように「持続的に発展」することを考えなければならない、ということになります。

近代倫理というのは、1対1、個人対個人の倫理です。人間と人間の倫理です。決して、親であるとか、孫のことと関係ないんです。親が犯罪を犯したか

らとって、孫がその責任を負う必要はないことになっています。近代の人間倫理は、そういうものです。けれども、廃棄の時代においては、そうではなくなってくる。自分がやるのが、孫に対して害になることをやってはならないという、世代を越えた倫理が要求されるのです。いま我々が、良いということも、もし孫に悪ければ、やはりやるべきではない。つまり、世代を越えた倫理が問われているのです。

近代の倫理観というのは、人間対人間を基本にしています。ヨーロッパの場合は、そのベースに神という存在があるのですが、日本ではこれを抜いてしまっています。民主主義も、神の御名において民主主義なんです。日本の場合はそれが抜けてますから、人間対人間だけの倫理ということになりましょう。生産においても、消費においても、その過程で生産される廃棄物を問題にしなければならぬ時代において、これまでの「個」対「個」、「人間」対「人間」の倫理にとどまっていたよいか問われています。人間と自然との関係における倫理、つまり自然をどのように使うか、という倫理観の確立が問題になるわけです。これ以上あなたは使ってはいけない、自然はみんなのものだというような倫理が、基本になって来るのです。つまり、根本的には、自然と人間との関係における倫理というものを確立していかなければなりません。

「むらの倫理」の現代的意味

そう考えると、日本の封建時代にあった、「むら倫理」がちゃんと生きてくることになります。「むら」に、山なら山に入って、これ以上切ってはいけないというようなルールが、きちんとあるんです。取り尽してはダメ、家族の多い少ないに取り分を応じさせる。山へは馬をつれていってはいけない、人間の手で取れる範囲だとする。すると、人口の多いえは多く取る、少ないえは少ししか取れない。こういう具合に、それぞれが、自然に対して、いかに平等か、あるいは、ある世代が取り尽くさないルールをきちんと作っていた社会が、「むら」なんです。そして、「むら」は自治です。さむらいが入っていません。山の使い方、木の採り方、カヤ場のカヤの刈り方など、すべて決めていたのは「むら」です。そこには、自然と人間との関係についての倫理が確立していました。私たちは1970年代から、この「むらの倫理」を「むら民主主義」と名付け、見直しています。日本の民主主義というのは、人間と人間との関係における民主主義ではなくて、人間と自然との関係において人間の自由、平等、つまり大きいものは大きいなりに、小さいものは小さいなりに生きていく論理というものが、「むら」においてはできあがっていたんです。貢租関係における農民を搾取す

る封建主義の根源の領域、民衆の「生活世界」においては、自然と人間との関係における民主主義が確立していました。封建主義で、民衆の暮らしている「むら」という社会においては、そういう平等はあったということです。これを勉強していきますと、かなり緻密な自然を土台にした民主主義だということが分かってきます。ここに突き当たって、もう一度現代における倫理の根源について、考え直すことになります。

技術・家庭科教育は「つくり」、「つかう」ことを学ぶ

もう少し言いますと、技術・家庭科の基本というのは、ものを作って使う、という両方が入っている。作るだけではない、使う立場で作る。いま話題になっている「情報基礎」もそうで、情報を作って使うことを教わるわけで、どこかの会社の情報処理をやるのではない。電気を学ぶときも、電気を売るために習っているんじゃない、ある電気をどう使うかをやる。つまり生産し、利用するというのを統一的につかむというところに、技術科も家庭科も同じような性質を持っています。自然と人間との関係をきちんとしていく基本はそこにあります。

これは、単なる知識ではありません。これ以上、木を切つてはいけなとか、ここに建物を建ててはいけなとかは、感覚です。倫理は知識ではなく感性にならなければ、有効性がありません。そういう日常感覚を作らなければならない。そういう感覚を作る場が、他の教科にあるのか、ということです。もちろん鑑賞眼などの感覚は、美術などにもあります。けれども、この木は切るべきではないとか、これ以上使うべきではない、というような倫理感覚を養う教科は技術科と家庭科の二つしかないと私は思うんです。そして、これらが中心となって、他の教科を、どうリードしていくかということが、次代への技術・家庭科教育の基本だと考えます。ベースとなるのは環境倫理です。環境倫理を基本にした、ものの見方、考え方というものを養っていける教科と考えます。

環境倫理学を、学問として学んでもだめです。感覚として分らなければだめです。身体で覚えなければ、だめなんです。これはいやだ、と思わなければいけないのです。健康に悪いものは、食べたくない。健康にいいものはおいしい、食べたいな、と思わなければならないのであって、そういう教育が基本にならないと、いけないんですね。覚えて、だからこう食べる、というのは絶対にだめなんです。そこをどう作っていくかと考えると、これからの技術・家庭科の持つ意味というのは、きわめて重要だと考えます。

(つづく)

産業革命時の水力式綿紡績工場①

アークライトのクロムフォード工場

愛知教育大学
日下部信幸

はじめに

産業革命初期に発明された三大紡機のうち、ハーグリーブスのジェニー紡機は、手回し式でスピンドル数も多くすることができない構造となっていたため、家内工業の機械として使われた。アークライトの紡機は最初から動力を手回しではなく馬力に求めていたので、容易に水車を動

力にした機械として利用することができ、水力工場で使われた。また、クロンプトンのミュール紡機も、最初はホイールの回転を人力に頼っていたが、スピンドル数が多くなって人力では動かすことができなくなると、馬力を使い、さらに水力を使用した。特に、アークライトの紡機はいちはやく水力紡機に改良され、1771年には世界最初の水力式綿紡績工場が建てられた。

ここでは、産業革命を成功させた水力式綿紡績工場の代表的な工場として、イギリスのクロムフォード工場とニューラナーク工場、アメリカのスレイター工場とブーツコットン工場について述べる。イギリスやアメリカでは工場をミル(mill、水車小屋)と呼んでいるが、これは産業革命時に誕生した大工場がすべて水車を利用した水力式工場であったからであろう。

クロムフォード工場 (Cromford Mill)

既に述べたように、アークライトとパートナーたちはノッテンガムで紡機を馬力で運転した小さな工場を建てていたが、馬力ではあまり効率がよくない

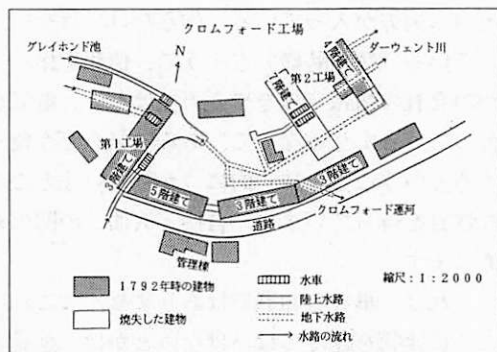


図1 クロムフォード工場の
建物配置図と水路

ことから、水車を動力とした連続的に運転できる工場を考えていた。そこで、彼らは年間を通して水車を回すことができる十分な水量のある川と工場が建てられる場所を探した。そこはアークライトが住んでいるノッテンガムから40kmほど北西部にあるダービー州 (Derbyshire) のクロムフォード (Cromford) で、ダーウエント川 (River Derwent) の溪谷の流れを利用した。彼らはまず土地と水の使用权利を得た後、1771年の夏から工場を建て始め、同時にダーウエント川の水で池を造り、そこから水路を掘って工場の水車を回すことにした。同年12月には一部完成し、水力紡機を稼働させた。同時に、工場で働く人を探したり、労働者用住居も建てる必要があった。というのは、クロムフォードは人里離れたとてもへんぴな所にあり、地元から十分な労働者を集めることができなかったからである。労働者の一部は地元の人を雇ったが、その他は鉱山で働いていた人や農家の家族を募った。同年12月の地元新聞ダービーマーキュリー (Derby Mercury) に、次のような求人広告が出された。

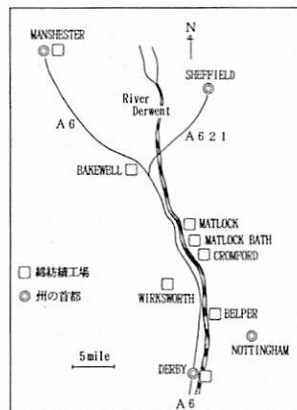


図2 ダーウエント川流域の水力式綿紡績工場

『求人広告・綿紡績工場、クロムフォード、1771年12月10日。至急求む！：2人の職人さん、1人は時計工、他の1人は歯車についてよく知っている人。また、鉄を加工できる人や歯車やスポールが作れる木地師さん。近隣の熟練した手織り工さんは工場でご好条件で仕事ができます。子供や婦人もよい賃金で募集しています。大量のつげ材も求めています。上記に関するお問い合わせは、アークライト工場またはストラットまでご連絡下さい。』

この広告を読むとクロムフォード工場は水力紡機などを運転するために子供や婦人、機械を設計したり製作したり修理したりすることができる技術者、工場生産した糸で綿織物を織ってくれる手織り工、機械を製作するために丈夫なつげ材まで求めている。すなわち、当工場は原料から製品までの一貫性生産と紡績機械の製造と修理する部門まで備えて、家内工業生産では考えられなかった、まったく新しい形態の工場システムを確立しようとしていることが分かる。この広告で最も重要な点は、子供まで求めていることで、その後の産業革命時の紡績工場などでは、7～8歳の子供も雇われていた。

この広告を見てやってきた労働者たちによって、クロムフォード工場の共同

体の発展が始まり、宿舍も建てられ、その3階の最上階は手織り工たちの織り工場として使われた。その後1775年ごろになると、カード機、練糸機、粗紡機など、水力紡機の糸質を高める前工程の機械も整ってきて、より細く均一な糸が生産できるようになった。このように、原綿から製品までの一貫性生産システムが確立すると、1776年には第2工場も建てられ、労働者の数も増えた。

世界最初の生産工場としてクロムフォード工場がいかに大きいものであったかは、図1の見取り図やリフレッシュ中の写真を見ても分かるが、その他、次のようなエピソードも報告されている。「1776年に完成した第2工場（1890年の火災で焼失）を祝うために、クロムフォード工場で働いている500人以上の労働者や子供たちに対しフェスティバルが開かれた。村中をバンドを従えてパレードを行い、工場内に戻るとビールと干ぶどうのパンなどのごちそうが並べられており、夜遅くまで、大舞踏会が続いた。」と伝えている。

第2工場ができたために、1779年には数千錘の水力紡機が備えられ、約3000人が働いていたという。1790年には工場の近辺に労働者住宅が建てられ、教会、マーケット、診療所、見学者のためのホテルなども建てられた。

アークライトは水力紡機などの発明家であるのみでなく、工場システムの父（The Father of the Factory System）と呼ばれるのは、工場経営にも力量を発揮したからである。例えば、生産向上のために企業内訓練を重視したり、労働者の健康管理に気を配って工場内に医師と看護婦を常駐した診療所を開いたりして、今までになかった新しい形態の工場にした。

クロムフォード工場に成功したアークライトとパートナーのストラットは、同じダーウェント川でクロムフォード工場から10数km南下したベルパー（Belper）に同じような水力式綿紡績工場を建てた。1781年、理由は不明であるが2人はパートナーシップを解き、クロムフォード工場はアークライトが、ベルパー工場はストラットが持つことになった。このベルパー工場には、後にアメリカの産業革命の父といわれるスレイター（Samuel Slater、後報で述べる）

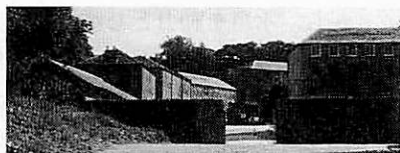


写真1 クロムフォード工場



写真2 第1工場（中央付近に水車が置かれていた）

がストラットの片腕として働いていた。

その後、アークライトは1783年にマトロック・バス (Matlock Bath) にマッソン工場 (Masson Mill)、スコットランドのラナーク (Lanark) にグラスゴウの銀行家デール (David Dale) と共同で、1785年にニューラナーク工場 (New Lanark Mill) を建てた。特にクロムフォード工場のあるダーウェント川流域は、図2のように、水力式綿紡績工場が多く建てられたので、ダービー州のダーウェント溪谷 (Derwent Valley) は産業革命の発祥地といわれている。

アークライトの最初の紡機の特許期限が1783年に切れたり、水力紡機の特許が特許侵害の訴訟に敗れて1785年に無効になるなど、アークライトは大きな打撃を受けたが、その後、ノッテンガム、ベークウェル (Bakewell)、ワークスウォース (Wirksworth)、マンチェスターなどに蒸気機関を動力とした工場を次々と建て²⁾、水力紡機の偉力をみせつけた。1786年イギリス王ジョージIII世から“ナイト”の称号が与えられ、Sir Richard Arkwright と呼ばれた。

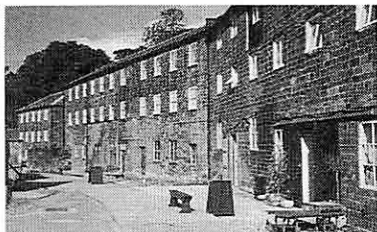


写真3 クロムフォード工場内の宿舎と手織工場

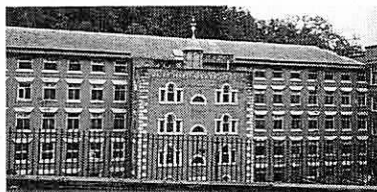


写真4 マトロック・バスのマッソン工場(1994年、この右側の建物は取り壊し中であった)

付 記

- ①本報の多くは Arkwright Society が出版している「Cromford Mill」の小冊子を参考にした。
- ②クロムフォード工場は現在博物館としてリフレッシュ中で、建物の内部は一部しか見学できない。しかし、工場敷地内は自由に見学でき、1日数回のツアーガイド (Guided Tour) も行なわれている。小さなショップやレストランもある。

文 献

- 1) 日下部信幸：技術教室 No.503 (1994. 6)
- 2) 角山栄：産業革命の群像 清水書院

カンキツ(3) ユズ

大阪府立園芸高等学校
今井 敬潤

ユズのはんげんぢきはちんこ

冬の葉の青く澄み立つひとつ木に著しもよ柚の玉の光り 島木赤彦
まわりは末枯れなのに、緑の葉にまじり黄色の実をつける柚子の樹をみつける。黄色というよりは黄金色といった方がふさわしい。

ユズは中国の長江上流が原産地で、近緑種には、スタチ、カボス、ハナユ(花柚)などがある。カンキツ類の中ではカラタチと共に耐寒性が強く、青森県まで分布が認められる。高知県と徳島県が代表的な生産県として有名である。

柚がユズでない時代も

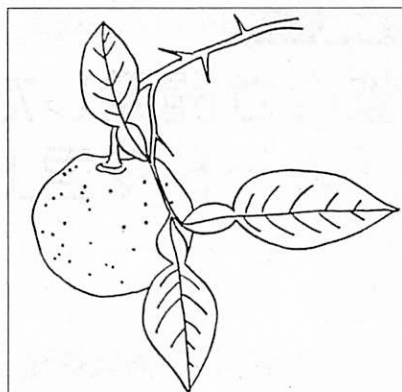
わが国では、橘、橙、柑子等と共に、古くから親しまれてきたカンキツ類である。ユズが最初に文献にあらわれるのが『続日本紀』であること等から、奈良時代までには伝来していたと考えられている。この『続日本紀』の宝亀3年(772)6月19日の条には、「戊辰、往々に京師に隕る石あり。其の大きき柚の子の如し、数日にして止み。」とある。古くは、ユズの果面が粗いことから、オニタチバナと呼ばれていたが、石のたとえに用いられたことも納得がいく。

平安時代の『延喜式』や『蜻蛉日記』には、供物、調味料、生食果実としての利用の記載があるが、貴族層に限定され、一般的なものではなかった。

近世初頭の農書『清良記』では、橙と共にユズの栽培価値が認められている。17世紀末の『和漢三才図会』では、「柚は切片を鱈や肉の羹に入れると芳しい香りがしてよい」、「小柚(花柚)は、花は大へん良い香りがするので摘んで酒や肉の羹の中に入れる」とある。加えて「柚味噌、柚辺志」などの技法を凝らした料理についてもふれており、柚の香料としての利用は現代と大差ないといってもよい。18世紀中葉の産物帳である『越後名寄』の「柚、農家戸毎に大樹多く栽ゆ」という記載から、重要な家庭果樹であったことと共に、広く普及して

いたことが窺い知れる。

さて、近世の本草関係の文献では、ザボンをさす植物名として柚が用いられていることが少なくない。注意しておきたいところである。中国名の柚は中国の古代ではユズにあてられていたが、後にザボンにあてることとなった。明代の代表的な本草書である『本草綱目』では柚はザボンをさしている。後に、この書は日本へ伝来し、わが国の本草書に多大な影響を及ぼすこととなり、柚=ザボンというような事態が生じたのである。



ユズの果枝

柚湯の季節

ユズの皮をむくと霧のようなしぶきが飛び散り、心地よいフレーバーが鼻をくすぐる。これは果皮の油胞の中に含まれる精油成分、特にシトラールによるものである。因に、カンキツ属はシトラス属ともいう。今月末の冬至の日、柚湯があちこちの銭湯でたかれると思うが、このシトラールのシャワーを浴びるのである。湯にとけた精油は、皮膚表面の毛細血管に刺激を与え、血液の循環・新陳代謝を促進させる効果があることはよく知られるところである。

ユズの棘（トゲ）の語るもの

「ユズにトゲがなかったら」これはユズ栽培農家の方の切実な声である。2 cm前後のトゲが葉1枚に1本といわれる程多く、収穫しづらい。富山県で、「柚の木に裸で登る」（非常に難儀なこと）という諺があるぐらいである。スキー用手袋に似たものをつけ、顔も覆い、仰々しい出立ちで、注意深く収穫しなくてはならない。ユズのように長いトゲを有し、利用されている果樹は、世界に例を見ない。こういう点を考えれば、「トゲ」という想像以上の栽培上の障害をもつともせず、絶ゆることなく、現代にまで生きて来たユズの姿は一層大きなものとして浮かびあがって見えてくる。今後もひき続き、極めて日本的な香料料として注目されていくであろう。さらに、温州ミカンの台木として、温州ミカン全盛時代を支えた姿もわが国のユズの歴史を語る上で看過してはならない点である。

教員が開発した情報基礎 「オートマ君」

東京都調布市立神代中学校

本多 満正

1 技術科らしい情報基礎「オートマ君」

ツルツルの表面めざして生徒たちが熱心にヤスリをかけています。作業も一段落、互いに「アイツの(ワザ)はすごい」と批評しあいながら、「よし、俺も」となおも挑みます。次の旋盤も、さっきのヤスリがけ同様、生徒たちは互いに刺激し合いながら、作品ともども技能も磨いて自信をつけてゆくののです。

ヤスリ(道具)の場合は、力を入れながら面を保持し移動させる技能が求められますが、旋盤(機械)の場合は、刃物台を正確に送る技能が求められます。かつて技能の一部であったものが機械(技術)に組み込まれた結果、旋盤の刃物台を正確に送ることをコンピュータで扱えるようになり、よりやわらかく自動的に機械を動かすことができきます。データを変更すれば作るものの形も変更できますし、一旦プログラムにしまえば、場所が変わっても同じ精度で製品をつくることができます。このような生産技術へのコンピュータの適用の姿を技術教育の立場からしっかりと教えることは、未来を生きる子どもたちにとって大切であることは疑いようがないことでしょう。機械および技能の一部であるコントロール部分をコンピュータが担っていることのすごさを感動をとめないながら頭と身体で実感豊かにわからせ、そのことを踏まえた上で現在の社会的な生産の世界に対して自分の意見を持たせたいものです。中学生に無理なことではなく、先端技術をビデオで見て無人化工場の増加と失業者問題について言及したり、機械に対する人間の優位性を見つけだしたり、人間に求められる課題を考えることができていました。⁽¹⁾

ところで、情報基礎領域の新設と同時に技術科教育の実質的削減が起きたことは残念でなりません。他領域を結び付ける役割を期待したいものです。⁽²⁾

「オートマ君」は、すべての生徒にキー操作でつまづかせることなく、驚くほど簡単に自動化の実習を保証するソフトウェアです。しかも、機械をコント

ロールする部分をコンピュータが担っていることが分かりやすく、コンピュータから動かされるものへ“出力”を関係づけたり、逆に作動状態の有無をコンピュータへ“入力”したりというプログラムの学習を行なわせます。命令や行数が制限されていても複雑な処理のプログラムも作成できるので、生徒たちは苦心しながらも目標のプログラムができたとき、大変喜んでいました。生徒の達成感を満たすほど実は、奥が深いものであったのでしょう。

2 「オートマ君」を用いた授業の実際

- (1)授業名；基礎編“オート三輪車で難コースにチャレンジ”（2時限）
- (2)ねらい；オート三輪車を直角にターンさせるプログラムと20cm前進させるプログラムを組合せて繰り返し処理をさせ、四角形に動いて止まるプログラムを作るなど適宜繰り返し処理のプログラムを作ることができる。
- (3)学習の展開
 - ①右に直角にターンするプログラムを考えさせ作らせる。
 - ・出力結果と車輪の対応関係を思い出させる。
 - ・“出力ON→時間→出力OFF”が基本であることを思い出させる。
 - ②作成したプログラムの結果を実際に確認させる。
 - ・進度に応じて左直角ターン、180・360度ターンのプログラムを作らせる。
 - ③右直角ターンの方法が2つあることに気づかせる。（片輪のみか両輪か）
 - ④四角にまわるプログラムを考えさせる。
 - ⑤クランクコースのプログラムを考えさせ作らせる。
- (4)留意点
 - ・OFF忘れ対策；①の段階でONした後にOFFすることを確認させる。
 - ・進度差への対応；②の段階で一斉に答えあわせを行なわせる。
- (5)学習の発展；自作のコースを作り、互いに楽しみながら解きあっていました。

注

- (1) 本多満正「先端技術の世界との接近による中学生の技術観の発達」『技術教育研究』第44号、1994年夏号、技術教育研究会
- (2) 大谷良光氏は、「機械学習を中軸に」との見解を示し、総合学習の段階にそって明解に説明を行なっている（『技術教室』第501号、1994年4月号）。このソフトは河野道也教諭の協力を得た。

光ファイバーで大型ディスプレイに 動画像を映す

日刊工業新聞社「トリガー」編集室

プラスチック光ファイバーが家庭に入ってくる

米国では、基幹通信網から末端の家庭や企業、学校、病院、図書館など、隅々まで光ファイバーケーブルを張り巡らせる全米情報通信網、いわゆる「情報スーパーハイウェイ」が構想されている。日本でもマルチメディア時代へ向けて2010～15年までに全国を光ファイバーで網羅しようとしている。

これらの基幹通信網には伝送損失の少ない石英系光ファイバーが使われるが、幹線網から各家庭へ入ってくる光ファイバーや家庭内の光ファイバーには、自由に折り曲げて配線することのできるプラスチック光ファイバーが使われる。プラスチック光ファイバーの原料は、ポレメチル・メタクリレート（PMMA）やポリスチレンなどで、優れた加工性をもつが、石英系や多成分系に比べて透光性能に劣り、長距離伝送には向いていない。そのため、装飾分野を中心にライトガイドや光センサーなどの用途に限られていた。光ファイバー市場全体では石英系が95%を占め、プラスチックは5%に止まっている。

光ファイバーをディスプレイに

ところが、プラスチック光ファイバーの透光性能の差は、オフィス内でのパソコン間の通信や工作機械とコンピュータの接続、オーディオでの使用など50m以内の通信ではほとんど問題にならない。そのため、情報スーパーハイウェイ構想などの登場より、将来、マーケットの拡大が期待されるようになり、応用分野も少しずつ広がってきている。

例えば、従来の通信に使われるだけではな

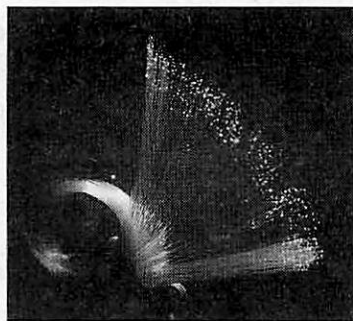


写真1 プラスチック光ファイバー「レイテラ」

く、動画像を伝送するシステムに利用されている。東レ(株)とNTTデータ通信(株)が共同で開発した「レイテラビジョン」がそれ。レイテラビジョンは、液晶画面に映し出された動画像を光ファイバーで伝送する対角50インチのディスプレイ・システム。21万本の



写真2 プラスチック光ファイバー168万本を使用した「レイテラビジョン」の応用例

プラスチック光ファイバーの塊が、小さな液晶画面をがちり覆っている。液晶画面の後ろから強力な光(バックライト)を当てると、映像がプラスチック光ファイバーの中を通り、ディスプレイ上に映像が映し出される。

また、プラスチック光ファイバーは、液晶画面上に2mmピッチ(間隔)で正三角形に配列されている。ある一段をみると、その上の段と下の段でそれぞれ1mmずれている。というのも、丸い断面の光ファイバーを緻密に隙間なく並べるためにはこの並べ方が一番効率よいからである。この高密度配列により、表示画面は極めて精細で見やすく、ちらつきをなくしている。

このレイテラビジョンはテレビ並みの明るさがあり、コントラストも高いため、明るい駅構内のような場所でもはっきりした画像が十分に保たれる。実際に大阪・梅田駅では、プラットフォームの行き先や発車時刻などを案内する表示板に使われている。これには8つのレイテラビジョンが使用され、大きさは縦2.2m(表示部1.5m)、横5.9m(同4m)、奥行き1.05mの大型ディスプレイとなっている。通常、バックライトには複雑で大型の機器を必要とするため、奥行きが必要だったり、コストが高いことが問題であった。その点、プラスチック光ファイバーなら、バックライトの光を液晶から表示面までファイバー自身で直接導くので、複雑の機器を必要とせず、省電力、低ランニングコストであるうえ、折り曲げが自由なので薄型のボディにできる。

最近ではこのようなディスプレイに加えて、耐熱性プラスチック光ファイバーの開発により、自動車のLANシステムの配線にして使われている。今後はより身近な生活の中でプラスチック光ファイバーは実用化されてくることだろう。

(猪刈 健一)

なぜ技術科が嫌いになるか

東京都保谷市立柳沢中学校
飯田 朗

きりと、げんのう

「教科書の図を見て下さい。釘の下の穴はきりを使ってあけてください。」と説明して、作業に入りました。説明を聞かない生徒が年々多くなり、困っていましたが、今年はさらに大変です。きりを使うのはめんどくさいとばかりに、いきなり釘を打つ生徒。めんどくさいといって、きりの頭をげんのうでたたく強者もいます。「手のひらがカユクナル〜！」と言って騒ぐ生徒など、「個性的」な使い方をする生徒が何人もいます。

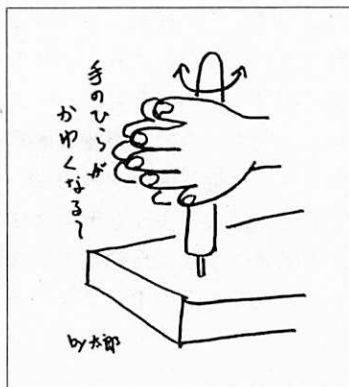
プラモデルなどを作った経験のある生徒でも、イラストを見るだけで解説を読まずに組み立てていることが多いようです。ですから、教科書の工具類の使い方の解説は現在の生徒にとってはわかりにくいようです。ましてや、最近ではプラモデルを作ったことのない生徒が多いのですから、教科書の図や記述では理解するのがたいへんなようです。

教科書の記述を読んで、図を見てもわかりにくいところを教師が補っているつもりでも、なかなか理解してもらえないときにはなさけなくなります。

嫌いになる理由は？

教科書を読んでもわからない、説明を聞くのも「カッターイ」、うまく製作ができないなどが重なりますと技術科嫌いが増えていきます。

しかし、それだけが原因ではないかもしれません。私は次のようなアンケートを実施しようかと考えています。



アンケート (案)

- A 中学校に入学する前に刃物や工具を使った経験がありますか？
- ア ナイフで鉛筆を削ったり、木を削ったことがある。
 - イ のこぎりを使って木を切ったことがある。
 - ウ げんのう（とんかち）でクギを打ったことがある。
 - エ かんなどで木を削ったことがある。
 - オ その他（工具の名前などを具体的に書いてください。）
- B 学校の授業で何かを作る時、時間内に完成させることができましたか？
- ア 授業時間内で仕上げることができた作品がほとんどだった。
 - イ ときどき時間が足りずに、放課後残ったり、家に持ち帰って作ることがあった。
 - エ その他（できるだけ具体的に書いてください。）
- C 今までの授業などで何かを作る時に、先生や親に手伝ってもらったことがありますか？
- ア 手伝ってもらわずに、自分だけの力で作品を完成させた方が多い。
 - イ 少しは手伝ってもらったが、ほとんど自分だけの力で作品を完成させた。
 - ウ ほとんど手伝ってもらい、自分の力で作品を完成させた経験は少ない。
 - エ その他
- D 授業などで何かを作る時につぎのような経験がありますか？
- ア 何を作ろうか考えていると「早くしなさい！」とせかされて、自分が好きなものが作れなかった。
 - イ 自分の作品を友達が見て、「へたくそだな」などとひやかされた。
 - ウ 自分が満足した作品でも、成績が低かったので「自分是不器用なんだ」と思った。
 - エ 授業で完成させた作品を親に見せたときに「なにこれ？」「役にもたないもの作ってきて」などと言われてがっかりした。
 - オ その他

ソバのはなし

麵の文化を考える

市立名寄短期大学
青木香保里

広い北海道を車で走ると、思いもよらない風景に出会うことがある。7月下旬から8月上旬、名寄市から車で1時間ほどの幌加内町では、そばの白い花が一面に咲く。刈取りの済んだ黄金色の小麦畑と薄紫色のじゃがいも畑が点在し、水田と山々の緑、空の青と、みごとなコントラストを描いている。車の運転を止めて、しばし大きな自然の絵画の前にたたずむ瞬間である。やがて9月下旬になると、そば畑にも深まる秋の気配が訪れ、収穫の時を迎える。

1. そばの生産高全国一は、北海道

道内には新得・八雲・^{おといわつよ}普威子府・鹿追など、そばの名産地が多い。なかでも幌加内町は、まちおこしや休耕地の活用などもあり、そばの作付面積は日本一。生産高の都道府県別は、1位～3位は北海道、青森県、鹿児島県の順で、信州そばで名高い長野県は4位である（「ポケット農林水産統計1994」より）。

手打ちそばの講習会も各地で行なわれ、国産そば粉の良さが再認識されている。

2. 北海道の開拓とそばの歴史

北海道の開拓が始まると原野が切り開かれ、開墾したばかりの土地に播かれるのがそばであった。荒地でも育ち、2カ月で実るそばは、連作の影響が少ないことから、開拓が推し進められる過程で貴重な作物だった。また、体を酷使する労働による空腹を補い、加えて簡単につくれることもあり、農繁期の忙しいときの昼食・間食としてそばがきは重宝であった。

ところで、国内でそばが登場したのは意外と古く、縄文時代に遡る。江戸時代になると、「そば切り（今日そばと呼ぶもの）」が登場する。それ以前のそばの食べ方は、そばがきやそば餅、団子や饅頭のようなもの。そば切りは、他のそば加工に比べ手間のかかることから、山村ではハレの日のご馳走として食べられた。このそば切りが、当時10万都市であった江戸に持ち込まれ、屋台で売

られたこともあり、値段が手頃で手軽にできるそば切りは愛好されるようになる。都市化がすすみ単身の労働者等が増えた江戸時代において、さしずめ、江戸版ファーストフードの代表のひとつがそば切りだったといえよう。

3. さまざまな麺から、食文化を考える

現在の日本では、いともたやすく食べものが手に入るという錯覚に陥ったり、次々と新しい食べものが開発・紹介され、目先の新しさにつられてブームにこそなれ、まるでそれは人々のきまぐれな欲望を満たしているかのようでさえある。もちろん企業の巧みな戦略もあろう。一方では、一食の食事、一皿の料理に用いられている原材料がどこから運ばれ、どのように加工され、私たちの食卓にのぼるのか、またそれらをめぐってどのような問題が発生しているかなどを今ほど国際的な視野で捉え直すことが求められている時期はなかろう。

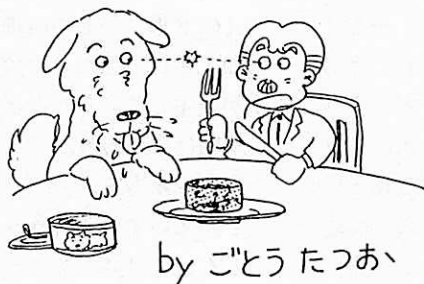
ところで、そばの他に北海道を代表する麺といえばラーメンがある。のど越しのよい素麺や冷麦は、暑い夏ならではのご馳走であるし、寒い冬の鍋焼きうどんは体を内側から程よく温めてくれる。いまだきの子どもたちはスパゲッティが大好きだ。即席麺の存在も見逃すことはできないだろう。このように、ざっと見渡しただけでも、麺は私たちの食生活に深く関わっていることがわかる。

かつて中学校で教えていたとき、「小麦粉を原料にして作られる麺のうちで、なぜ代表的なものはイタリアがスパゲッティで、日本はうどんなのか」が疑問であったことがある。調べるうちに、小麦の種類が違うことがわかり、その土地に適する小麦（作物）が異なることで微妙な調理特性の差異や生まれ、その気候風土に合った他の作物と結びつき、調理方法が工夫され料理が生み出されたのだ、という考えに至った（スパゲッティを例にすると、デュラムセモリナとトマトやオリーブオイルの存在）。たとえ当然すぎる摂理であるにしても、「自然と食べものの関係って、うまくできてるなあ」と、発見は新鮮であった。

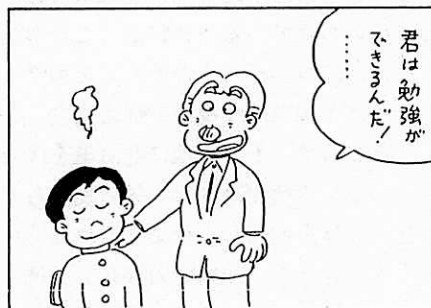
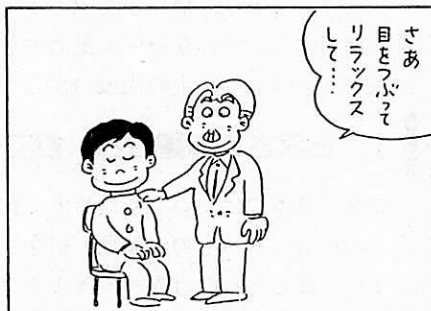
教科書を見ると、「食物」領域の「日常食の調理」で『めん類の調理をしよう』の単元が設けられ、実習例として「スパゲッティ・ナポリタン、ミートソース」「煮込みうどん」「冷やし中華そば」等が掲載されている（開隆堂・上巻）。その本家本元のお国柄を想像すると、考えようによっては国際的である。多彩な麺が掲載されているのだから、これらの料理が生まれた背景を歴史や地理から探ることで、食文化の一端にふれる絶好の機会になると考えたい。そして地域で栽培されている作物を入口に、市町村史をひもとき博物館や郷土資料館を舞台にして、自然と食べものと人間のありようを考えるのは、いかがであろうか。

すくらぶ

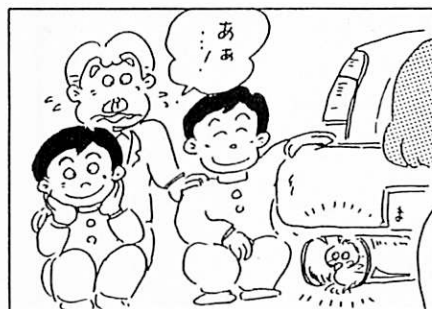
イメージトレーニング NO 69



こだわり



巢



かん詰



ゴミ問題、あなたにとって問題ですか？

提案 自然・社会・生活を吟味する教育

神奈川県立厚木商業高等学校
片岡 則夫



環境問題を生徒は「問題」と感じていない

「ゴミ問題はあなたにとって問題ですか？」という質問。3人の高校生がこう答えます。

「私にとってゴミ問題は問題ではない。一般にゴミ問題、エコロジーなどとさわがれているが、私一人が賢明に考えて実行してもしかたがない。他の人が考えているのかといえばそれもうたがわしい」

「私はコンビニでバイトしています。ゴミが毎日たくさん出ます。(略)夏にあった花火大会に備えて大量に仕入れたおにぎりも、あまり売れず八百個ぐらいのおにぎりを捨てることに……。しかし、今の日本ではゴミはストップできないと思う。(略)わたしだったら、冷たい言い方、私ひとり気を遣ってもしようがないと思うし……。結局現代人はほとんどの人がそうやって生きているのだから……」

「よく『一人ひとりのレベルから』なんて言いますが今の世の中じゃ『フンッ！ 私一人がやったって……』という人たちばかりです。無駄なあがきはしないほうがいいです」

生徒にとってゴミ問題は問題ではありません、なぜならば、

「私には関係ないから、知ったことではないから」

「自分ひとりが考えても無駄だから」

「フツーだれも問題にしないから、事実私は考えたこともないから」

「私は別にゴミで困っているわけではない。仮に問題になったとしても私はもうこの世にいない、ただ破滅が待っているだけだから」

「ゆくゆく科学が発達して、いずれは誰かが解決してくれることだから」

私が教室で前にするのはこのような生徒たちなのです。このような生徒た

ちの中に（単なる知識の充填ではなくて）環境問題に対する「問題解決能力」を育てようとするならば、一体どんな授業をすべきなのでしょう。

それは、次のような方向を持った授業でなければなりません。つまり、今見てきたような生徒たちが持っている問題傾向、すなわち、生活自体への無関心、環境・社会問題への無力感、現状への居直り、未来への想像の欠如、科学信仰といった認識（価値観、世界観）を問題とし、これに変化を生じさせるような目標を持った授業です。

長年の生活の中で培われた強固な生徒の認識は、たかだか数時間の授業でそう簡単に变化するものではありません。しかし、以上の問題傾向を解決するための努力なしには有効な環境教育はありえないと考えます。

これから述べることは、以上の目標を持った授業を作るための提案です。



生活・社会・自然を吟味する授業を

私は生徒を前に授業をしつつ、環境教育は現在考え実践されているよりも、より生徒中心で、なおかつ取り扱う範囲の広い弾力的なものでなければならぬ、と考えるようになりました。

具体的には、環境問題に限らず、生徒にはもっと「生活・社会・自然を吟味する」経験をさせなければならない、ということです。言い換えればそれはこれまで生徒が生活・社会・自然に対して持っていた「常識」や「フツー（普通）」に亀裂を生じさせ、考える契機を作るということです。

次に私が行なっている2つの授業を紹介しつつその実際を述べてみようと思います。

第一に「ニワトリ狩り」という授業を紹介します。この授業は大規模な環境問題を取りあつかう以前の問題として、生活そのものを題材としてとりあげたものです。

テキストとして、私は鳥山敏子著『いのちに触れる』を使います。生徒に与えられる問題は『「ニワトリ狩り」を4年生にしてもらおうという授業があります。ニワトリを殺して食べるための授業です。仮に自分が親ならあなたは自分の子どもをこの授業に参加させますか?』というものです。

この授業で私は生徒の「ニワトリ狩り＝ザンコク・カワイソウ」という単純な思い込み、つまりこれまで生徒の持っていた「常識」に亀裂を生じさせます。これに対して、生徒は一旦は「フツー誰だって殺されればかわいそうと思うはず」などと抵抗します。しかし、結局は生徒は「食べる＝他者の命を奪う」と

いう事実の前に立たされ、考え込まざるをえない状況に追い込まれます。その結果、生徒たちは様々な経験や意見を出し合い、これを交換することになるのです。

「ニワトリ狩り」の是非の吟味を経て、さらにさまざまな内容をこの授業は扱います。たとえば



ニワトリをさばく生徒

「手羽先やささ身はいったいニワトリのどの部分なのか?」といった食物に関する知識について、また「効率よく肉をつくるための飼料要求率」といった経済性の問題、さらには「抗生物質の使用・外国人労働者に頼る経営」といった現代のニワトリ生産の抱える問題などです。

つまりこの「ニワトリ狩り」という授業は、鶏肉というごく日常的な話題からはじまって、それこそありとあらゆる科目の知識を含んで成り立つような授業なのです。

このような一連の授業のなかでは、教科や科目はもはやあまり意味を持ちません。反対に「ニワトリ狩り」を「理科的」問題として「食物連鎖」や「エネルギーの流れ」の観点のみでとらえてもそれはあまりに一面的で、時には危険ですらあります。なぜならば少なからぬ生徒が自分の「食」を正当化するために、「食物連鎖」につらなって、「弱肉強食だからしかたがない」と言いだすからです。

余談になりますが、理科の教科書には「弱肉強食」という言葉はありません。しかし、生徒はかなりの割合で「食物連鎖＝食う食われる＝弱肉強食」という図式を頭に入れて来ています。このようなすさんだ思い込みを生むような「理科」が放置されているのは疑問です。

ともあれ、生徒はこのような授業を通じて、自分の生活とその生活を支える事実についてもっと考える契機を持たねばなりません。また、そのためには、「ニワトリ狩り」に限らず、生徒の生活経験や興味を教材選択の出発点に置いた、既成の教科、科目を超えた弾力的な教材の開発が求められるのです。

次に「イルカ裁判」という授業を紹介します。

生徒に与えられる問題は「漁民が捕らえておいた漁場を荒らすイルカを、動物保護団体のアメリカ人が逃してしまった。このアメリカ人は有罪か、無罪か。あなたが裁判官になって判決を下すこと」といったものです。

とにかく生徒は裁判官なのですから、自分の頭で判決を考えなければなりません。生徒は、私から「判決を下す裁判官は『むずかしい問題で悩んじゃった』なんて感想を言ったりしないからね」などとクギを刺されつつ、頭をひねって自分なりの結論を出し、それを公表する責任に耐えなければなりません。

私になるべくこの裁判に関する事実や発言をたくさん提供し、腕を組んで見ていると生徒は無罪と有罪のさまざまな判決とさまざまな判決理由とを書き上げます。そして、何枚かの判決が印刷、配付され、生徒たちはどんな判決がはたして妥当なのかを比較検討することになります。

この授業を通じ、「他者と意見を交換し戦わせるという行為の重大さや面白さに気づいた」といった感想がたくさん出てきます。しかし、その一方で、次のようなよくある生徒の感想に私は当惑してしまうのです。それは「授業を通して一番思ったのは人はそれぞれ自分の意見を持っていて、とてもすごいと思った」といったものです。

なぜ生徒は高校生になってまで「クラスメートが私とはまったく違う意見を持っている」といったことに驚かなければならないのでしょうか。なにしろこのことはウラを返せば「これまで私は『人はそれぞれ自分の意見を持っている』という事実気がつかなかった」ということなのです。

教員（教科書）側の意見なり見解が無条件に生徒に流入するのが当たり前の今の授業の中で、生徒のこういった状況は当然の成り行きかもしれません。しかし、一方的な授業が続いてきたがゆえに、生徒は対立した意見を比較したり批判したりする経験も力にも欠けています。ひどいときには「自分の意見は意見なんだから人からとやかくいわれることはない」などと居直ることすらするのです。それゆえ私は一層「論争を含んだ教材を考える」機会を増やそうと思うのです。

論争を含んでいるからこそ環境「問題」なのです。「自然は大切」を理解するには「開発は必要」という立場からの意見をも吟味する必要があります。同様に、「ゴミ問題」を学ぶのならば「ゴミ問題はしかたがない」という立場からの意見もかならず必要です。第一、「ゴミ問題は問題だ」という結果ミエミエの授業では、生徒は深く考えもせず教員の顔色を伺って「ゴミ問題は問題だ」と繰り返すに決まっているのですから。

くだけで言うなら、環境問題を扱う時、生徒は「環境教育の授業？ ああ、『地球に優しく』って書けばバッチリよ」と考えやすいのです。環境問題はそんなに「優しく」ありません。それゆえ教員には、生徒に気安く「地球に優しく」などと言わせる隙を与えないような周到な教材の準備が要求されるのです。



環境教育を「ブームと徳目」で終わらせないために

「地球にやさしく」で代表される、環境問題「ブーム」が続いています。同時に、すこしづつ環境教育的内容も授業に取り込まれるようになりました。しかし、その一方で、「環境問題は自分にとって問題ではない」と考える生徒はまだ数多く存在します。それどころか、生徒自身が「社会の一員として、また自然界の一部として毎日くらしている」という実感すら持ちえなくなりつつあり、むしろそこに今日の環境問題を引き起こす原因があると私は思うのです。

多くの生徒は「自然は大切」であったり「ゴミ問題は問題」ということを表向きは了解していても、その本音の部分で「自然は大切でなく」「ゴミ問題は問題でない」と考えています。

例えば、単純に「自然は大切ですね？」あるいは「ゴミ問題は問題ですね？」と問えば、ほとんどの生徒が「ハイ」と答えるのです。ところが、さらに突っ込んで「自然は便利さ清潔さを犠牲にしても守るべきですか？」と質問するととたんに「ハッキリいって……」などといったセリフに続いて本音が姿を表します。

どうしてこんなことになるのでしょうか？それは、生徒たちは「自然は大切だ」「ゴミ問題は問題だ」「生き物を殺すのはよくないことだ」というコトバだけを（徳目だけを）繰り返し繰り返し、あたえつづけられてきたからです。考えてみてください。学校で、テレビ番組で「自然は大切でない」とか「ゴミ問題は問題ではない」とか「生き物を殺すのはいいことだ」といわれることはまずありません。

自然保護について言えば、生徒には直接に自然に触れる機会があまりに少なく、自然を守るということについて具体的に考えたり、行動したりする経験がほとんどありません。また、身近に思われるゴミについても、家族の誰かがゴミを処理してくれていれば生徒自身の目の前からゴミはなくなり、特に問題に感じられるような話題ではありません。さらに、ニワトリ狩りについて言えば、自らニワトリの命を奪って食糧にする必要もなく、ニワトリは常にどこかのだれかが殺してくれています。

要するに、自然も、ゴミも、ニワトリ殺しも、自分とは「カンケーナイ」これが生徒の実感です。しかしながら、頭には「自然は大切だ」「ゴミ問題は問題だ」「殺すな」という言葉だけが強く記憶されている、このアンバランス。こんなものは、コンビニ使い捨て袋に「エコライフしましょ」と印刷しているようなもので、なるだけ早く消滅したほうがいいのです。

大雑把に言えば、生徒はこれまでいろいろな場面で（例えば学校の作文で）深く具体的なレベルで考えることを省略して「自然は大切だ」「ゴミ問題は問題だ」「生き物を殺すのは残酷なことだ」という返事だけしておけばよかったです。こんな状態が続くかぎり、いつまでたっても、いかなる問題も、生徒には切実な問題とはなりえません。

環境教育には段階的な目標があるとされています。つまり「関心⇒理解⇒行動」「親しむ⇒知る⇒守る」といった段階を通じて環境教育を、ということです。それに異論こそありません、がしかし実際に環境問題を問題にしてみると、今の生徒のなかには「関心」を持ってみたり、「理解」しようと努力したり、正しいと思われる「行動」を試みたりすること、これら全てを拒もうとする傾向がそうとうはびこっていることに気づかされます。殊に問題の理解と行動の間には相当大きな溝があるように私には思われるのです。

つまり、私の見るところ多くの生徒ができればさまざまな問題と「カンケーナイ」ままでいたいのです。そんな生徒たちとの毎日のつきあいの中から私は「生活・社会・自然を吟味する」授業を作ってきました。だから、私の授業はいつでも「考えすぎると人間の生活は成り立たなくなる」などと逃げだす生徒との綱引きです。

その綱引きの中から、できれば環境問題を理解して行動できる生徒が、そうでなければ、せめて自分の生活に興味や関心を持ち合わせた生徒が現れてくれることを私は望んでいるのです。



「技術教室」を飲んで 栄養をつけよう!!

《効能》

授業がうまくなる。しかし飲み過ぎると不眠症になる

おばあちゃん

橋本 靖雄

私にとって、祖母はおばあちゃんであって名前がなく、また字が読めない人であった。孫どもはもとより、周囲では皆おばあちゃんとしか呼ばないのだから、無理はない。祖父は表札に名が出ているし、手紙も来る。どこの家のおばあさんも同じなのだろうと思っていた。少し大きくなって、おばあちゃんにも実は名前があるのだと知ったときは、大変奇異の感に打たれた。

「更級日記」や「蜻蛉日記」の著者の名が伝わらず、菅原孝標女とか藤原道綱母としてしか記されぬのと同じような事情によるものであろう。つまり、いつも家の中にあって外の社会へ出て行くことがないから、名前はあってもそれをを用いる機会はなく、親族の呼称だけで足りる、そういう存在であった。

そういう存在であったにしても、上の著者たちは、物語を読んでそれへの憧れを書き綴るとか、自分と交渉のあった男に対する思いを秘かに書き留めておくとかしていたのであった。千年も前にそういう女があった一方で、わが祖母たちの家系は——といっても明確にたどれるわけもないが——読み書きなど習う機会もない階層の中に続いていたのであった。ついでに言えば、あちらは歴史に記録されているが、こちらは、いつどこまでどうであったかも問題にされない。

子どものときは、世の中の誰もが自分と同じだと思い込んでいるが、次第に広い世界へ出て行くにつれて、差異のあることに気づき、自分が他と異なる（他が

自分と異なる）ことを自覚せざるを得なくなる。それにしても、私にとって祖母というものはこうなのであった、ということが芯にある。これが大多数の場合であるかどうかは、統計も記録もないから、主張することもできないが、長らくそう思い込んでいたのは確かである。とにかく、そうでないよそのお祖母さんの話を聞くと——たとえばブルーストの中に出て来る祖母や三島由紀夫の祖母——そういうお祖母さんもあったのか、と驚かざるを得なかった。芯のところにあるものは偏見というほかはない。それはしかし修正のしようもなく、私の氏素姓の証しとなる。だからといって、そこに拘わって拗ねていても始まらない。あらかたの人はそれを乗り越えることで生きて行く。しかしこの種の偏見が多くの場面で物の見方に影響を落すことが多いのは確かであって、それを偏見として自覚しているほうが健全である。

文字を知っている者は文字に頼り過ぎるが、文字を知らない人は記憶力だけが頼りだから、一度聞いたことは忘れないよう努めたことだろう。私は父方母方どちらの祖母からも外孫であったからいっしょに暮らしたことはなかった。その記憶でも、祖母は物知りであった。

今周囲を見まわしてみると、わが祖母たちのように見るからに老婆然とした“おばあちゃん”など一人もいないのに気づく。祖母の着物は仕立て直して男の私が着られるほど地味なものだったが、今はどこのおばあちゃんも華やかである。

山形県新庄市立明倫中学校で1993年1月13日、当時同校1年生の児玉有平君が体育館用具室内で、巻いて立て掛けてあった体操用マットの中で逆さまになって遺体で発見された事件で、山形県警はA、B、C、D、E、F、Gの7名の少年を逮捕したが、A、B、Cの3少年は、昨年8月、山形家

裁で「無罪」にあたる「不処分」になり釈放されている。これは、はっきりしたアリバイがあって、現場に居なかったことが証明されたことによるが、いったん警察の調べで「自白」し、昨年3月、少年院送致の保護処分が確定したD、E、教護院送致が確定したFは、犯行を否認し、いじめによってマットに押しこんだ事実はないとし、付添人弁護団も「事故死」説をとった。しかし、保護処分の取り消しの訴えは最高裁まで行って棄却され、刑事事件の再審請求にあたる「取消し申し立て」を山形家裁に行なっていたが、94年10月14日に同家裁で審判が行なわれ、斎藤清文裁判官は、初等少年院送致のD、E君に「非行事実がなかったことを認め得る新たな資料があるとは言えない」との理由で申し立てを棄却。教護院送致のF君には「すでに保護処分の執行が終了しており、訴えの利益がない」として申し立てを却下する決定をした。

弁護側は、「死因は司法解剖で示されたマットの圧迫による窒息死ではなく、外傷も暴行によるものではない」と主張したが、決定は「少年側の鑑定通り死因が異なっても、原決定が認定した非行事実と矛盾しない」「外傷もマット内に落ちた



マット死事件で山形 家裁申し立て却下

時に生じたと認めるべき証拠はない」とした。これに対し、少年側の付添人弁護団は記者会見を行ない直ちに抗告の手続きを取ることを明らかにし、少年や家族らも「徹底的にたたかう」と意志統一していることを発表した。こうして、この事件は仙台高裁で争われることになりそうである。また、

少年院、教護院送りにはなっていなかったが、児童福祉司指導の措置が取られたG君は「処分無効の確認を求める訴え」を山形地裁に6月9日に起こしている。最近では8月号の本欄でも取り上げたが、はじめ「主犯」とされたAを含めA、B、Cの三少年が「無罪」にあたる「不処分」になったのは、はっきりしたアリバイがあったからであった。少年院送致のD、E君も、近く少年院を出る予定だが、現在の法律では、少年院や教護院の収容が終わってから、これを取り消して名誉を回復する方法がないというの大きな問題である。

少年を扱う家庭裁判所の審理は成人の場合に比べて人手不足もあって、十分な審理が尽くせないという問題があり、弁護側が提出した「新たな証拠」に対する納得のいく審理がなされていないということは弁護側の指摘する通りだと思う。亡くなった児玉有平君のお父さんは、あきらめきれない気持ちのようであるが、死亡原因などは科学的な検証をつめて行く必要がある。成人の裁判でも「再審の門」を開かせることは大変であった。闘う決意を決めた少年たちにも拍手を送りたい。(池上正道)

家庭科教材を技術教育的視点で 再編成した実践(16)

奈良教育大学
向山 玉雄

8. 研究・実践がおよぼした影響

(1)家庭科教育への影響

実践は各方面に大きな影響を与えた。実践は「家庭科教育の実践」であるから、当然のことながら「家庭科」教育「技術・家庭科」教育には影響が大きかった。

この実践は、よく岡邦雄の提唱した「ポツなし技術家庭科」と混同されるが、私がこの連載で取り上げたのは、ポツなし技術家庭科としての実践ではなく、あくまでも技術教育的視点で再編成した家庭科教材の実践である。

家庭科教育への影響については、すでに繰り返し述べてきたことであるが、なによりも、家事・裁縫の時代から、古く長い伝統的な家庭科観を打破して、家族の生活の単位である「家庭」という限定された枠内でなく、生産とのつながりの追究、家事処理技能教育としての家庭科教育でなく、ヒトが人間らしい生活をするために基本的に身につけなければならないものとして食物や衣服という方向に変わっていったことである。内容的にも、献立学習のなかの食品から、調理材料としての食品という視点、家庭で衣生活を送るための衣服から、人間のからだを被い、生活・労働のための被服というような、教材の視点を変えた見方が可能なことが理解されていった。また、技術の本質的な構成部分である「道具」の重要性、「材料やその加工」という側面にも目がいくようになり、家庭科を科学的に構成する一つの側面が見えるようになっていった。

このことは、変化しにくい教科書にも一定の影響があらわれる。

ある社の被服(1)の教科書の目次を見よう。

《昭和56年度版》

作業着の製作

I 製作の計画

1. 作業着の条件

《昭和62年度版》

作業着の製作

I 人と被服

II 布の成り立ち

- | | | |
|---------------|------------|--------------------|
| 2. スモックの形 | 1. 布を観察しよう | 2. 布のいろいろ |
| 3. 型紙とからだとの関係 | | |
| 4. 型紙の選び方と補正 | III | からだと被服の形 |
| 5. 布地 | 1. | からだの形を観察しよう |
| II 製作の準備 | 2. | 衣服の形をつくってみよう |
| 1. 材料の見積もり方 | 3. | 衣服の形を調べよう |
| 2. 製作の手順 | IV | 製作の計画 |
| 3. 用具・機械 | 1. | 作業するにはどのような条件が必要か |
| III 製作 | 2. | スモックの形はどのようになっているか |
| 1. 裁ち方 | 3. | 型紙の選び方と補正 |
| 2. 本縫い | 4. | 用具・機械 |
| 3. 仕上げ | 5. | 製作の準備をする |
| 実習の反省 | V | 製作 |
| IV 作業と被服 | 1. | 布を裁つ |
| | 2. | 本縫いをする |
| | VI | 衣生活への活用 |

(2)技術科教育への影響

技術科教育というよりも技術科教師に与えた影響というほうが正確であろう。技術と家庭科教師が同じ場で研究する組織形態をとる産教連では、家庭科の食物は、栄養素中心で献立学習に偏っていること、被服は、どこから見ても女子のための教材で男女共学にはふさわしい内容になっていない、などという批判的意見が技術科教師のなかから出ていた。それらを受けての再編成だったので、研究が形に見えるようになり、考え方も教材も共学にふさわしい内容になってくると、技術科教師が積極的に研究・実践を手伝うようになっていった。

研究・討論への積極的参加はもちろんであるが、実践面でも技術科教師が授業を受け持つようになる。その一つは、調理の前段としての栽培学習を実践することや、被服の前段としての織り機の製作を実践することなどに現れる。さらに技術科教師自身が栽培や木工の続きとして食物や被服の一部を教えてしまうという人もでてくる。もっと発展した形態としては、職場の教師集団が授業研究を積み上げることによって、技術も家庭も基礎的なことは教えられる力量を身につけ、他教科並に学年単位に分けて、一年は技術科の先生が、二年は家庭科の先生が教えるという学校もできて、学習形態も時間割もシンプルでやりやすいという報告もあった。

9. 産業教育研究連盟の運動としての側面

産教連は、毎年その年の活動方針を総会にかけて公表している。この活動方針に「家庭科教材を技術教育的視点で再編成する実践」を掲げたのは1969年(昭和44年)のことである。以後1977年まで続く。

1969年以前は「女子の技術教育」という観点で取り上げられ、それが「男女共学」へと進むので、この三つのテーマは一連のつながりのものである。

1964年の活動方針には「家庭科の教科構造論が技術科論争のように具体的に進展していないので、研究の方向に相違点がある」とし「女子の特性として伝統的に押しつけられてきた被服製作学習や調理学習は、加工学習として組み換えられないか」と書かれている。また1968年の活動方針では「まず、職場や地域で、技術科、家庭科の教師が共に両方の内容について話し合うなかで、実践のあしがかりをつかむ方向で運動しています。そして家庭科の被服材料なども繊維材料、布加工という面で技術教育と統一する方向で研究が進んでいる」と書かれている。つまり、すでに60年代にあたためていた方向がはっきりした見通しが立つなかで、1969年に活動方針として登場する。また、1977年の活動方針では「家庭科教材を科学的、実践的に整理します」となり、その中では「被服、食物の分野を技術的視点から整理するという課題は、ほぼその目的を達しつつありますが、さらに科学的実践的にその内容の確立を図ります」と解説している。つまり、この段階で活動方針から降ろしたということになる。男女共学・女子の技術教育・家庭科の再編成は産教連が一貫して取り組んだテーマではっきりした形の成果を上げた主要なものともみることができ。今後、教科編成や教育制度に技術教育を位置づけるうえで貴重な遺産となろう。

最後に「技術的視点」と「技術教育的視点」についてふれておく。活動方針の中にもこの二つが使われているが、これは実質的には同じ意味である。筆者は1966年から1977年7月まで産教連の事務局長を勤め、毎年活動方針を検討してきた。運動の途中で「技術的視点」が、「家庭科の中の技術(技能)面を重視する意味」ととらえられている場合があることを知り、以後努めて「技術教育的視点」で通すようところがけてきた。この場合の技術教育的は産教連の技術科教師が目指した技術教育体系の考え方とほぼ同方向の意味である。

この連載はしばらく休みとします。永いあいだ愛読くださる有り難うございました。連載中いろいろな手違いで番号の不整合なところがありご迷惑をかけました。目次を再録して終わりたいといたします。

「家庭科教材を技術教育的視点で再編成した実践」目次

見出し	連載番号・年月・No.
はじめに	
1. 家庭科を技術教育的視点で再編成する研究が生れた時代の背景	63-1 (1993/7・No.492)
2. 植村千枝の研究過程	
(1)技術系列(工的内容)の学習時代	
(2)女子にもまともな技術教育を	
(3)女子の工的分野充実のための実践	64-2 (1993/8・No.493)
(4)男女共学のとりくみ	65-3 (1993/9・No.494)
(5)加工学習の発想と被服教材 加工学習を系列化する試み	66-4 (1993/10・No.495)
(6)被服分野の全体構想	
(7)自主テキスト「布加工の学習」の編集・発行	67-5 (1993/12・No.497)
(8)テキスト「布加工の学習」	
(9)研究の流れの概要	68-6 (1994/1・No.498)
3. 小松幸子の研究と実践	
(1)研究の概要	
家庭科教育を見直す 産教連との出会い 自主編成教材にとりくむ	69-7 (1994/2・No.499)
教材の科学性や法則性を追究 技術教育的視点による再編成 巨摩中の教育と家庭科の実践	70-8 (1994/3・No.500)
(2)巨摩中の授業の中から見えてきたもの 「ウスで小麦粉を粉にして調理する」授業 米を使った授業	71-9 (1994/4・No.501)
「ズボンづくり」の授業 授業の流れの概要	72-10 (1994/5・No.502)
(3)巨摩中学校家庭科領域の指導計画 巨摩中学校の布加工(被服)の指導計画	73-11 (1994/6・No.503)
巨摩中学校食物学習の指導計画	74-12 (1994/7・No.504)
(4)巨摩中実践の評価 技術・家庭科男女共学実践を広めた功績 授業研究の場として 単一教科としての「技術家庭科」の試み 家庭科教育としての評価 教科論への批判	75-13 (1994/8・No.505)
4. 産教連編『食物の学習』の発行	
5. 『技術教室』誌にあらわれた実践の広がり	76-14 (1994/9・No.506)
6. 『技術教室』誌にあらわれた実践の広がり(続)	
7. 男女共学の広がりとは技術教育的視点で再編成した実践	77-15 (1994/10・No.507)
8. 研究・実践がおよぼした影響	78-16 (1994/12・No.509)

1994

定例研究会 産教連研究会報告 理論研究会

東京サークル研究の歩み

その9

〔10月定例研究会報告〕

会場 麻布学園 10月22日（土）15：00～17：30

これからの技術教育・家庭科教育をどうする？

今年の全国大会（産教連主催）では、技術教育・家庭科教育をこれからどのように進めていったらよいかの今後の課題として残った。これにかかわって、目次伯光氏（元中学校教員）がこの大会で一つの問題提起を行った（本誌1994年11月号65ページ参照）が、十分に討議をする時間がとれなかった。そこで、定例研究会の場で再度提案してもらい、討議することとした。

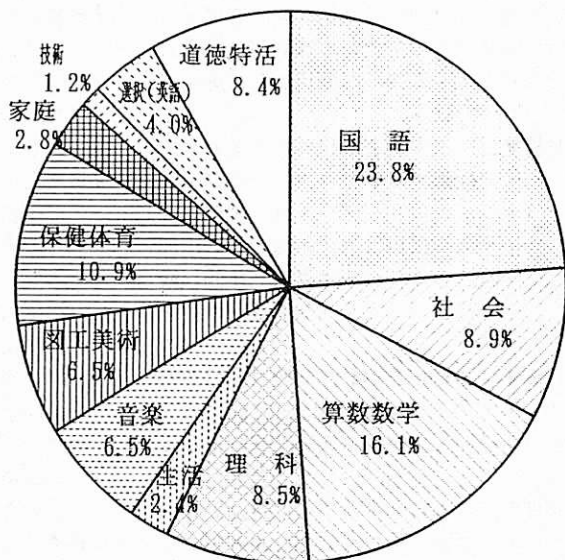
目次氏は、「板倉聖宣氏（昨年 of 全国大会 of 記念講演講師）の論文によると、学校教育を『国民教育・教養教育・専門職業教育』の3つに分けて考えてみたいと述べている。この分類に従うとすると、中学校で現在行なわれている技術・家庭科の授業は教養教育ではないのか。そうだとすると、教養教育として技術・家庭科を再編成し、自由な発想で教材を零から作り出していこうではないか」という、かなり大胆な提案をされたが、参加者はこれからの技術教育・家庭科教育のあり方を模索している最中であったので、活発な意見交換がなされた。なお、会場校の麻布学園でとれた野菜を使って、野本勇氏が作られた豚汁が会の最後に参加者に出された。

学校教育を前述の3つに分けるといふ板倉氏自身の分類のしかたに話題が集まった。今回の研究会はこの分類のしかたの是非を問題にする場ではなかつたので、板倉氏の分類にそつて討議を進めていくこととした。ただ、分類に使われている言葉の意味だけははっきりさせておく必要があるといふことで、参加者の向山玉雄氏（奈良教育大）から詳しい補足説明がなされた。目次氏は「技術・家庭科を専門職業教育と考える人がいたらこわい」と述べていたが、その

ように考える参加者は一人もいなかった。

『生活に役立つ技術……』ということをよく耳にする。たとえば本立を作ったことが今の生活に役立つかと聞かれれば否と答えるだろう。学習したことが明日からすぐに役立つと考えずに、何十年先になるかわからないが、将来役に立つと考えてもよい。そう考えると、この言葉の持つ意味を追究していくことは、この教科の性格を見極める上で大変重要になってくる」 「社会状況の変化もあって、最近の子どもは遊んでいない。そのため、体験が極度に不足し、頭ではわかっている、体で覚えていないので、いざやらせるとほとんどできない場合が多い。こうした子

どもを前にしたとき、いわゆるキット教材ではなく、素材から加工させる教材を考えていかねばなるまい」 「授業をしていて、子どもによる生活体験の差が広がってきているのを感じる。これは、その子どもを育ててきた親の意識のちがいが反映されているとみてよいだろう」 以上、討議の中で出された特徴的な意見を記録した。討議の中で、向



山氏が技術教育・家庭科教育が日本の学校教育の中でいかに軽視されているかを示す一つの資料（上に示す）を提示された。これは、義務教育の教育課程総授業時間数中における各教科の割合を示したもので、考えさせられる資料であった。最後に、定例研究会の予定を記しておく。内容・日程などは都合により変更することもあるので、事前に下記へ連絡をされたい。

12月4日（日） 会場：武蔵野美術大（日本民教連交流研究集會に合流）

1月21日（日） 会場：麻布学園（技術教育・家庭科教育でつきたい学力とは）

連絡先：野本 勇（麻布学園） 自宅 Tel 045-942-0930

金子政彦（玉縄中学） 自宅 Tel 045-895-0241

（金子政彦）

- 18日▼文部省は現在使われている教科書を、最低一冊ずつ全国の公立小・中学校の学校図書館に置くように求める方針を固めた。小学校の教師たちが中学の教科書にふれたり、子どもたちがいろいろな教科書に接する機会を与えるのが狙いという。
- 20日▼三洋電機は特殊な眼鏡なしで立体映像が見られる小型テレビを開発。液晶パネルを使い、家庭用立体テレビやゲーム機、医療用などに応用できるといふ。
- 21日▼財団法人神奈川科学技術アカデミーの極限メカトロニクスプロジェクトチーム（リーダー・樋口俊郎東大工学部教授）は生体組織などの内部や断面をマイクロの世界で立体的に観察できる「三次元内部構造顕微鏡を開発。
- 24日▼文部省と日本私学振興財団は1993年度の私大補助金は前年度より1.9%増加したが、一人当たりでは前年度より三千円減少したと発表。
- 26日▼日本の自動車の生産台数は、1994年は米国に抜かれることが確実となった。生産台数が米国に抜かれるのは15年ぶりという。
- 27日▼ソニーは室内に置いたスピーカーなど離れた場所から音が出ているように聞こえるヘッドホン「パーチャルホン」を開発。米国で発売する。
- 29日▼大阪府立大学工学部の東健司助教授は金属を飴のような状態から大きく引き伸ばす手法を開発。時間優先で1秒10倍、長さを優先するなら10分で80倍に伸ばせるといふ。
- 1日▼国際欧州経済委員会と国際ロボット工学連盟の報告によると、世界の産業ロボット台数は1993年末時点で約61万台にのぼり、前年比6%増となった。うち36万8,000台が日本にあるが、日本の伸びは5%と鈍い。
- 6日▼文部省は来年4月から公立の小中学校の土曜休日を現行の月1回から2回に増やす方針を固め、その是非を協力者会議に諮問した。
- 7日▼山梨県は今年度から県立高校一校で通信衛星を使って予備校の授業を導入することを県議会で明らかにした。公教育として問題という批判の声も上がっている。
- 9日▼文部省の「体力・運動能力調査」で子供達の身体的な力は約三割の項目で東京五輪の時期のデータを下回っているが、反面、子どもたちの体格は大きくなったことがわかった。特に柔軟性の低下が著しい。
- 11日▼金属加工機械大手のアマダは一台で成型や切断、研磨など五役を自動的にこなす金属加工機械を開発。設置面積も小さく、工程間の中間在庫も減らせるという。
- 12日▼文部省は教職員の裁判や懲戒免職の状況などを調べた全国調査で、精神性疾患などで退職した事例の提出を全国の都道府県教委などに求めていることが分かり、教職員からプライバシーの侵害との批判が出ている。
- 14日▼山形県新庄市立明倫中学で昨年起こった児玉有平君のマット死事件で、最高裁で保護処分が確定していた少年3人に対する「再審請求」にたいし山形家裁は申し立てを棄却。3人は仙台高裁に上訴する方針。

(沼口)

『男女共生時代の保育・教育』

諏訪美英・諏訪きぬ A5判 190ページ 2,680円 明治図書刊

いま、伝統的家庭は多くの変化の過程にある。女性の職場への進出、男性の家事労働への参加とともに、親子関係、家庭や結婚観も変化している。このような変化に対応する視点として、本書は2つの視点に絞って考察している。

第1の視点は男女共生を保育・教育としてどう受けとめるかということである。家庭科を含めた家庭政策に反映された家庭の変化を整理しながら、男女共生の課題を第1章でとらえている。

第2の視点は、家庭の変化に幼児教育や学校がどのように対応するか、ということである。第2章では家庭の教育力の低下を考察している。かつて農家の母親は家事・育児の多忙さを減らすために、子どもに手伝わせ、それが結果として、教育的であった。その後の変化を適切にとらえている。

著者の見解では親の教育力の低下の責任は簡単に親に帰するわけにはいかないというものである。家庭における考え方、人間関係、物との関わりなどが総合的に働いて生じた結果である。そこからの再生が幼稚園、保育、学校に課された問題となる。

「母親により大きい責任がある」という性的役割分業観が温存されて、母親が働く権利を妨げている。特に、製造業では日本の女性の賃金は男性比では世界では最低であるということは知られていな

い。そのようなことが今日の若者の製造業離れに影響しているように思われる。母親が製造業で働く喜びを持っていないならば、その子どもにそれを伝えることができないからである。

また、親自身の教育力をどのように再生したら、よいかという点についての提案は示唆に富む提案が多いから、是非、若い未来の親となる人たちに読んで欲しいと考える。親となる意義をふまえて、第4章では男女共生時代の技術・家庭科の問題が論じられている。文部省は学校週5日制の実施を背景とした学習指導要領の改訂作業を来年度から本格的に始める、と報道されている。

この章は教育課程を考える有力な武器となるであろう。情報処理技術が進み、コンピュータを扱わなければ、技術・家庭教育ではないという状況が出てきている。しかし、NC旋盤が普及しても、そのプログラミングは旋盤の技術をもって人ほど上手だという。著者のいう「生活の原型の中での自然との共生」「生活の原型の体験」はもはや教育の中でしかできないという視点を忘れてはならない。

多数の貴重な文献が集められており、単に保育や教育だけの本としてではなく、技術・家庭科の授業や研究に役立つであろう。この点からも読者によって、広く読まれることを希望する。

(1994年9月刊、永島)

1994年「技術教室」総目次

- (1)本目次の分類事項は、産業教育研究連盟の活動にそくして構成した。(下表参照)
 (2)論文が2以上の分類事項に関する場合には、重複させて記載した。
 (3)発行月を各論文の前に数字で示した。
 (4)今年度の総目次は4月号から12月号である。1月号から3月号までは、3月号(記念500号)の総目次にまとめてあるので割愛した。

凡 例

分類項目一覧

- | | |
|---|---|
| <p>1. 技術・労働・家庭科教育</p> <p>(1)現状・課題・提言</p> <p>(2)能力・発達</p> <p>(3)労働と教育</p> <p>(4)技能・技術・技術論</p> <p>(5)教科の性格・目標・意義・理念</p> <p>(6)教科編成論</p> <p>(7)家庭科教育論</p> <p>(8)女子の技術教育</p> <p>(9)教育課程改訂・学習指導要領論</p> <p>(10)内 容 論</p> <p>(11)教材・題材論</p> <p>(12)方法論・授業論</p> <p>(13)教育計画・指導計画</p> <p>(14)教科書問題</p> <p>(15)選択教科問題</p> <p>(16)教 師 論</p> <p>(17)研究・運動・教育研究集会</p> <p>(18)教育史・実践史・産教連史・産教連の活動・サークル・学校訪問</p> <p>(19)産教連大会報告</p> <p>(20)諸外国の教育・情報</p> <p>(21)入試・他教科・進路指導など</p> <p>2. 問題別研究・実践(論文・実践・教材・授業)</p> <p>(1)子 ども</p> <p>(2)集団づくり・教科通信</p> <p>(3)男女共学</p> <p>(4)評 価</p> <p>(5)技 術 史</p> <p>(6)環境・公害</p> <p>(7)教育条件・施設設備・予算・教師</p> | <p>(8)安全 教育</p> <p>(9)工場見学・野外実習など</p> <p>3. 領域別研究・実践(論文・実践・教材・授業)</p> <p>(1)製 図</p> <p>(2)木材加工</p> <p>(3)金属加工</p> <p>(4)機 械</p> <p>(5)電 気</p> <p>(6)裁 培</p> <p>(7)情報基礎</p> <p>(8)食物・調理</p> <p>(9)被服・布加工</p> <p>(10)住 居</p> <p>(11)保 育</p> <p>(12)家庭生活・家族</p> <p>(13)プラスチック・竹・総合実習など</p> <p>4. 教材・教具解説 図面・製作・利用法</p> <p>5. 幼・小・高校・大学・障害児教育(遊び、工作、労働、職業教育)</p> <p>(1)幼児・幼稚園</p> <p>(2)小 学 校</p> <p>(3)高 等 学 校</p> <p>(4)大 学</p> <p>(5)障 害 児</p> <p>(6)企業内教育</p> <p>6. 連 載</p> <p>7. 科学・技術・産業(解説、情報)</p> <p>8. そ の 他</p> <p>(1)時評・情報・トピック・資料・今月のことば</p> <p>(2)声明・決議・要望</p> <p>(3)講演・対談</p> |
|---|---|

特 集

4 私の授業方針と年間計画 5 教師・教育条件・
選択教科問題 6 自主教材・市販教材と電気学習
7 共学の被服学習 8 屋上でもできる栽培学習
9 食をとらえなおす 10 物を作る原形を教える木
材加工 11 子どもの発達を保障し賢くする技術教
育・家庭科教育 12 家族・家庭と「家庭生活」

1. 技術・労働・家庭科教育

1-(1)現状・課題・提言

11 子どもの発達を保障し賢くする技術教育・家庭
科教育=常任委員会 1-(19)

1-(9)教育課程改訂・学習指導要領論

10 中学校技術教育の再検討=梅田玉見 5-(4)
11 新学力観問題をどう考えるか「新学力観と評価」
分科会 1-(19)、2-(4)

1-(10)内容論

9~10 共学「被服」の活性化をめざして(1)、(2)=
植村千枝 2-(3)

1-(11)教材・題材論

4 指導計画と教材=藤木勝 1-(13) 9 伝統文化
と技術を学ぶ=青木香保里 10 「木工」と「住居」
の接点を探る=飯田朗 3-(2)(10) 11 特別講座：
私の教材教具開発法=谷中貫之 1-(19)

1-(12)方法論・授業論

9 理論と実践の関係を考える=武藤徹 12 国際家
族年と「保育領域」の課題=諏訪きぬ 3-(1)(12)

1-(13)教育計画・指導計画

4 年間計画を立てるにあたって=平野幸司 3-
(2) 食物の年間指導計画=村上恵子 3-(8) 「情
報基礎」と私の年間計画=小林利夫 指導計画と
教材=藤木勝 1-(11) 年間計画を考える=荒谷
政俊 私の年間計画=足立止 機械学習を中軸に
据えて年間計画=大谷良光 3-(4) 発達段階を
考慮にいたした年間計画編成を=野田知子 3-(9)
男女共学「保育」の授業=竹田幸恵 2-(3)、3-

(1) 5 私の指導計画=後藤昌弘 7 年間計画と指
導目標=野本恵美子 11 育てたい能力と学ばせた
い中身=「年間計画と領域選択」分科会 1-(19)
共学を前提としたカリキュラムを=問題別分科会
「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」 1-
1-(19)、2-(3) 領域にとらわれないカリキュラム
づくりを=終わりの全体会 1-(19)

1-(14)教科書問題

5 教科書をよくする運動を=金子政彦 2-(7) 技
術・家庭教科書特例本考=木村廣男 12 「家族」内容
をアメリカの教科書から学ぶ=田中弘子 3-(12)

1-(15)選択教科問題

4 選択教科家庭科における教材開発=鈴木洋子/
伊藤妙子 3-(9) 5~7 中学校「選択教科」と技
術科(1)~(3)=飯田朗 中学校選択教科問題の本質
=池上正道 11 実像が見えてこない苛立ち=「選
択教科の運営はこのままでよいか」分科会 1-(19)

1-(16)教師論

5 教育実習生指導の課題=藤木勝 2-(7)

1-(19)産教連大会報告

11 子どもの発達を保障し賢くする技術教育・家庭
科教育=常任委員会 1-(1) 生活様式・文化を支
える教材=「加工・被服・住居」分科会 3-(2)(3)
(9)(10) どこまで教える必要があるのか? =「電気・
機械」分科会 3-(4)(5) 11 食べ物土が育むもの
「栽培・食物」分科会 3-(6)(8) 関心が高かった
家族問題「家庭生活・保育」分科会 3-(1)(12) 導
入期から活用期へ! =「情報基礎」分科会 3-(7)
新学力観問題をどう考えるか「新学力観と評価」
分科会 1-(9)、2-(4) 育てたい能力と学ばせた
い中身=「年間計画と領域選択」分科会 1-(13)
どの領域でも環境教育を=「環境教育実践のため
の教材と指導」分科会 2-(6) これからの技術教
育実践のあり方=「小・中・高一貫技術教育・障
害児教育・生涯学習」分科会 5-(2)(3) 実像が見
えてこない苛立ち=「選択教科の運営はこのまま
でよいか」分科会 1-(15) 共学を前提としたカリ

キュラムを=問題別分科会「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」⇒1-(13)、2-(3) 条件改善は急務！=問題別分科会「教育条件をよくするために」⇒2-(7) 主体的情報交換=問題別分科会「研究・実践のネットワークを作ろう」 実技コーナーに参加して=飯田一男 領域にとらわれないカリキュラムづくりを=終わりの全体会⇒1-(13) 11~12記念講演：自然と食と教育を結ぶもの(1)、(2)=坂本尚⇒8-(3) 特別講座：コンピュータ教育と教育評価=宮地功⇒2-(4) 特別講座：蘭草とその製品=小合龍夫⇒7 特別講座：いま徹底的に米問題を考える=坂本典子⇒7 特別講座：私の教材教具開発法=谷中貫之⇒1-(11)

2. 問題別研究・実践(論文・実践・教材・授業)

2-(1)子ども

5 親子伝承教室での風づくり=岩間孝吉

2-(3)男女共学

4 男女共学「保育」の授業=竹田幸恵⇒1-(13)、3-(11) 7 共学家庭一般(衣生活)はこれでいく！=吉田久仁子⇒3-(9)、5-(3) 共学題材ワーキングウェア=首藤真弓⇒3-(9) 8 今こそ栽培を男女共学で=坂口和則⇒3-(6) 9~10共学「被服」の活性化をめざして(1)、(2)=植村千枝⇒1-(10) 11 共学を前提としたカリキュラムを=問題別分科会「技術・家庭科の男女共学をどうすすめるか」⇒1-(13)(19)

2-(4)評価

11新学力観問題をどう考えるか「新学力観と評価」分科会⇒1-(19)、1-(9) 11特別講座：コンピュータ教育と教育評価=宮地功⇒1-(19)

2-(6)環境・公害

8 水と生活環境=小倉紀雄 11どの領域でも環境教育を=「環境教育実践のための教材と指導」分科会⇒1-(19)

2-(7)教育条件 施設設備・予算・教師

5 教育実習生指導の課題=藤木勝⇒1-(16) 教科

書をよくする運動を=金子政彦⇒1-(14) コンピュータ導入の現状と課題=伊東宏起 11条件改善急務！=問題別分科会「教育条件をよくするために」⇒1-(19)

3. 領域別研究・実践(論文・実践・教材・授業)

3-(2)木材加工

4 年間計画を立てるにあたって=平野幸司⇒1-(13) 10木材加工学習と技術的能力形成=小池一清 加工学習の原点は「木材加工」=平野幸司 木材加工学習の視点=藤木勝 杉板こそ加工に適している=岡田孝一郎 ぼぞ組み加工のあるスツール製作にこだわって=安田文明 「木工」と「住居」の接点を探る=飯田朗⇒1-(11)、3-(10) 木材加工を全学年で=下田和実 11生活様式・文化を支える教材=「加工・被服・住居」分科会⇒1-(19)、3-(3)(9)(10)

3-(3)金属加工

4 ぜひやりたい金属加工=金子政彦 11生活様式・文化を支える教材=「加工・被服・住居」分科会⇒1-(19)、3-(2)(9)(10) 生活様式・文化を支える教材=「加工・被服・住居」分科会⇒1-(19)、3-(2)(9)(10)

3-(4)機械

4 機械学習を中軸に据えて年間計画=大谷良光⇒1-(13) 11どこまで教える必要があるのか？=電気・機械」分科会⇒1-(19)、3-(5)

3-(5)電気

6 市販教材に手を加えた教材づくり=金子政彦 安くてすぐにできるカード型I Cラジオの製作=安田喜正 カセットテスタをつくろう=山形明回路計(カセットテスタ)の製作=栗原健次 やさしくてむずかしい自主教材=水口大三 市販教材を活用した授業=橋本敦雄 既成の電池チェッカーから簡易テスタへ=後藤昌弘 11どこまで教える必要があるのか？=「電気・機械」分科会⇒1-(19)、3-(4)

3-6栽培

5 稲を育てよう＝赤木俊雄 8 都会でもトマト・ナスはできる＝野本勇 あそび感覚の栽培＝藤木勝 食物学習を栽培学習で生かす＝石井良子⇨3-8) 今こそ栽培を男女共学で＝坂口和則⇨2-3) 見て！葉っぱの中に青虫＝熊山孝子⇨5-1) 畑・針・プランターがなくてもナスはできる＝下田和実 9 子どもたちにつくる喜びを＝山田ひろ子 11 食べ物は土が育むもの「栽培・食物」分科会⇨1-19)、3-8)

3-7情報基礎

10 学習と意欲を育てるプログラミング学習＝谷川清 4「情報基礎」と私の年間計画＝小林利夫 11 導入期から活用期へ！＝「情報基礎」分科会⇨1-19)

3-8食物・調理

4 食物の年間指導計画＝村上恵子⇨1-13) 8 食物学習を栽培学習で生かす＝石井良子⇨3-6) 9 食物繊維と健康＝野田知子 やまもちをつくる＝桑名紀子⇨5-2) 伝統的食文化の担い手を育てたい＝浅上友子 おはぎをつくろう＝高橋章子 11 食べ物は土が育むもの＝「栽培・食物」分科会⇨1-19)、3-6) 9 子どもたちにつくる喜びを＝山田ひろ子 12 りんごの皮むきから愛情弁当作りへ

3-9被服・布加工

4 発達段階を考慮にいたれた年間計画編成を＝野田知子⇨1-13) 選択教科家庭科における教材開発＝鈴木洋子/伊藤妙子⇨1-15) 7 身近な材料を用いて染めてみよう＝木村光雄 藍染について＝渡辺一弘 雑草染が小物に変身＝大前宣徳 共学家庭一般(衣生活)はこれで行く！＝吉田久仁子⇨2-3)、5-3) 共学題材ワーキングウェア＝首藤真弓⇨2-3) アイディアいっぱいフォーム作り＝鈴木智子 11 生活様式・文化を支える教材＝「加工・被服・住居」分科会⇨1-19)、3-2)3)10)

3-10住居

10 「木工」と「住居」の接点を探る＝飯田朗⇨1-11)、3-2) 11 生活様式・文化を支える教材＝「加

工・被服・住居」分科会⇨1-19)、3-2)3)9)

3-11保育

4 男女共学「保育」の授業＝竹田幸恵⇨1-13)、2-3) 11 関心が高かった家族問題「家庭生活・保育」分科会⇨1-19)、3-12) 12 国際家族年と「保育領域」の課題＝諏訪きぬ⇨1-12)、3-12) 図書館と連携した「保育学習」＝貴村宣子 家族と保育の接点＝首藤真弓⇨3-12) おもちゃと保育＝荒井智子

3-12家庭生活・家族

4 発達段階を考慮にいたれた年間計画編成を＝野田知子 7 「家庭生活」に小物づくりを＝長谷川圭子 8 試行錯誤の「家庭生活」＝渡辺朋子 11 関心が高かった家族問題「家庭生活・保育」分科会⇨1-19)、3-11) 12 「家族」内容をアメリカの教科書から学ぶ＝田中弘子⇨1-14) 国際家族年と「保育領域」の課題＝諏訪きぬ⇨1-12)、3-11) 家族と保育の接点＝首藤真弓⇨3-11) 家庭経済を消費者センターで学ぶ＝細川律子 家族の役割と人間関係＝大沼洋子⇨5-3)

4. 教材・教具解説 図面、製作、利用法

6 教材開発の裏舞台＝溝口勝彦

5. 幼・小・高校・大学・障害児教育(遊び、工作、労働、職業教育)

5-1)幼児・幼稚園

8 見て！葉っぱの中に青虫＝熊山孝子⇨3-6) 9 子どもたちにつくる喜びを＝山田ひろ子 12 母親の自立と保育＝熊谷孝子

5-2)小学校

9 やまもちをつくる＝桑名紀子⇨3-8) 11 これからの技術教育実践のあり方＝「小・中・高一貫技術教育・障害児教育・生涯学習」分科会⇨1-19)、5-3)

5-3)高等学校

7 共学家庭一般(衣生活)はこれで行く！＝吉田久仁子⇨2-3)、3-9) 11 これからの技術教育実

践のあり方＝「小・中・高一貫技術教育・障害児教育・生涯学習」分科会⇒1-(9)、5-(2) 12家族の役割と人間関係＝大沼洋子⇒3-(12)

5-(4)大学

10中学校技術教育の再検討＝梅田玉見⇒1-(9)

6. 連載

くだもの・やさいと文化＝今井敬潤

4 タケノコ 5 ピワ 6 ウメ 7 モモ(1) 8 モモ(2) 9 ナシ(1) 10 ナシ(2) 11 キウイフルーツ 12 カンキツ(3)エズ

新先端技術最前線＝日刊工業新聞社「トリガー」編集室

4 牛乳がチーズになるように変化するER流体
5 光触媒・光還元メッキ技術の衛生陶器 6 動きやすさと両立したシェイプアップ・ウェア 7 微小機械開発に一步近づく直径1.4mmの超小型モーターを試作 8 都市緑化に新兵器誕生・緑化コンクリート 9 世界最小の物差し「マイクロスケール」 10 水なしで古紙を梱包材に再生 11 アルキメデス法に代わる音響式体積計 12 光ファイバーで大型ディスプレイに動画を映し出す

新すぐに使える教材・教具＝荒谷政俊

4 サイコロ(2) 6 引き出し収納箱 7 カード型データベース 8 簡易制御実験装置 9 サイコロ(3)
絵で考える科学・技術史＝山口歩・三浦基弘

4 経緯儀とフォース橋建設 5 ミシンに付加された小型モーター 6 羊毛工場的大型ジェニー 7 19世紀末のコンベアライン 8 EBANSの自動製粉工場 9 コルニッシュエンジン 10 Warping 11 Drawing Frame 12 レディ・イザベラ水車

文芸・技芸＝橋本靖雄

4 天命を知る 5 芸道一筋 6 職業欄 7 個性 8 手のわるき人 9 差異 10 赤烏帽子 11 器用貧乏 12 おばあちゃん

「新塾」ノススメ 「新学力観」批判

4 「新塾」ノススメ・プロローグ＝小笠原喜康 5

落ちこぼれ それも立派な学力？＝小笠原喜康
6 偏差値バンザイ！？＝小笠原喜康 7 学校5日制で教育を親の手に＝佐藤善一 8 詰込み、教え込み教育？＝沼口博 9 日本沈没Part 2 理科教育が危ない！＝山崎慶太 10 日本沈没Part 2 そして誰もいなくなった数学教育＝佐藤善一 12 ゴミ問題、あなたにとって問題ですか？＝片岡則夫
「家庭」を「技術」の視点でみる＝諏訪義英

4 「技術・家庭科」再考 5 家庭生活の中の技術と教育 6 男女共生時代の技術教育、家庭教育
紡績機械の発展史＝日下部信幸

4 産業革命時の三大紡績(1)ハーグリーブスのジェニー紡機(1) 5(2)、(2) 6(3)アークライトの水力紡機(1) 7(4)、(2) 8(5)、(3) 9(6)クロンプトンのミュール紡機(1) 10(7)、(2) 11(8)、(3) 12 産業革命期の水力式綿紡績工場(1)

パソコンソフト体験記

4 ロゴライター-2＝藤尾真一 5 表計算ソフト・ロータス1-2-3のテスト処理への活用＝加藤淳一 6 タイプ練習ソフト・美佳のタイプトレーナー＝赤澤靖規 7 多目的な総合ソフト Hyper Cube2＝佐俣純 8 超多機能ディスクコピーツールDCOPY＝金子政彦 9 技術学習ソフト 翼＝小池一清 10 プログラム開発リフト Quick Basic＝野本勇 12 教員が開発した情報基礎「オートマ君」＝本多満正

スクラップ＝ごとうたつお

4 人権教育 5 節約 6 アルファ波 7 疲れ 8 中途半端 9 マニュアル 10 息抜き 11 読書量 12 イメージトレーニング

私の教科書利用法

〈技術科〉＝飯田朗

4 たたく、磨く 5 建設に関わる基礎的技術も 6 未来を語り合おう 7 ものを作るのはおもしろい 8 記述のしかた 9 問題 10 不思議で楽しい 12 なぜ技術科が嫌いになるか

〈家庭科〉

4 献立と栄養=浅上友子 5 冷し中華コンテスト=浅上友子 6 砂糖のはなし(1)=青木香保里 7 ↑印のはなし(1)=青木香保里 8 砂糖のはなし(2)=青木香保里 9 寝巻きのはなし=青木香保里 10 オムレツコンテスト=青木香保里 12 ソバのはなし=青木香保里

技術・家庭科教育実践史

4 家庭科教材を技術教育的視点で再編成した実践(9)=向山玉雄・鈴木香緒里 5 (10)=向山玉雄・鈴木香緒里 6 (11)=向山玉雄・鈴木香緒里 7 (12)=向山玉雄 8 (13)=向山玉雄 9 (14)=向山玉雄 10 (15)=向山玉雄 12 (16)=向山玉雄

産教連研究会報告=金子政彦

4 '94年東京サークル研究の歩み(その2) 5 (その3) 6 (その4) 7 (その5) 8 (その6) 9 (その7) 12 (その8)

今月のことば

4 老人は何歳から?=飯田一男 5 被占領時の教科書検定=後藤豊治 6 内なる国際化=古川明信 7 法務大臣の放言と平和教育=平野幸司 8 ロバート・オーエンの教育思想=三浦基弘 9 あなたは、魅力ある授業をしていますか?=熊谷稔重 10 起立する勇氣=保泉信二 11 時代の変革を先導する技術教育を=目次伯光 12 よみがえれ! 蘭草=長谷川圭子

教育時評=池上正道

4 森安九段事件と「少年法」 5 「マツト死事件」と焼却炉焼死事件 6 加害者の親の監護責任 7 「体罰死」の疑いある事故 8 鹿川君の死と児玉君の死 9 激減、丸刈校則 10 「死刑判決」の市川の殺人事件と永山事件 11 服部君射殺事件、民事で勝訴 12 マツト死事件で山形家裁申し立て却下
月報 技術と教育=沼口博 4~12

図書紹介=永島利明

4 世界の環境教育 中山和彦・佐島群己編 5 台湾少年工望郷のハンマー 保坂治男 6 木の命

木の心(地) 小川三夫 7 技術科 教育の現状と課題 桐田襄一 8 宇宙実験レポート 毛利衛 9 マッキントッシュ物語 スティーブ・レヴィ 10 高齢・障害 いたわりの住宅改善プラン 山根千鶴子・後藤義明 11 先端技術への招待 中野不二男 12 男女共生時代の保育・教育 訪談義英・諏訪きぬ

口絵写真

4 真木進 5~6 坂口和則 7~8 真木進 9~10 飯田朗 11 西田泰和 12 真木進

7. 科学・技術・産業・(解説、情報)

9 神津島のクサヤ事情=石井良子 うねり出した施肥技術革新=斉藤春夫 11 特別講座: 蘭草とその製品=小合龍夫 1-1(9) 11 特別講座: いま徹底的に米問題を考える=坂本典子 1-1(9)

その他

8-1(時評・情報・トピック・資料)

8 1日30分の屋上オアシス=谷藤律子

Book=郷力・飯田朗

4 山に暮らす 失われてゆく山の民族学 遠藤ケイ 九輪草の種を差し上げます 金子和子 5 話題源 電気・機械・加工 技術の教室 山水秀一郎 6 障害児の思春期・青年期教育 永野佑子・森下芳郎・渡部昭男 8 隅田川 橋の紳士録 向井裕 9 クラフト・デザイン・テクノロジー ジョン・ベンフォールド 10 手づくり道具で燃焼自由自在 鈴木雅己 子どもと教師とMacintosh 清水英典 12 ワーズ・ワード ジャン=クロード・コルベイユ、マリアン・アーシャンボウ 新学力観をのりこえる 教育科学研究会・坂元忠芳・須藤敏昭編

8-3(講演・対談)

11~12 記念講演: 自然と食と教育を結ぶもの(1)、(2)=坂本尚 1-1(9)

技術教室 | 1月号予告 (12月25日発売)

特集▼関心・意欲・態度と評価

- 社会の変化と評価の変遷 永島利明 ○技術史の導入と自己評価 足立 止
○観点別評価と子どもの力 金子政彦 ○共学における評価と評定 武藤正次
○学校5日制と評価 清重明佳 ○生徒をのばす保育と評価 菊池雅子

(内容が一部変わることがあります)

編集後記

●今年話題になった3R。まず政治の世界の小沢一郎。彼は社会党に秋波を送り、社会党が自民党と連立を組むと、「踏まれても踏まれても、ついてくるゲタの雪」と皮肉る。黒幕。神出鬼没。そして、重要な役どころで出現。今の連合政権は、菓子に例えれば、ドーナツ。リングが自民党。まぶしている砂糖が「さきがけ」。ドーナツの中央が社会党。あるようでないが、ないようで、ある。最後は一郎にバクリと食べられ、解党させられるか。スポーツ界は、鈴木一朗。野球のイチロー選手。シーズン最多安打記録191本を更新、210本を達成。新聞の社説まで賑わす大記録であった。振り子打法で、左右に満遍なくボールを散らす。投手によると、イチローには死角がないのだという。打撃の名人、川上哲治は調子がよいとき、「ボールが止まって見える」と言った。これを引用したある記者の質問に、彼は「止まって見えるわけじゃないじゃ

すか」。しかし、「ボールの縫目が見える」とシャレていうくらいの価値はある。趣味は盆栽だそう。打撃は天才。文学の世界では、大江健三郎。今年のノーベル文学賞受賞者。取材陣に「韓国、朝鮮、フィリピン、中国にも優れた文学者がいる。たまたま私が受賞」と謙虚に語った。「しかし、(私の受賞で)アジア文学の発言権が増す」とも述べた。この発言に、嘘や偽いはないだろう。息子の光さんから「お父さんは芸能界では受け入れられていない」といわれた。しかし、林家こぶ平の祝電に「ノーベル賞をもらって、どうもスイマセン。もうたいへんなんすから」と書いたと弁。来年は基礎教育の3R(読み・書き・算盤)に学び、工学教育の3Rを追究したいものだ。●今月号の特集は「家族・家庭と家庭生活」。論文を読んで、どう教えたらいのか、苦悩がうかがえる。迷い、悩むときほど発展がある。よいお年を！ (M.M.)

■ご購入のご案内■

☆本誌をお求めの場合はお近くの書店に定期購読の申込みをしてください☆書店でお求めにできない場合は農文協へ、前金を添えて直接お申込みください。毎月直送いたします。
☆直送予約購読料は、1年間7800円です(送料サービス)。☆農文協へのご送金は、現金書留または郵便振替(東京2-144478)が便利です。
☆継続してお届け致しますので、中止の際は1ヵ月前にご連絡下さい。
☆1993年3月号以前のバックナンバーのご注文・お問い合わせは民衆社(TEL03-3815-8141)へお願いします。

技術教室 12月号 No.509◎

定価650円(本体631円)・送料90円

1994年12月5日発行

発行者 坂本 尚 発行所 (社)農山漁村文化協会

〒107 東京都港区赤坂7-6-1 ☎03-3585-1141

編集者 産業教育研究連盟 代表 向山玉雄

編集長 三浦基弘

編集委員 飯田 朗、池上正道、稲本 茂、石井良子、植村千枝、永島利明、向山玉雄

連絡所 〒203 東久留米市下里2-3-25 三浦基弘方

☎0424-74-9393

印刷所 (株)新協 製本所 根本製本